

第2章 吉田構内学生会館新営に伴う発掘調査

1 調査の経過

学生会館は本学構成員の学術・文化活動、および課外活動領域の進展と人間的接触・相互理解を基軸とした福利厚生施設として本学希求の学内共同利用施設であった。

新営予定地は構内調査地区割でいうM-14区、吉田遺跡調査団の呼称する第I地区にあたる。付近一帯は現在までに多数の遺構、遺物が確認されており、特に新営予定地西方K・L-14区では弥生時代中・後期の土壌、古墳時代に属すると思われる竪穴式住居跡、土壇、溝状遺構および室町時代の環溝をもつ集落が検出されている。また、南東のN-14区からは古墳時代前期の竪穴式住居跡が検出されており、新営予定地周辺地域はキャンパス内においても遺構の分布密度の極めて高い地域のひとつとして位置づけることができる。

学生会館新営の具体化と呼応して、昭和57年12月資料館は新営予定地内における遺構、遺物の分布状況を把握すべく予定地内3カ所に調査区を設定して試掘調査を実施した。その結果、弥生時代後期の竪穴式住居跡をはじめとして弥生から古墳時代の土壌および中世の土壇、溝、柱穴が検出され、東から西への地山面の下降に対応して遺構は新営予定地西方に向かうにつれてさらに良好な残

存・分布状況を示すものと理解された。これを受けて学内関係諸機関、諸部局との協議の結果、新営予定地を新たに他地域に求め、新候補地の試掘調査を踏まえた上で当初の新営予定地を北方に設計変更することで合意が得られた。そのため昭和58年9月1日から12月24日にかけて新営予定地約2000㎡について人文学部考古学研究室の協力を得て調査を実施した。また、11月25日には現地説明会を実施し、学内外の見学者多数が訪れた。

(河村)

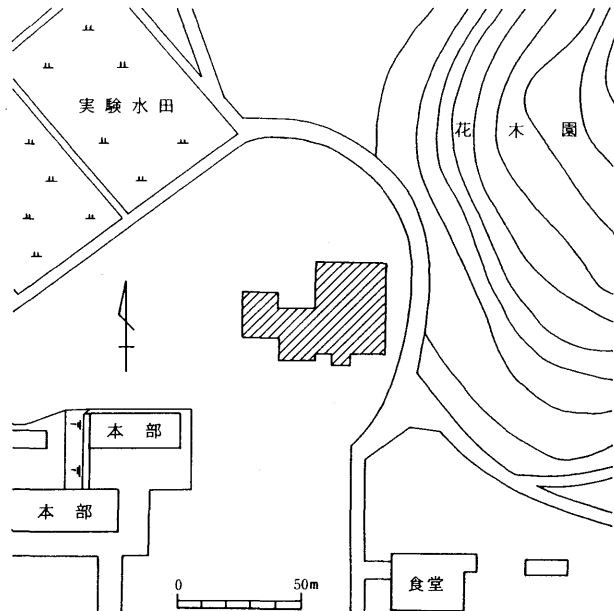


Fig. 1 調査区位置図

2 位置と環境

吉田遺跡は行政上山口県山口市大字吉田1677-1に所在する山口大学吉田構内72万㎡にわたって存在する縄文時代から近世にいたる遺跡群の総称である。本遺跡は山口県のほぼ中央に位置する山口盆地の東縁の一角に展開し、姫山、今山から派生した洪積台地とそれに隣接する沖積低地上に立地する（Fig.2）。北東-南西に開ける盆地の中央部は木戸山山麓に源を発し、小郡湾に注ぐ榎野川が貫流する。左岸では高倉山、黒河内山、右岸では吉敷丘陵から続く^{はたぎ}榎木山、^{すきざき}鋤尖山が聳え立ち、さらにその奥部には県中央部における分水界をなす鳳翻山が悠然たる姿を見せている。

山口盆地における遺跡は縄文時代から中世まで総数約80カ所を数え、主として榎野川氾濫原を除く盆地縁辺部に多く存在している¹⁾。

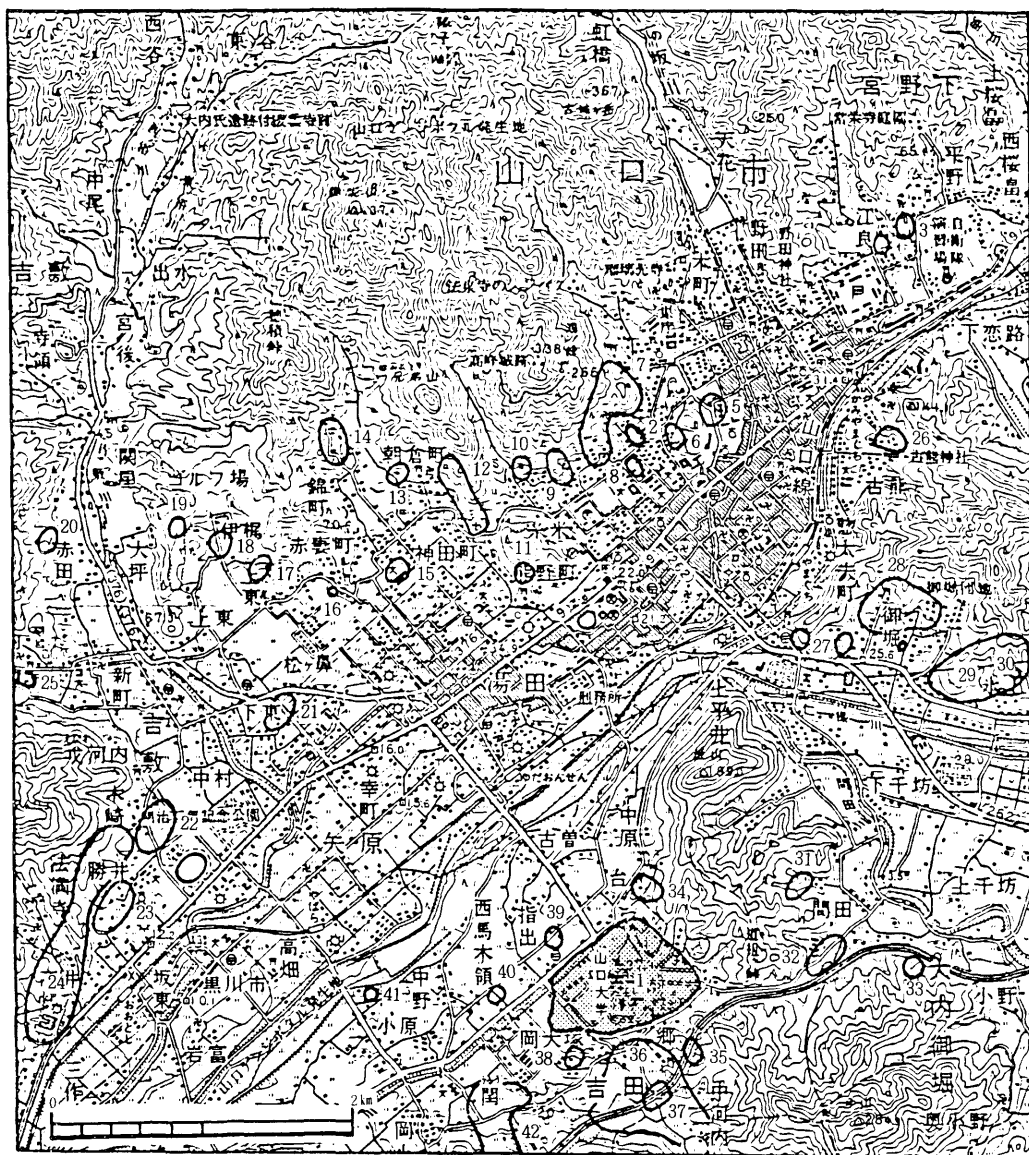
盆地内において人々が最初に生活の場として選定したのは各山地から派生した、沖積低地を臨む低丘陵上であった。縄文時代晩期のことであり、土壌が検出された木崎遺跡²⁾、吉田遺跡³⁾等が知られている。しかし、多くの遺跡は遺物包含地であり、現在までのところ、生活を如実に裏付ける住居跡等は発見されていない。

縄文時代以降、稲作の伝播とともに開花した弥生文化は、それまでの生活様式を一変させた。可耕地の追求は山裾の低地への進出を促進し、前期末には下東遺跡⁴⁾、吉田遺跡⁵⁾等の集落の形成によって具現化する。その他、中期の遺跡として朝倉大歳遺跡⁶⁾、荻峠遺跡⁷⁾等、後期の遺跡として堂道遺跡⁸⁾等がある。

生活の場が水平的、特に垂直的に移動していく一方で、墳墓は朝田墳墓群⁹⁾、茶臼山石棺墓群¹⁰⁾、乗ノ尾石棺群¹¹⁾、黒川遺跡¹²⁾等、沖積低地を見下ろす低丘陵上に営まれる。中でも朝田墳墓群は県下でも有数の墳墓群として知られている。第Ⅰ～第Ⅳ地区と呼ばれる各丘陵上には弥生時代から古墳時代にかけての墳墓が群集しており、箱式石棺墓、土壌墓等の多様な埋葬形態の群集する集団墓から首長墓、家族墓へと変遷していく過程を観察することができる。

弥生時代終末から古墳時代初頭には盆地内においても階層分化に起因すると思われる方形台状墓等の特定個人墓が築かれるようになる¹³⁾。しかし、これらは墳墓形態および副葬品に若干の優位性が認められる程度で、盆地内を統合するほどの強大な首長層の出現は5世紀中葉の天神山古墳¹⁴⁾、朝田第Ⅱ地区第13号墓¹⁵⁾等の出現まで待たなければならない。いわゆる畿内系竪穴式石室を内部主体にもつ古墳の出現であり、ここに盆地内あるいは少なくとも榎野川右岸の統合がなされたと考えられる。天神山古墳群では第1号墳と第8号墳で堅

位置と環境



- | | | | |
|-------------------------|------------|-------------|------------|
| 1 吉田遺跡
(山口大学吉田キャンパス) | 10 木戸神社古墳群 | 21 下東遺跡 | 32 問田遺跡 |
| 2 白石遺跡
(山口大学附属山口小学校) | 11 権現山古墳 | 22 木崎遺跡 | 33 新開古墳 |
| 3 竹の花遺跡 | 12 荻峠遺跡 | 23 太田遺跡 | 34 日吉神社古墳群 |
| 4 江良遺跡 | 13 朝倉遺跡 | 24 朝田墳墓群 | 35 乗ノ尾石棺群 |
| 5 松柄遺跡 | 14 朝倉河内古墳群 | 25 天神山古墳群 | 36 神郷大塚遺跡 |
| 6 亀山遺跡 | 15 湯田楠木町遺跡 | 26 古熊遺跡 | 37 吉田岡島遺跡 |
| 7 鴻ノ峰・白石古墳群 | 16 赤妻古墳 | 27 橋村・御堀石棺群 | 38 大塚古墳跡 |
| 8 茶臼山古墳群 | 17 土師宮古墳群 | 28 御堀遺跡 | 39 郷遺跡 |
| 9 糸米古墳群 | 18 伊梶堤遺跡 | 29 入野遺跡 | 40 木遺跡 |
| | 19 大判石棺 | 30 水上古墳 | 41 中島古墳 |
| | 20 泉山古墳群 | 31 問田・山崎遺跡 | 42 小路遺跡 |

Fig. 2 吉田遺跡位置図および山口盆地内遺跡分布図

吉田構内大学会館新宮に伴う発掘調査

穴式石室が確認されており、第1号墳から短甲1領、武器、農工具、第8号墳から武器、漁具、農工具が出土している。また、朝田墳墓群第Ⅱ地区第13号墳は前方後円墳で、前方部と後円部に各1基の主体部をもつ。後円部主体は竪穴式石室で排水施設を伴う。墳丘および前方部主体より武器、農工具、石製品が出土している。

これら豊富な副葬品に見られるように強大な権力を有したであろう首長層の墳墓は5世紀後半に構築される赤妻古墳¹⁶⁾を最後に短期間のうちに姿を消し、代わって6世紀には被葬者の質的差異と呼応して家族墓的な性格を有する、畿内文化の流れをくむ横穴式石室や北部九州より招来された竪穴系横口式石室をもった小円墳・横穴墓が盆地内各所に築造される。朝田墳墓群¹⁷⁾、朝倉河内古墳群¹⁸⁾、白石古墳群¹⁹⁾、鴻ノ峰古墳群²⁰⁾などがこれにあたる。

集落跡には下東遺跡²¹⁾と吉田遺跡²²⁾が知られており、両者とも住居跡、土壇等が検出されている。

以上、古墳時代までを概観すると、盆地内に分布する諸遺跡に比べ充実した規模・内容をもつ吉田遺跡が縄文時代以降、古墳時代に致るまで榎野川流域における集落の中心的存在であったことは容易に推察できる。吉田遺跡は昭和41年から継続的に調査が行なわれており、集落構造の時間的・空間的・質的な変遷過程のモデルを一遺跡においてパターン化できる有数の集落遺跡として位置づけることができる。また円筒埴輪等も採集されていることなどから畿内系の古墳の存在も予想され、埋葬跡をもあわせもつ多様な遺跡であることを示唆している。

律令国家の成立とともに地方制度として国・郡・里の行政区画が設定され、山口盆地は周防国吉敷郡に属することになる。この時代の遺跡はまだあまり明らかにされておらず、わずかに吉田岡島遺跡²³⁾で平安時代の土壇群、黒川遺跡²⁴⁾で平安時代の掘立柱建物や溝が検出されている。

律令体制が崩壊し武家政権の時代になると、鎌倉から室町時代の建物跡、溝の検出された吉田岡島遺跡²⁵⁾をはじめとして、室町時代の遺跡が多く認められるようになる。とりわけ大内氏の関係遺跡は著名で、大内館跡、築山館跡、高嶺城跡、凌雲寺跡などがある。昭和53年以降、山口市教育委員会によって大内氏館跡の調査が継続的に行なわれており、当時の大内氏の栄華を偲ぶことのできる遺構や遺物が検出されている²⁶⁾。

(磯 部)

〔注〕

1) 山口県教育委員会『山口県遺跡地図』(1972年)。

位置と環境

- 2) 山口県教育委員会『朝田墳墓群Ⅰ・木崎遺跡』（1976年）。
- 3) 小野忠熙「山口大学吉田遺跡」（『考古学ジャーナル』第9号、1967年）。
同 上「山口大学構内吉田遺跡の性格」（『学園だより』第6号、山口大学、1970年）。
山口大学吉田遺跡調査団『山口大学吉田遺跡発掘調査概報』（1976年）。
山口大学埋蔵文化財資料館『山口大学構内遺跡調査研究年報 昭和56年度』（1981年）。
- 4) 山口県教育委員会『下東遺跡・荻峠遺跡』（1975年）。
- 5) 注3)に同じ。
- 6) 山口市教育委員会『朝倉大蔵』（1982年）。
- 7) 注4)に同じ。
- 8) 山口県教育委員会『堂道・五反地遺跡』（1973年）。
- 9) 注2)に同じ。
山口県教育委員会『朝田墳墓群Ⅱ・鴻ノ峰1号墳』（1977年）。
同 上 『朝田墳墓群Ⅲ』（1978年）。
同 上 『朝田墳墓群Ⅲ-B, IV・糸米遺跡』（1979年）。
同 上 『朝田墳墓群Ⅴ』（1982年）。
同 上 『朝田墳墓群Ⅵ』（1983年）。
- 10) 山口市教育委員会『茶臼山石棺群・大判石棺調査報告』（1978年）。
- 11) 山口県教育委員会『美祢市内川古墳・山口市乗ノ尾遺跡』（1973年）。
- 12) 山口県教育委員会『黒川遺跡』（1980年）。
- 13) 朝田墳墓群、黒川遺跡等でみられる。
- 14) 山口市教育委員会『天神山古墳』（1979年）。
同 上 『天神山古墳Ⅱ』（1982年）。
- 15) 山口県教育委員会『朝田墳墓群Ⅵ』（1983年）。
- 16) 弘津史文「周防國赤妻古墳並茶臼山古墳（其一）」（『考古学雑誌』18-4、1928年）。
舟形石棺と箱式石棺を内部主体にもち、鏡、甲冑類、巴形銅器等の多量の副葬品が出土した。
- 17) 注9)に同じ。
- 18) 朝倉河内古墳群発掘調査委員会『朝倉河内古墳群調査報告』（1975年）。
- 19) 山口県教育委員会『白石古墳群』（1980年）。
- 20) 山口県教育委員会『朝田墳墓群Ⅱ・鴻ノ峰1号墳』（1977年）。
- 21) 注4)に同じ。
- 22) 注3)に同じ。
- 23) 山口県教育委員会『吉田岡島・吉田大浴・下長野遺跡』（1973年）。
- 24) 注12)に同じ。
- 25) 注23)に同じ。
- 26) 山口市教育委員会『大内氏館跡Ⅰ』（1981年）。
同 上 『大内氏館跡Ⅱ』（1980年）。
同 上 『大内氏館跡Ⅲ』（1981年）。
同 上 『大内氏館跡Ⅳ』（1982年）。
同 上 『大内氏館跡Ⅴ』（1983年）。

3 層位

調査区内は当初、姫山から南へ派生した低丘陵上に立地するものと思われたが、調査の結果、東部および南西隅においてそれぞれ東から西に延びる二つの小支丘陵と両丘陵縁辺部を侵食しつつ北ないしは北西に開ける谷あい立地することが判明した。東部では92/1000で下降する丘陵縁辺部が後世の水田造営等に伴う暗渠掘削によって $x = 568 \cdot y = 665$ 、 $x = 590 \cdot y = 674$ 、 $x = 615 \cdot y = 660$ を結ぶライン付近で切断されており階段状を呈している。また、南西隅は丘陵の北縁辺部の一端にあたる。

谷は調査区外南東方向の景観・立地およびN-15区での検出遺構、分布状況から推してその上流部付近にあたるものと思われ、両丘陵の地山である黄橙褐色粘質土層を深さ約70cm、さらにその下部に堆積する青灰色粘土層を約60cm侵食し、南部においては青灰色砂礫層、北部においては砂礫層を基底面（谷底）とする。基底面への傾斜は東部においては比較的緩やかであるが、西部においては丘陵縁辺部の侵食が強く急傾斜の斜面を形成する。基底面は南部で標高21.30m、北部で標高20.80m前後で南から北へ緩やかに下降しており、第33層以下の堆積土が砂礫を含まず、そのほとんどが粘土層であることからこの谷は初期の段階では比較的緩やかな流水開析が進行していたものと思われる。

一方、土層の堆積状況を見ると、第33層は南部を中心に水平に近くしかも広範囲に堆積するが、それ以下の各堆積層はブロック状に堆積している。また、この谷にはさらに調査区中央部 $x = 590$ 、 $y = 660$ 、付近を湧水点として幅9.6～12.0m、東部の丘陵縁辺部との比高差1.0～1.3mをもち、北ないしは北西に開く小規模な谷が存在し、基底面には第33層が65cm以上の厚さで堆積している。この小規模な谷の緩斜面からは完形の土師器高坏（Fig.19, 18・19）が出土し、また井戸も埋存することから谷の埋没が少なくとも古墳時代前期、すなわち第33層の堆積をもって開始したことを示唆する。そして、第12層の堆積により谷が埋没した近世以後、水田耕作等の土地利用が開始され、それ以前の段階では各丘陵間は広汎な低湿地を形成していたものと思われる。

調査区内において地山に至る堆積層は24層に分層される（Fig. 3）。第1層は腐蝕土および構内造成時等の置土層を含む表土で、南西隅では直下が地山となっている。第2層：暗灰色土層は旧水田耕作土、第3層：暗灰橙色粘質土層は床土である。第4層：灰橙色土層以下が非人為的な堆積層であるが、遺物を包含するのは第5層：黄灰褐色土層、第9層：青灰褐色砂質土層、第12層：灰橙色粘質土層、第22層：黒茶色粘土層、第23層：黄茶色粘土層、第29層：灰褐色粘質土層、第30層：茶褐色粘土層、第33層：黒色粘土層の計8層で



Fig. 3 土層断面図

遺 構

ある。しかし、各遺物包含層は両低丘陵上からの流れ込みによるもので、弥生時代前期から近世の遺物を多量に包含する第29層に明示されるように、明確な時期差をもった堆積状況を示しておらず、各時期の遺物が混在する。

地山は調査区東部最高所で標高約24.00m、南西隅最高所で約22.20m、谷基底面で約20.30mである。

(河 村)

4 遺構

建物

SB 1 (Fig. 4 PL. 6 (I))

調査区南東隅 $x=583$ 、 $y=676$ 付近で検出した身舎 1間×1間の掘立柱建物跡である。第5層(黄灰褐色土層)を掘り込んで営まれており、北東隅を起点として桁行長3.4m、梁行長2.9mの規模をもつ。棟方向N-74°-W。4個の柱穴の底径および検出面よりの深さはそれぞれP 1が12cm、18cm。P 2が14cm、18cm。P 3が8cm、21cm。P 4が12cm、12cmでP 4は二段掘りとなっている。

出土遺物には土師器皿、磁器湯呑があり、近世に下るものであろう。

井戸

調査区中央部から北西に開く谷の谷頭部を中心に古墳時代前期のもの1基、古代から中世のもの3基計4基が

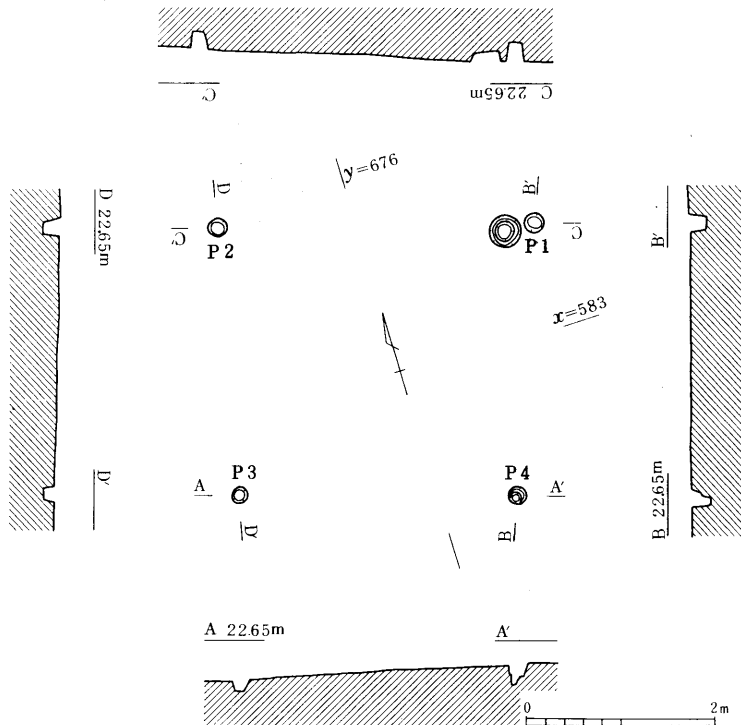


Fig. 4 SB-1

検出されたが後世の削平が著しい。また調査区西側で近世のものが1基ある。

SE 1 (Fig. 5 PL. 6 (2), 7)

$x = 589$ 、 $y = 658$ 付近で検出した平面形態方形の横板組井戸である。長軸125cm、短軸100cmの規模をもつ。谷基底部への落ち込みに対応して地山は西から東へ下降している。谷の侵食および後世の削平が著しく深さはわずかに最深部の西部で約20cm、最浅部の東部で約10cmを残すにすぎない。底面標高は約20.85mである。

底面には井戸側最下段のうち西、南辺二側辺が検出された。西辺は矢板を転用し、南辺は長さ105cm、幅37cm、厚さ0.2~0.4cmの転用部材を使用する。内側に倒れ込んだ状態で検出された井戸側南辺は西端部に焼痕が認められた。

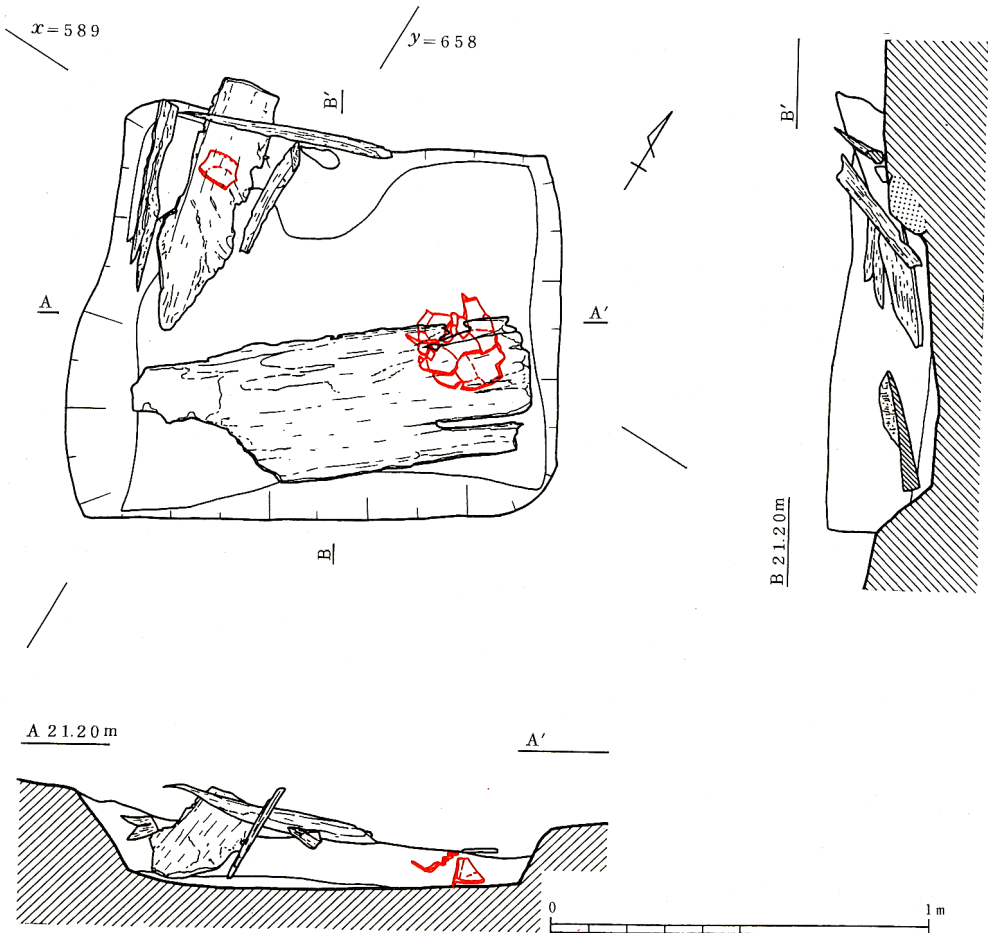


Fig. 5 SE-1

遺 構

出土遺物には土師器があり、底面東隅から甕、西隅から高坏が出土した。出土遺物から古墳時代前期に比定される。

SE 2 (Fig. 6 PL. 8 (1))

$x = 597$ 、 $y = 660$ 付近で検出された平面形態ほぼ円形の井戸で他の3基と距離を置いてやや高所に構築されている。谷の侵食および後世の削平により検出面での規模は上面径95cm、最深部での深さ35cmを残すにすぎない。底面は二段に掘削されており上段部には底面を被覆するように周辺加工された厚さ約6cmの結晶片岩の板石を据え、湧水に対応した水利処理を行なっている。この板石上部に底板を欠いた厚さ約2cmの曲物¹⁾を井戸側(井筒)として設置したと思われるが、断片的にしか検出されず板石縁辺に認められる小礫と

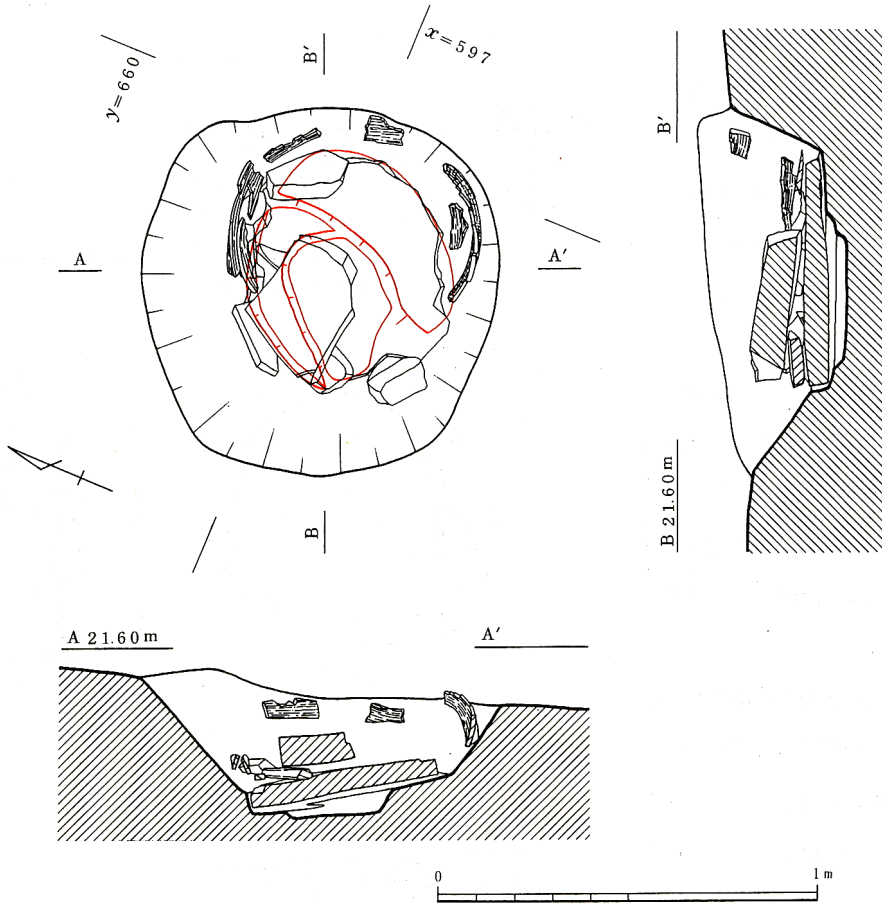


Fig. 6 SE-2

の位置関係、力学的相関関係は判然としない。

出土遺物には底面板石直上部より須恵器片1点があるが、詳細な時期比定は困難である。

SE 3 (Fig. 7 PL. 8(2))

谷基底面への落ち込み部分で検出した平面形態はほぼ円形の曲物設置井戸である。上面径72~76cm、底面径57~60cm、深さは谷の侵食および後世の削平によりわずかに最深部の南部で約15cm、最浅部の北部で約6cmを残すにすぎない。底面は北から南へ若干下降しており、底面標高は約21.15mである。井戸側(井筒)は底板を欠く曲物を設置したものと思われるが、最下段を北西周縁部で検出したにとどまった。

出土遺物は土師器皿1点があり平安時代後期の所産。

SE 4 (Fig. 8 PL. 9(1))

SE 2の南西、心-心距離にして約4mに位置する平面形態はほぼ円形の曲物設置井戸である。上面径66~

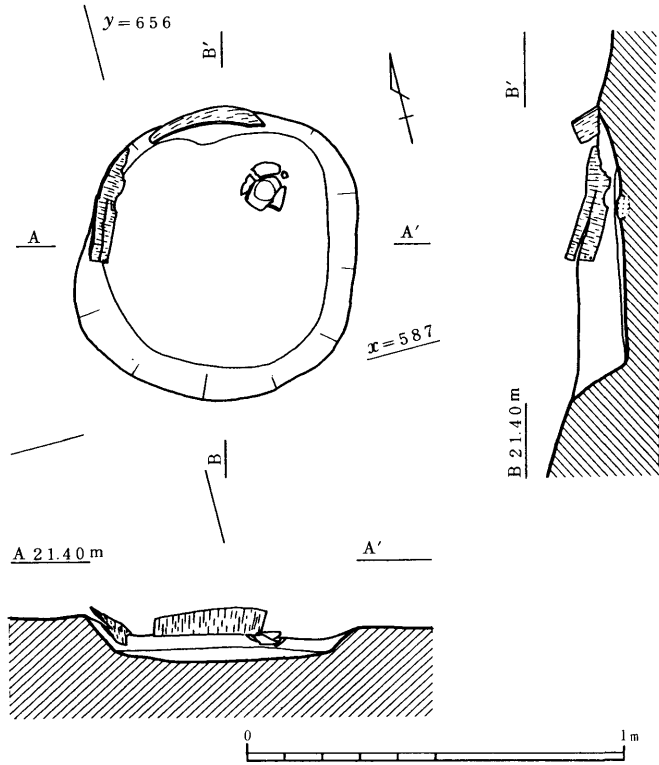


Fig. 7 SE-3

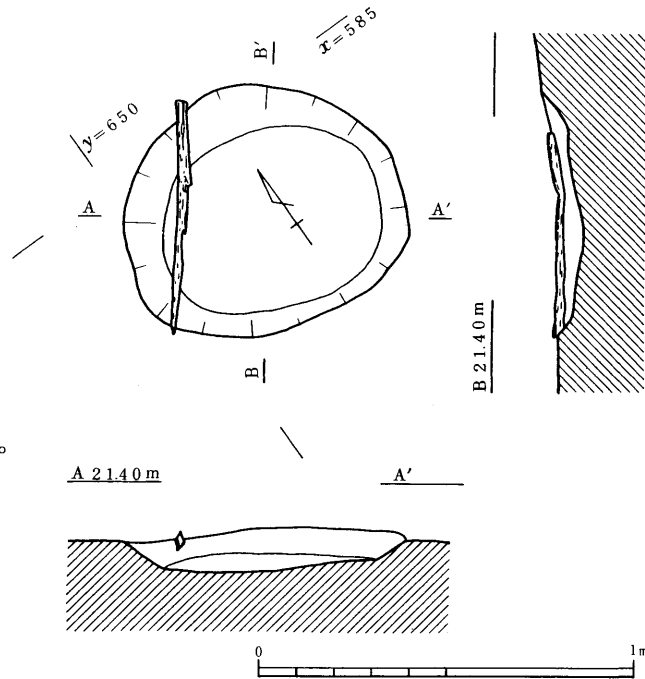


Fig. 8 SE-4

遺 構

75cm、底面径48~57cm、深土はわずかに最深部の中央部で約10cm、最浅部で約4cmを残すにすぎない。最深部の底面標高は約21.15mである。後世の削平が著しく、井戸側（井筒）最下段にあたる周縁に沿わない厚さ0.2cmの曲物を北辺で検出したにとどまった。

内部からの出土遺物は皆無であったが、規模、底面標高等からSE3と同時期の可能性はある。

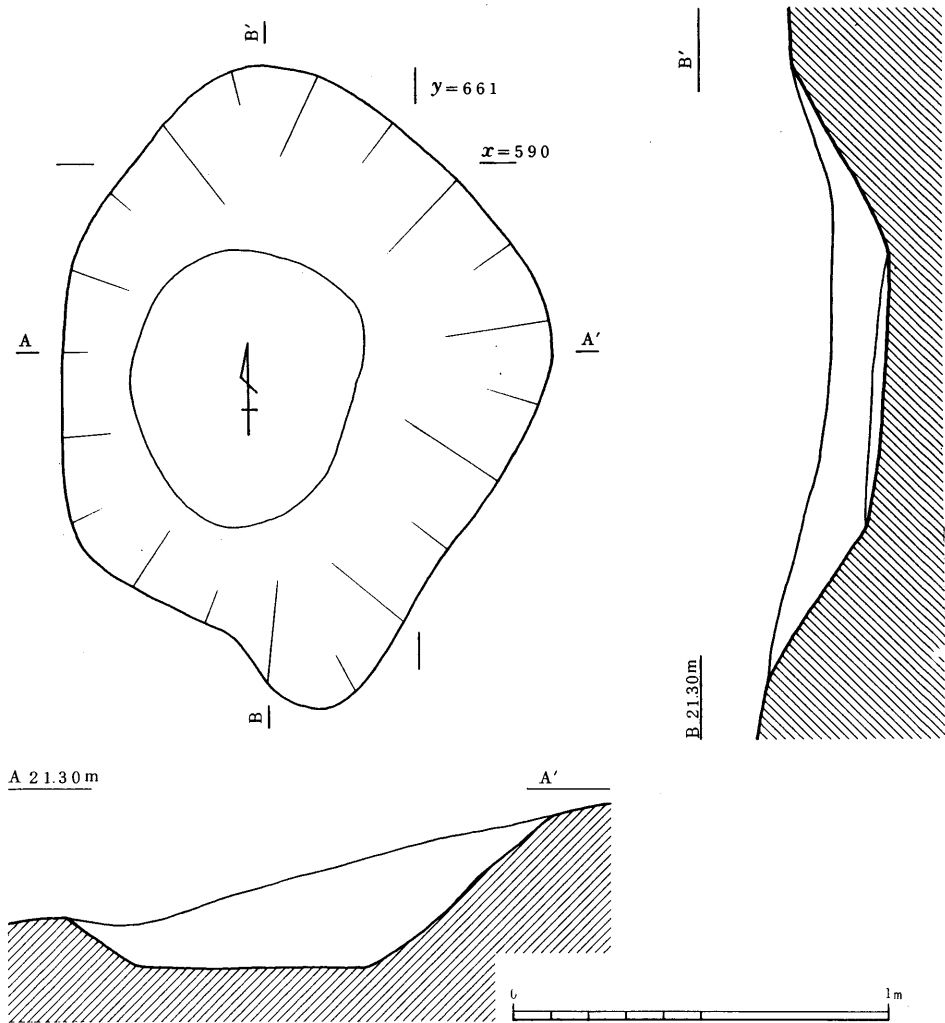


Fig. 9 SE-5

SE 5 (Fig.9 PL.9(2))

SE2の北東、心-心距離にして約5mに位置し、谷最奥部への北からの落ち込み部分で検出した不整形の井戸である。井戸側(井筒)の設備がみられず、素掘り井戸であろう。長・短軸の規模は上面でそれぞれ163cm、130cm、底面でそれぞれ71cm、61cmである。底面は平坦であるが、地山の下降に対応して深さは最深部で28cm、最浅部で11cmである。底面標高は約20.80mである。

出土遺物は皆無であった。

SE 6 (Fig.10 PL.10(1))

調査区北西隅、 $x = 590$ 、 $y = 632$ 付近で検出した平面形態不整円形の素掘りの井戸で

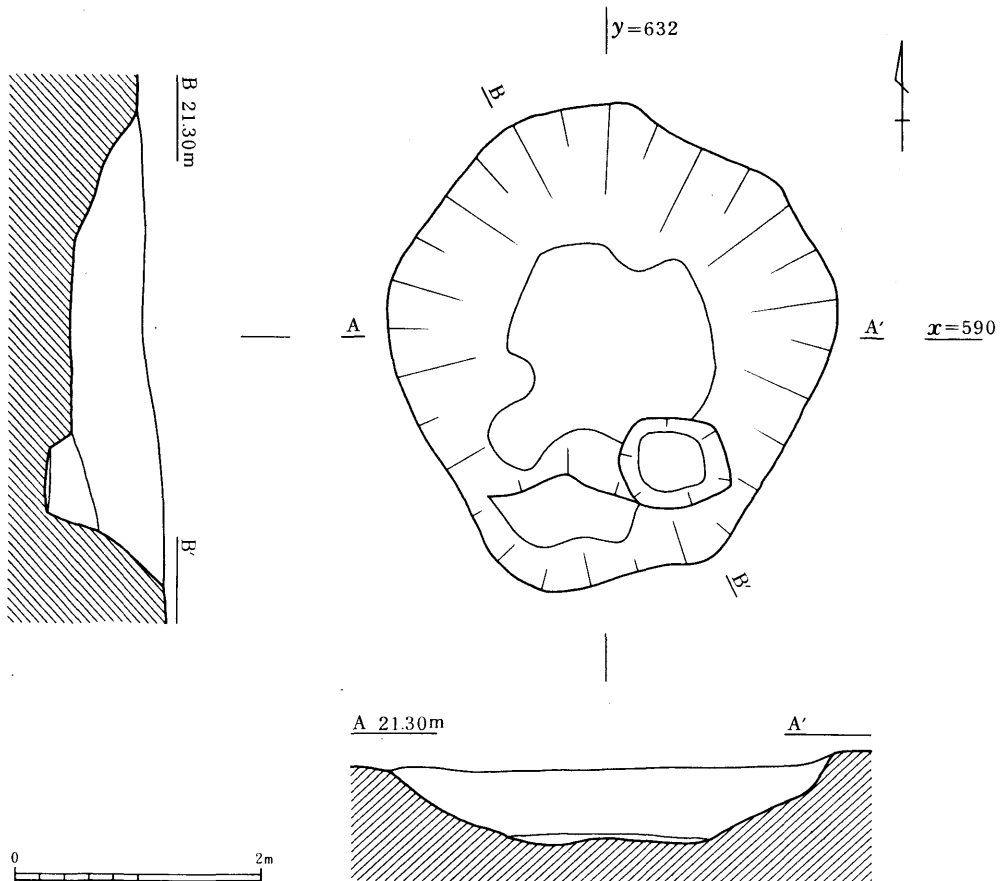


Fig.10 SE-6

遺 構

ある。長・短軸の規模は上面でそれぞれ386cm、360cm、底面でそれぞれ166cm、151cm、深さは最深部で約60cm残存する。南東隅には井戸掘削時に掘り込まれたと思われる長軸89cm、短軸73cm、底面からの深さ約17cmの不整楕円形のピットが検出された。

出土遺物には土師器坏、埴、皿、須恵器坏のほか瓦質土器、磁器等があるが、ピット内から井戸内祭祀のものと思われる完形の土師器小皿8点が一括出土した。出土遺物から井戸の上限は平安時代中期頃と思われる。

土 壙

SK 1 (Fig.11 PL.10(2))

調査区北東隅 $x = 612$ 、 $y = 669$ 付近で検出された平面形態隅丸方形の土壙である。検

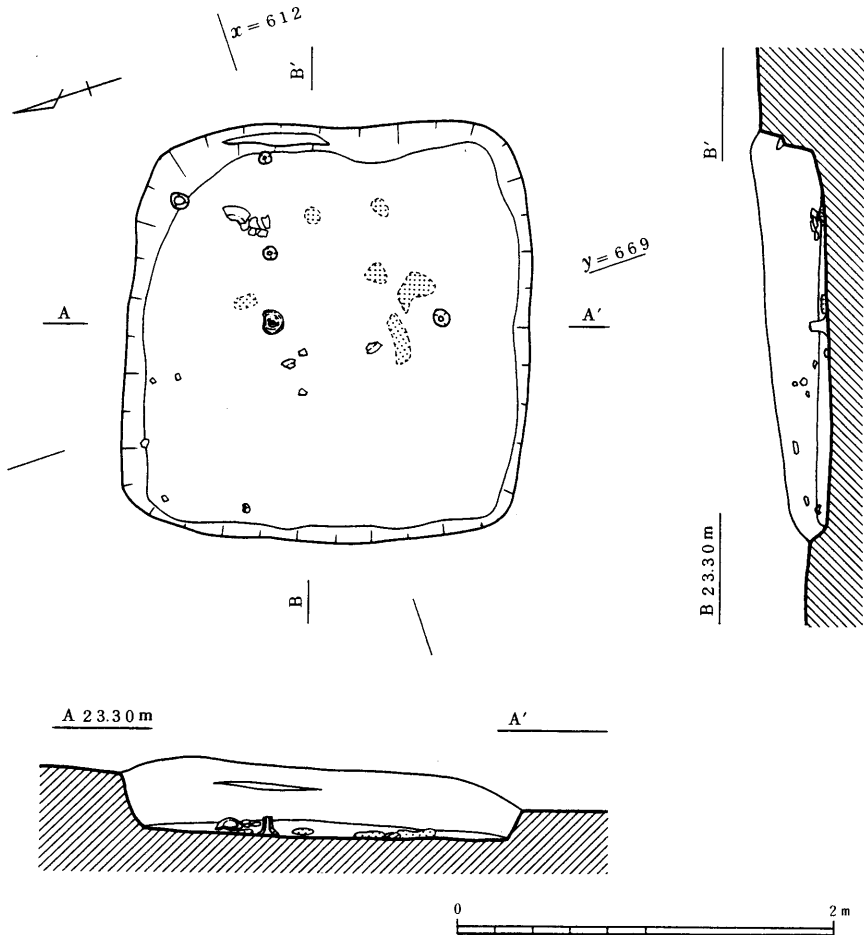


Fig.11 SK-1

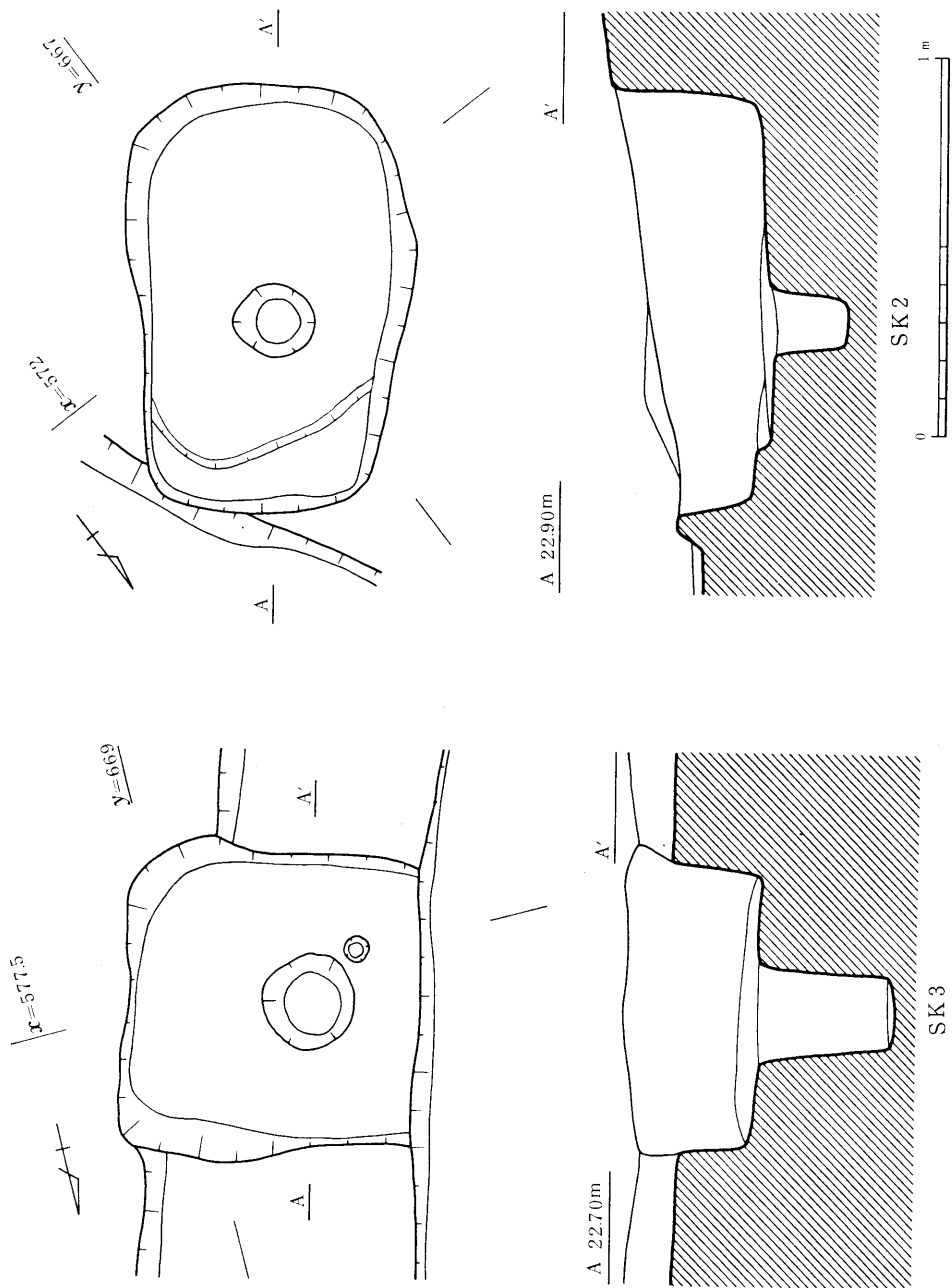


Fig.12 SK - 2 , 3

遺 構

出面での規模は一辺216cm、深さは地山が東から西に下降しているため最深部の東部で28cm、最浅部の西部で10cmである。北東から南西にわずかに下降する壙底には、本土壙外の小ピットとは掘削規模の異なる径約8cmの小ピットが4カ所に認められたがその性格については不明である。また、南部壙底直上からは、ブロック状に炭化物が5カ所認められた。

遺物は小片の他、壙底に接して中央部で脚部、東部で坏部のほぼ一個体分の高坏が出土した。

SK 2 (Fig.12 PL.11(1))

調査区南東隅 $x = 572$ 、 $y = 667$ 付近で検出された平面形態隅丸長方形の土壙である。北東隅は暗渠に伴う掘削により消失している。検出面での規模は長軸114cm、短軸70cm、深さは地山が東から西へ下降しているため最深部の東部で38cm、最浅部の西部で26cmである。壁面はほぼ垂直で壙底は平坦であるが、西部で二段掘りとなっており北西部に沿って壙底より5cm高い平坦面をもつ。壙底標高は22.35mである。

壙底中央部には径19～22cm、深さ21cmのピットが検出された。

なお、出土遺物は皆無であった。

SK 3 (Fig.12 PL.11(2))

SK 1の北約5.3m、 $x = 577.5$ 、 $y = 669$ 付近で検出された。西部を暗渠に伴う掘削により消失しているがSK 1同様隅丸長方形の平面形態をもつものと思われる。検出面での規模は長軸75cm以上、短軸75cm、深さ26～34cmで壁面はほぼ垂直に立ち上がる。壙底標高は22.30mである。

壙底中央部に径25cm、深さ35cmおよび径7cm、深さ5cmのピットが検出された。

内部から遺物は出土していない。

(河 村)

5 遺物

出土した遺物は整理用コンテナ約30箱であり、その大半は包含層からの出土で時期的には古代から中世にかけてのものが最も多い。包含層については前章で述べた通り、旧床土以下地山までの堆積層を数層にわけることができるが、各層いずれも遺物に時期幅があり一部攪乱ないし二次的堆積の可能性も考えられるため、土層別の時期決定には躊躇せざるを得ない。そのため包含層の遺物は各層ごとではなく、下記の通りに分け説明する。

(1) 遺構出土土器

(2) 包含層出土土器

I. 弥生土器

II. 土師器（古墳時代）

III. 土師器（古代～近世）

IV. 須恵器

V. 瓦質土器

VI. 輸入陶磁器・緑釉陶器・黒色土器・瓦器・国産陶磁器ほか

(3) 石製品

(4) 木製品

(5) 金属器・瓦・植物遺体

(1) 遺構出土土器

SB-1 (Fig.13, 1・2 PL.13)

1は薄手の白磁器の湯呑と思われる。体部は内彎しながら立ち上がり、端部はやや尖がりぎみにおさめる。2は土師器の皿である。体部は上方へ直線的に開き、器肉は薄い。内外面ともに横ナデ調整。底部は回転糸切り後、刷毛調整。内面には薄く煤が付着。

PH-1 (Fig.13, 3 PL.13)

陶器の鉢と思われる。外面は横ナデ。糸切り底。釉のかかり具合は粗末で発色は悪く、底部と内面の一部を除いた部分に施釉する。

SK-1 (Fig.13, 4 PL.13)

土師器の高坏である。坏底部からにぶく屈曲し、口縁部は直線的に立ち上がり端部はわずかに外反する。脚柱はエンタシス状にやや膨らみ、裾部は水平に近く折れ曲がり端部はわずかに反り上がる。裾部はほぼ接地している。坏部内面は横ナデの後、底部は篋状工具による縦方向のナデ、口縁部も篋状工具によるナデである。脚部外面は縦方向の篋磨き、内面は篋削りを施す。

SE-2 (Fig.13, 5 PL.13)

土師器の甕である。扁球形の胴部をもち、口縁部は直線的に外反する。口縁端部は丸い。

遺 物

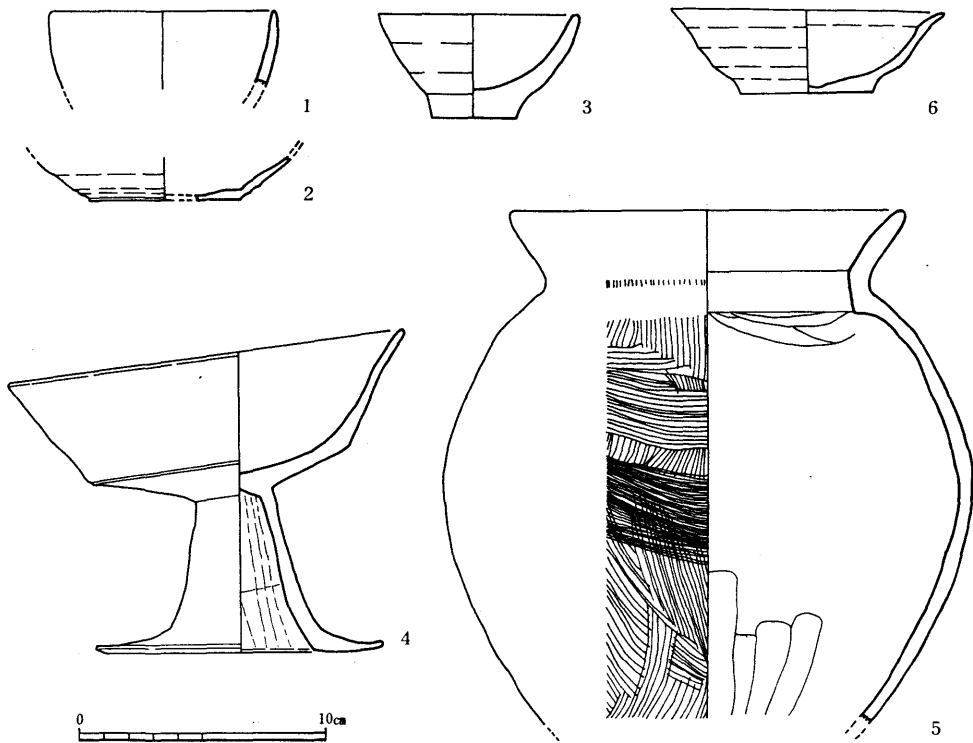


Fig.13 遺構出土土器 その1

内外面は横ナデ。胴部外面は不定方向の刷毛目調整、内面は篋削りされている。

SE-3 (Fig.13, 6 PL.13)

土師器の坏である。いびつなつくりで口縁端部は外反する。内外面とも横ナデで、糸切り底である。所々に煤付着。

SE-6 (Fig.14, 15, 7~31 PL.13, 14)

土師器甕・皿・鉢・碗、須恵器坏、磁器皿・碗、瓦質土器火鉢・播鉢・鼎・羽釜（壺か）および須恵質陶器壺がある。17~29は底面小ピット中よりの一括出土。

7・8は共に瓦質土器の甕である。7は短く内傾する口縁部が肥厚し、端部上面はやや丸味を帯びて平坦におわる。内外面共に横ナデ調整。8も肥厚する口縁部は短く直立し、端部上面は平坦で外面をつまみ出す。口縁下部には一条の凹線が走る。内外面共に横ナデでわずかに刷毛目が残る。9は薄手の土師器皿である。丸味を帯びた平底で、体部は底部との明確な稜線をもたず、わずかに内彎気味にゆるやかに立ち上がる。口縁端部はわずかに内彎する。内外面とも横ナデ仕上げ。10は磁器染付碗の口縁部である。体部は内彎して

立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。端部内外面に二条の圈線、外面圈線下には雲状文を施す。11は青磁皿で底部の大部分を欠損する。体部は無施釉の底部との明確な稜をもち強く内彎して立ち上がる。内外面に貫入がみられる。12は須恵質陶器壺で頸部以下を欠損する。口縁部は外反気味に直立する。内外面とも横ナデ仕上げ。13も須恵質陶器壺で上半部と底部の大部分を欠損する。極めて薄手で平底の底部に張りの少ない胴部をもつ。底部内面はナデ、他は横ナデ仕上げ。14～18は瓦質土器である。14は火舎の口縁部。外面に断面三角形の粘土帯を貼付し端部は肥厚する。突帯上位に刷毛状工具による刺突文を刻み、下位に陽刻「X」状スタンプを押捺する。内面および外面文様帯以下は刷毛目、他は横ナデ仕上げ。15は播鉢の口縁部であろう。16・17は羽釜ないしは壺の口縁部と思われる。17は張りの強い肩部に球形の胴部をもつと思われる。内外面とも横ナデ仕上げ。18は鼎である。下ぶくれの胴部下位に一条の断面長方形の突帯をめぐらす。突帯上位外面には煤が付着する。13は土師器台付皿である。横ナデ仕上げで糸切底。20～26は土師器小皿。底部は大部分が平底であるが軽い上げ底を呈するもの(20)もある。体部は直線的に立ち上がるもの(20・22・24)と、内彎気味に立ち上がるもの(21・23・25・26)とがある。体部は全て横ナデ、底部は風化のため不明のもの(21)を除いてすべて糸切りである。27は土師器坏で体部の大部分を欠損する。底部はほぼ平底であるが、中央部がくぼんで軽い上げ底状をなす。体部内面下半部に段を有する。外面は風化が著しく調整は不明だが、内面は横ナデと思われる。28は須恵器坏身で体部の大部分を欠損する。底部と体部の境より内側にやや内傾する高台を貼付する。底部はナデ、体部は内外面とも横ナデ仕上げ。29は土師器坏で底部を欠損する。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は外反する。外面は横ナデ、内面は風化のため不明である。30・31は瓦質土器である。30は播鉢の口縁部。端部内面は外上

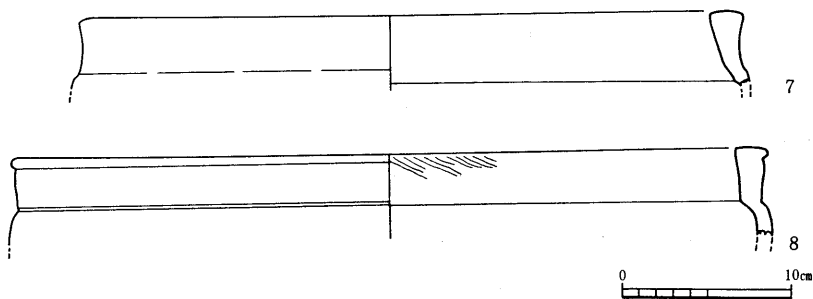


Fig.14 遺構出土土器 その2

遺物

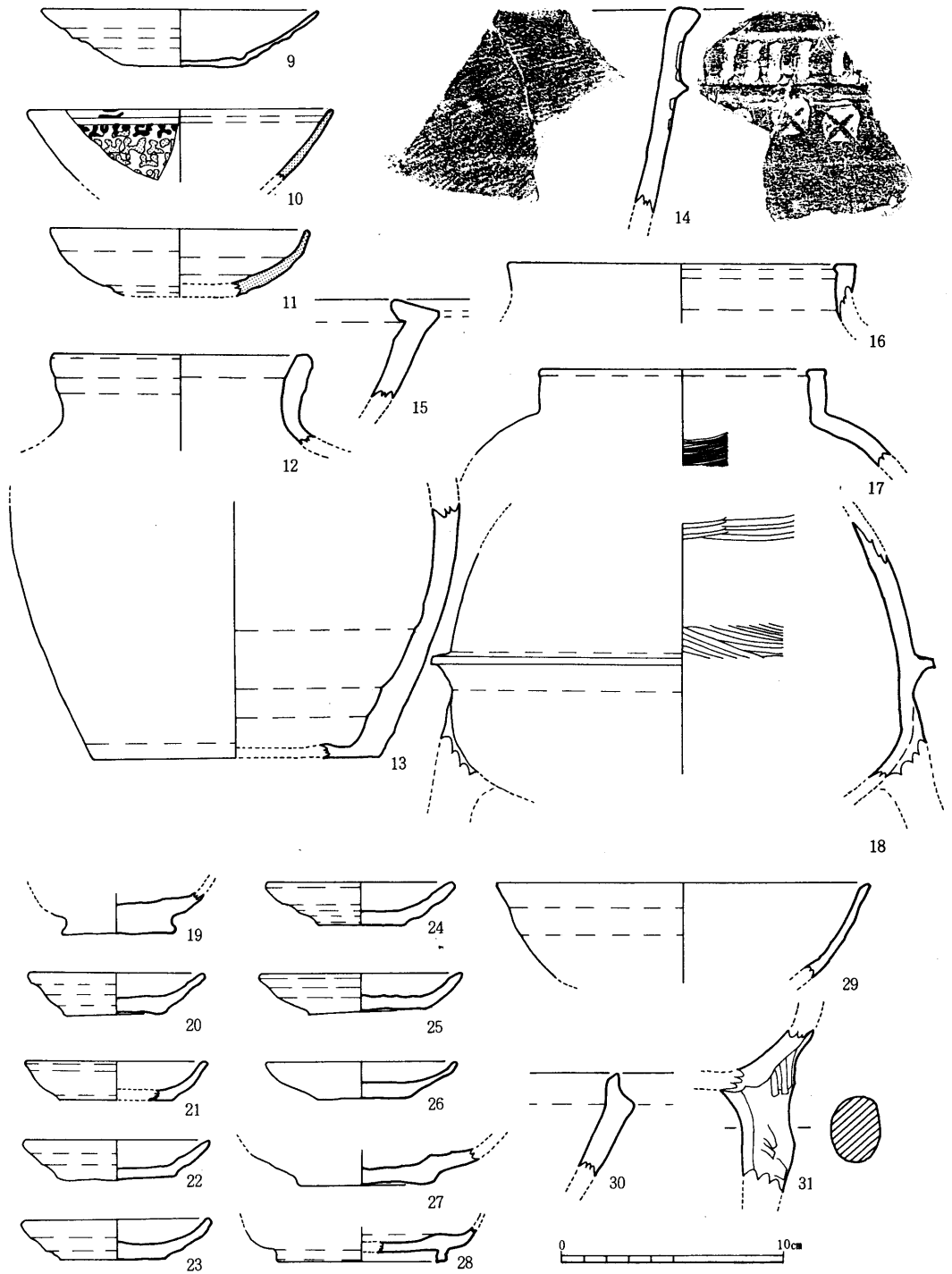


Fig.15 遺構出土土器 その3

吉田構内大学会館新宮に伴う発掘調査

Tab. 2 遺構出土土器観察表

No	種類	器種	口径 *底径 (cm)	器高 (残存高) (cm)	色調	胎土	焼成	備考
SB-1								
1	白磁	湯呑	9.2	(3.1)	淡白色	精緻	良好	
2	土師器	皿	* 6.1	(1.7)	淡灰褐色	精緻	良好	下半部
PH-1								
3	陶器	鉢	* 8.1 3.4	4.2	灰白色	精緻	良好	
SK-1								
4	土師器	高坏	1.61 * 1.17	1.21	淡赤褐色	精緻	良好	
SK-2								
5	土師器	甕	1.55	(2.07)	淡黄褐色	精緻	良好	
SE-3								
6	土師器	皿	* 1.08 5.3	3.4	灰褐色	精緻	良好	
SE-4								
7	瓦質土器	大壺	3.68	(4.5)	外面は灰白色、内面は灰黒色	精緻	良好	口縁部片
8	瓦質土器	大壺	3.88	(5.1)	外面は灰黒色、内面は灰白色	精緻	良好	口縁部片
9	土師器	皿	* 1.23 5.4	2.5	灰色	良好 若干砂粒がまじる	良好	
10	白磁染付	壺	1.34	(3.1)	素地は灰白色、文様は群青色	精緻	良好	口縁部片 染付文様は雲文
11	青磁	壺	1.15	(3.0)	淡緑灰色	精緻	良好	底部を欠く、内外面に貫入がみられる
12	須恵質陶器	壺	1.14	(3.7)	灰茶褐色	精緻 径0.5~1mm程度の砂粒を含む	良好	口縁部片
13	須恵質陶器	壺	* 1.29	(1.13)	外面は灰黒色 内面は灰白色	砂粒を含む		下半部
14	瓦質土器	火舎			内外面とも黒灰色 断面は白色	精緻	良好	口縁部片
15	瓦質土器	播鉢			外面は黒灰色、内面は白灰色、断面は黄灰色	精緻 砂粒を含む	良好	口縁部片
16	瓦質土器	壺あるいは釜	1.56	(1.2)	内外面とも黒灰色 断面白灰色	精緻	良好	口縁部片
17	瓦質土器	壺あるいは釜	1.27	(3.8)	内外面とも黒灰色 断面白灰色	精緻	良好	口縁部片
18	瓦質土器	鼎		(9.9)	内外面とも黒灰色 断面白灰色	精緻	良好	胴部片
19	土師器	台付皿	5	(1.8)	赤褐色	精良	良好	底部片
20	土師器	皿	* 7.7 4.4	1.9	明乳灰褐色(肌色)	精緻 金雲母(?), 砂粒を含む	良好	
21	土師器	皿	* 7.9 5.1	1.7	淡灰茶褐色	精緻 0.5~2mm程度の石英を含む	良好	
22	土師器	皿	* 8.3 5.3	1.9	肌色	やや大粒の砂粒を含む	良好	
23	土師器	皿	* 8.2 4.65	1.7	茶褐色	精良	良好	
24	土師器	皿	* 8.2 3.9	1.9	外面乳灰色 内面乳灰赤褐色	精良	良好	
25	土師器	皿	* 8.9 5.4	1.7	乳灰白色	精良	良好	
26	土師器	皿	* 8.5 4.1	1.6	橙褐色	径1~3mm程度の長石、石英を含む	良好	
27	土師器	坏	* 6.1	(1.6)	明乳灰褐色(肌色)	精緻 砂粒を含む	良好	底部
28	須恵器	坏身	* 7.5	(1.5)	青灰色	精緻	良好	底部片
29	土師器	壺	* 1.68	(4.1)	淡灰茶褐色	精緻 径1~1.5mm程度の石英を含む	良好	口縁部片
30	瓦質土器	播鉢			内外面とも灰白色	やや粗い	良好	口縁部片
31	瓦質土器	鼎			内外面とも灰白色	粗い	良好	脚上半部

遺物

方に突出し、内面に6条の櫛描き条痕を有する。内外面とも横ナデ仕上げ。31は鼎脚部で下半部を欠損する。外面は縦方向の篋削り後縦ナデ、内面は横ナデである。

出土遺物は鎌倉時代のものと、室町時代のものとに大別でき、前者は井戸内底面ピット状遺構内出土のものが、後者は覆土出土のものがそれにあたる。

(森下靖士*)

(2) 包含層出土土器

I. 弥生土器

壺 (Fig.16・17, 1~5 PL.15) 1・2・3は口縁部。1は朝顔形に大きく外反する口縁部を下垂させるいわゆる柳井田式といわれるものである。外面に篋による鋸齒文を施す。口縁下部には径0.4cmの穿孔が見られる。風化が著しく調整は不明である。2は複合口縁をなすが上段はその大部分を欠損する。下段は朝顔形に大きく外反し、上段は内傾して立ち上がる。内外面とも刷毛目がわずかに残る。3は朝顔形に外反し、頸部に一条の沈線をめぐらす。外面は丁寧な横ナデ、内面は風化が著しく調整は不明。4・5は胴部破片で貝殻施文による綾杉文を有する。5は一条の「M」字状突帯をめぐらす。4・5とも風化が著しく調整は不明瞭であるが、5は突帯基部に若干刷毛目を残す。

ミニチュア土器 (Fig.17, 6) 全体手捏ねによるもので、内面は篋で仕上げている。底部外面に黒斑がみられる。

鉢 (Fig.17, 7 PL.15) 胴部上半は内彎気味に立ち上がり、口縁はわずかに外反する。内外面ともに風化が著しく調整は不明である。口縁部外面には煤が付着する。

壺・甕等の底部 (Fig.17, 8~15 PL.15) 形状はバラエティーに富むが、風化

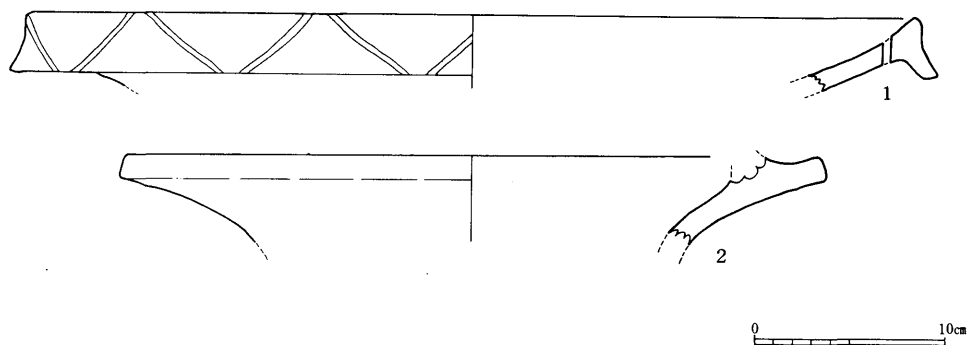


Fig.16 弥生土器 その1

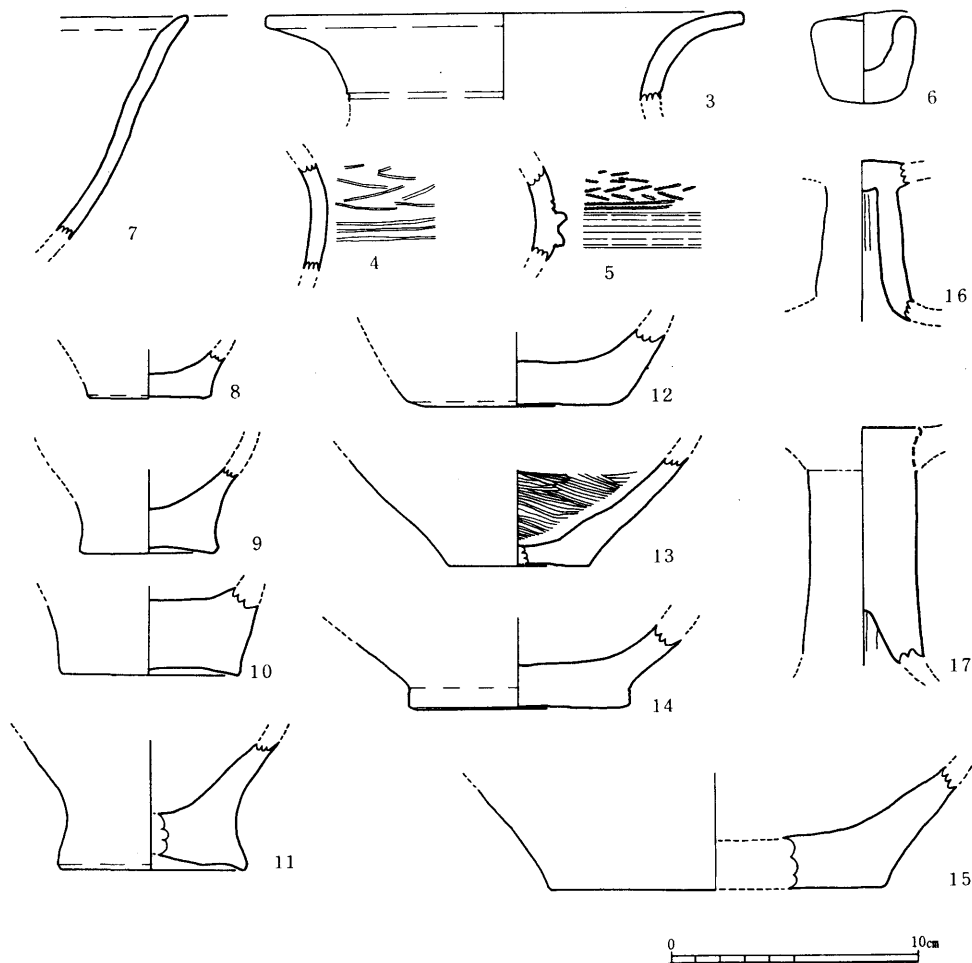


Fig.17 弥生土器 その2

が著しく調整のわかるものは少ない。8は最も小型で平底を呈し、9～11はやや上げ底である。12は底部周縁がやや丸味を帯びる。13は小さく不安定な底部で胴部はわずかに内彎してゆるやかに立ち上がる。内面に丁寧に横方向の刷毛目を残す。14は安定した円盤貼付の壺の底部。15は安定した底部の大型品。

高坏（Fig.17, 16・17 PL.15）共に脚部であり、裾部を欠損する。16は小型品、17は長脚で坏部に脚柱を挿入するタイプ。

以上の弥生土器は前期末から後期後半の広範囲にわたるものである。量的には中期後半から後期にかけてのものが多ようである。

（森 下*）

遺 物

Tab. 3 弥生土器観察表

No.	器種	口径 * 底径 (cm)	器高 (現存高) (cm)	色 調	胎 土	焼 成	備 考
1	壺	46.0	(3.8)	外面-淡灰褐色, 内面-淡黄褐色	精 緻 径1~2mm程度の砂粒を少量含む	良 好	
2	壺	25.8	(4.6)	外面-淡灰赤褐色, 内面-淡黄灰色	粗 い 径1~8mm程度の石英を多量含む	良 好	
3	壺	19.2	(3.5)	淡灰茶褐色	精 緻 径1~1.5mm程度の石英,長石を含む	良 好	
4	壺			淡赤褐色	やや粗い 径1~2mm程度の石英,長石を含む	良 好	貝殻施文の綾杉文
5	壺			淡赤褐色	精 緻 径0.5~1mm程度の石英,長石を含む	良 好	貝殻施文の綾杉文 M字状突起をめぐらす
6	ミナト 土器	4.2 2.8	3.7	外面-明褐灰色, 内面-灰白色	粗 い 径1~2mm程度の砂粒を多量含む	やや不良	外底に黒斑 手捏ね,指圧痕あり
7	鉢			淡黄褐色	精 緻 径1~3mm程度の石英,長石を含む	不 良	上半部,口縁外部に煤 付着
8	甕	* 4.6	(1.6)	淡黄褐色	やや粗い 径3mm程度の石英,長石を含む	不 良	
9	甕	* 5.3	(3.1)	淡茶褐色	精 緻 径0.5mm程度の砂粒を含む	やや不良	
10	甕	* 7.2	(2.8)	明茶褐色	精 緻 径1~1.5mm程度の石英,長石を含む	良 好	
11	甕	* 7.3	(5.1)	明茶褐色	精 緻 径2mm程度の石英,長石を含む	不 良	
12	壺	* 7.0	(2.8)	外面-淡黄褐色, 内面-淡灰褐色	精 良 径2mm程度の石英,長石を含む	良 好	内面に指圧痕
13	壺	* 5.6	(4.3)	明灰茶褐色	精 緻 径0.1~2mm程度の砂粒を含む	やや不良	
14	壺	* 8.2	(2.7)	淡黄褐色	精 緻 径2~10mm程度の砂粒を多量含む	不 良	
15	壺	* 13.4	(4.0)	淡茶褐色	やや粗い 径2~3mm程度の石英,長石を含む	不 良	
16	高 坏			淡黄褐色	精 緻 径2mm程度の石英,長石,雲母を含む	良 好	
17	高 坏			淡赤褐色	精 緻 径1~2mmの砂粒を含む	不 良	

II. 土師器 (古墳時代) (Fig.18・19)

壺 (Fig.18, 1・2 PL.15) 1は扁球形の胴部に短く外反する口縁部をもつ。口縁端部はわずかに内彎し、丸く終わる。口縁部内外面ともナデ、内面は篋削り調整。外面に所々煤付着。2は肩部の張りが大きく、底部は1に比べるとやや尖りぎみ。内面は篋削り調整。時期的にはその器形から見て2が1に先行するものと思われ、4世紀末から5世紀中葉であろう。

壺 (Fig.18, 3) 口径に比べ、器高が低い。口縁端部はわずかに外反し、尖りぎみ。内外面とも指圧痕があり、篋状工具による調整痕が見られる。器形的には山本一朗氏¹⁾のいう須恵器を共伴する土師器(14式新)の壺の特徴と類似し、6世紀前半のものであろう。

甕 (Fig.18, 4~9 PL.16) 4~8は「く」の字に外反する口縁部をもつもので、直線的に開くもの(4)、外彎しながら開くもの(5・6)、内彎ぎみに開くもの(8)がある。4は頸部と口縁部の境に篋状工具による押圧整形がなされ、内外面とも横ナデ調整が施される。5は口縁端部が尖る。調整は風化が激しく不明。6は頸部外面に一条の凹線がめぐる。口縁部内外面とも刷毛の後ナデ、頸部外面刷毛目仕上げ。7は口縁端部欠損のため、口縁部の形体は不明。胴部上位はなだらかに下る。調整は外面に横方向のタタキ痕が見ら

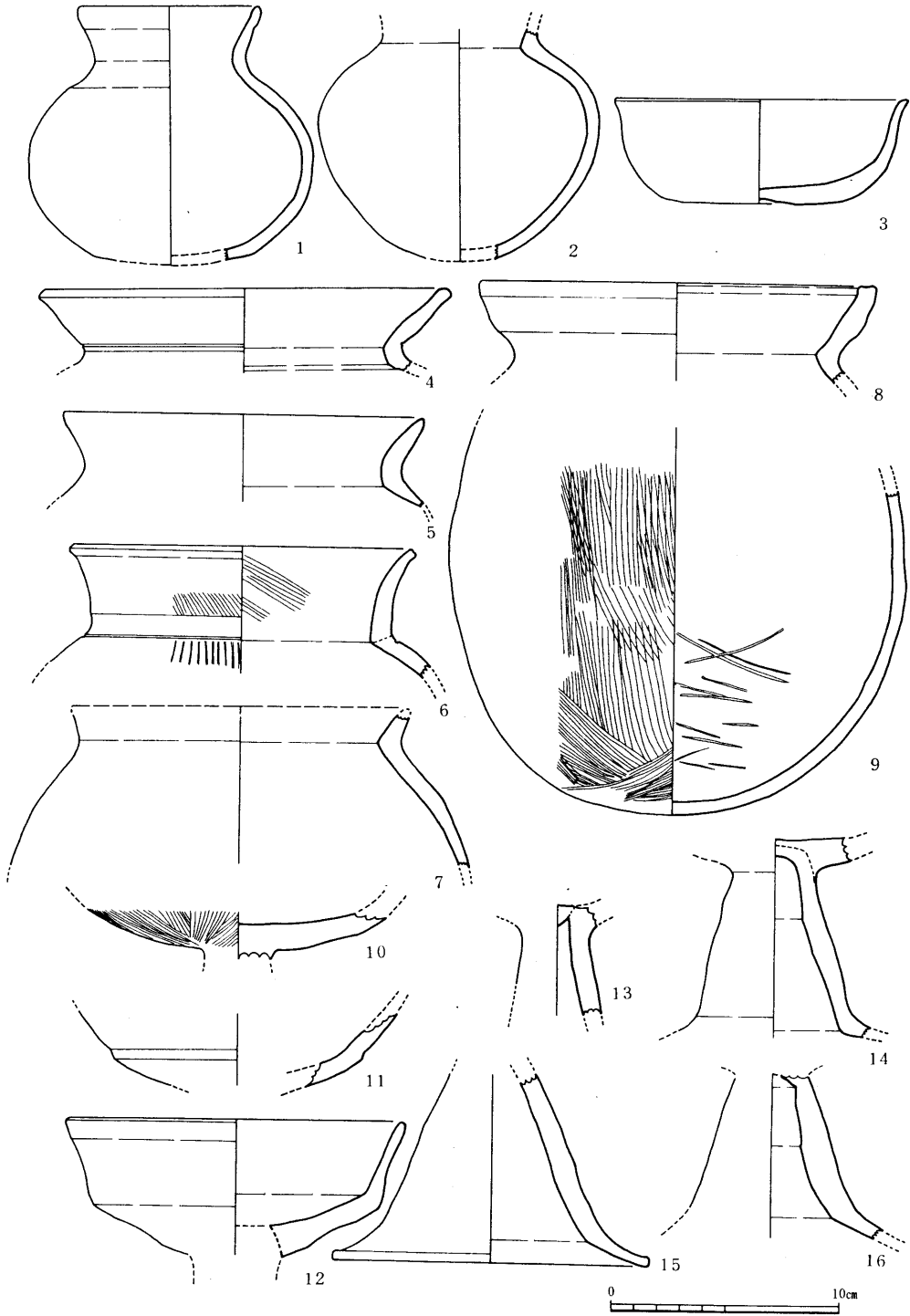


Fig.18 土師器 その1

遺 物

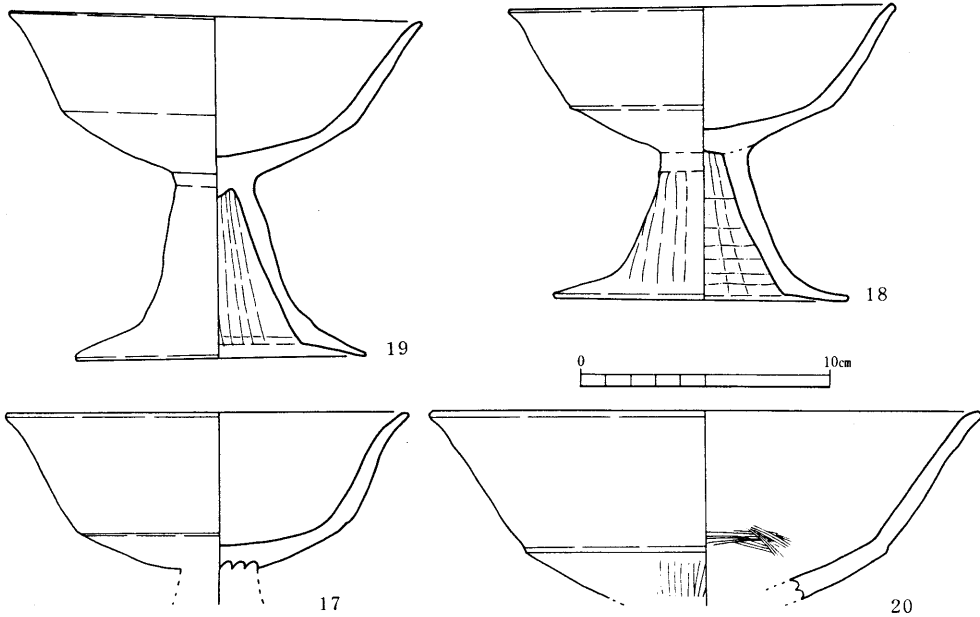


Fig.19 土師器 その2

Tab. 4 土師器観察表(1)

No.	器 種	口 径 底 *底 径 (cm)	器 高 (残存高) (cm)	色 調	胎 土	焼 成	備 考
1	壺	7.8	(11.4)	赤褐色	やや粗	良好	
2	壺		(10.2)	淡橙褐色	やや粗	良好	
3	碗	12.8	4.6	淡黄灰褐色	精緻	良好	
4	甕	17.6	(3.6)	淡黄灰褐色	やや粗	良好	
5	壺	15.7	(4.0)	茶褐色	粗	良好	
6	甕	14.9	(5.6)	淡灰茶褐色	精緻	良好	
7	甕		(6.6)	淡黄褐色	やや粗	不良	
8	甕	17.4	(4.2)	淡灰茶褐色	精緻	良好	
9	甕		(17.5)	外面 - 淡灰褐色, 内面 - 淡褐色	やや粗	良好	
10	高 坏		(2.0)	淡赤褐色	やや粗, 砂粒を含む	良好	
11	高 坏		(3.9)	淡黄灰褐色	やや粗	良好	
12	高 坏	14.5	(5.9)	淡灰茶褐色	精緻	良好	
13	高 坏		(4.8)	淡橙灰褐色	精緻	やや不良	
14	高 坏		(8.6)	淡黄灰褐色	やや粗	やや不良	
15	高 坏	13.9	(8.2)	明灰茶褐色	やや粗, 砂粒を含む	不良	
16	高 坏		(7.0)	赤褐色	精緻	やや不良	
17	高 坏	15.9	(6.3)	淡褐色	精緻	良好	
18	高 坏	15.0 *11.8	11.7	淡褐色	精緻	良好	
19	高 坏	16.6 *11.7	13.7	橙色	やや粗, 砂粒を少量含む	やや不良	
20	高 坏	15.3 *11.7	11.7	灰白色	精緻	良好	坏部外面に黒斑あり

れる。8は口縁端部に平坦面をもつ。内外面とも横ナデ調整。9は丸底の底部から均一の厚さで倒卵形胴部へ移行する。外面は胴部に縦方向の粗い刷毛目仕上げ。内面は筥削りで底部内面には指圧痕が残る。外面には所々煤付着。以上の甕の中で4・8・9は器形から見ると長胴化へ向かう5世紀前後のものであろう。また5は6世紀前葉のものと思われる。

高坏 (Fig.18, 19, 10~20 PL.15, 16) 10は塊状の坏部をもつものと思われ、内面はナデ、外面は坏と脚の接合部から放射線状に縦方向の刷毛目調整を施す。11は反転部の稜が明瞭であるが、屈曲度は小さい。外面はナデの後筥磨き、内面は横ナデ調整である。12は反転部の稜が不明瞭で口縁部は直立ぎみに外反する。調整は風化が激しく不明。13は脚部と坏部を連続して成形し、円板充填法により坏部を接合する。14~16はふくらみぎみに下方へ開く柱状部から、角度を変えて裾部に至る。14の調整は内面が縦方向の筥削り。15は外面が縦方向のナデ、脚裾は横ナデ調整である。16の調整は風化が激しく不明。12は坏部は深く、口縁部が直立ぎみに立ち上がり、反転部外面の稜がにぶいなど高坏形赤色土器の退化していく前段階の特徴を示し、6世紀前葉のものであろう。17~19は塊状の坏部をもつもので口縁端部は外反する。18・19は下方へ開く柱状部から角度を変えて、水平に近く折れ曲がる。18は低い脚部をもち、体部外面は横ナデ、反転部内面上半は横方向、下半は縦方向のナデ調整。脚柱部外面は縦方向の筥削り、裾部の内外面は横ナデ、内面は横方向の筥削りである。19は円板充填法により坏部を接合し、反転部外面の稜が不明瞭で坏部に比べ脚高は低い。脚柱はエンタシス状にややふくらみ、脚裾は水平に近く折れ曲がっている。坏部外面は横ナデ、反転部内面の上半は横方向、下半は縦方向の調整がなされる。脚柱外面は筥削り、脚裾は横ナデ、脚部内面は筥削り調整。19の脚柱がエンタシス状にふくらむという特徴から18は19に若干先行するものと考えられ、時代は5世紀後葉から6世紀前葉にかけてのものと思われる。20は坏部の破片で脚部を欠失する。坏部下半には明瞭な稜線を有する。内面の下半部には横方向の刷毛目、外面には縦方向の刷毛目を残す。17~19に比べて大型品である。

(定池博之*)

(注) 1) 山本一朗 「防長の土師器」 『山口県の土師器・須恵器』 (『周陽考古学研究所報』1981年)。

Ⅲ. 土師器 (古代～近世)

小皿 (Fig.20, 1～7 PL.16, 17) 切り離しは、すべて糸切りである。やや上げ底を呈する1以外は平底である。1～3は口径7.5～8.8cm、器高1.4～1.8cmを測る小皿で内外面ともろくろ回転による横ナデを施している。4はやや浅めの小皿である。調整は横ナデ。5は深めの皿である。体部はやや外反しながら直線的に立ち上がる。全体的に風化が著しいが外面にわずかに横ナデがみられる。6・7は口縁部を欠失する。比較的薄手で内外面ともろくろ回転による横ナデの痕が顕著に残る。

坏 (Fig.20, 21, 8・9・11～16・29～32 PL.16, 17) 8の底部は篋による切り離しで、ナデによる調整を施している。指圧痕が残っており平底である。底部内面には篋削りによるとみられる痕跡がある。体部は内外面とも横ナデである。9は破片で底部は糸切りである。調整は内外面とも横ナデ。11～13は糸切りで平底。調整は横ナデである。14は糸切りでやや上げ底を呈する。風化のため調整は不明。15は糸切りの後、高台を貼り付けナデを

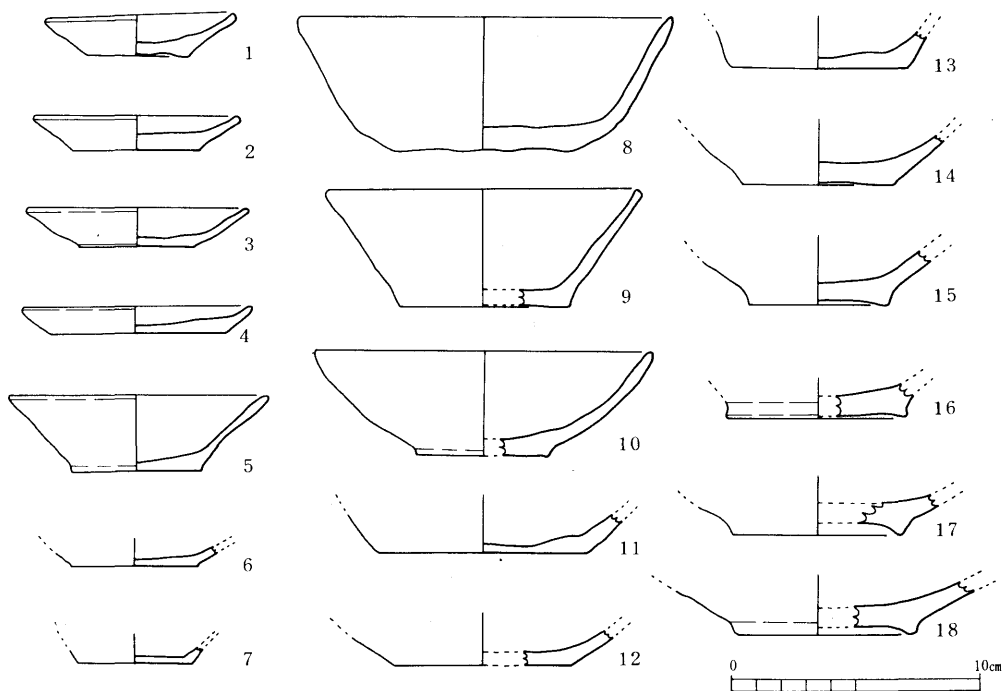


Fig.20 土師器 その3

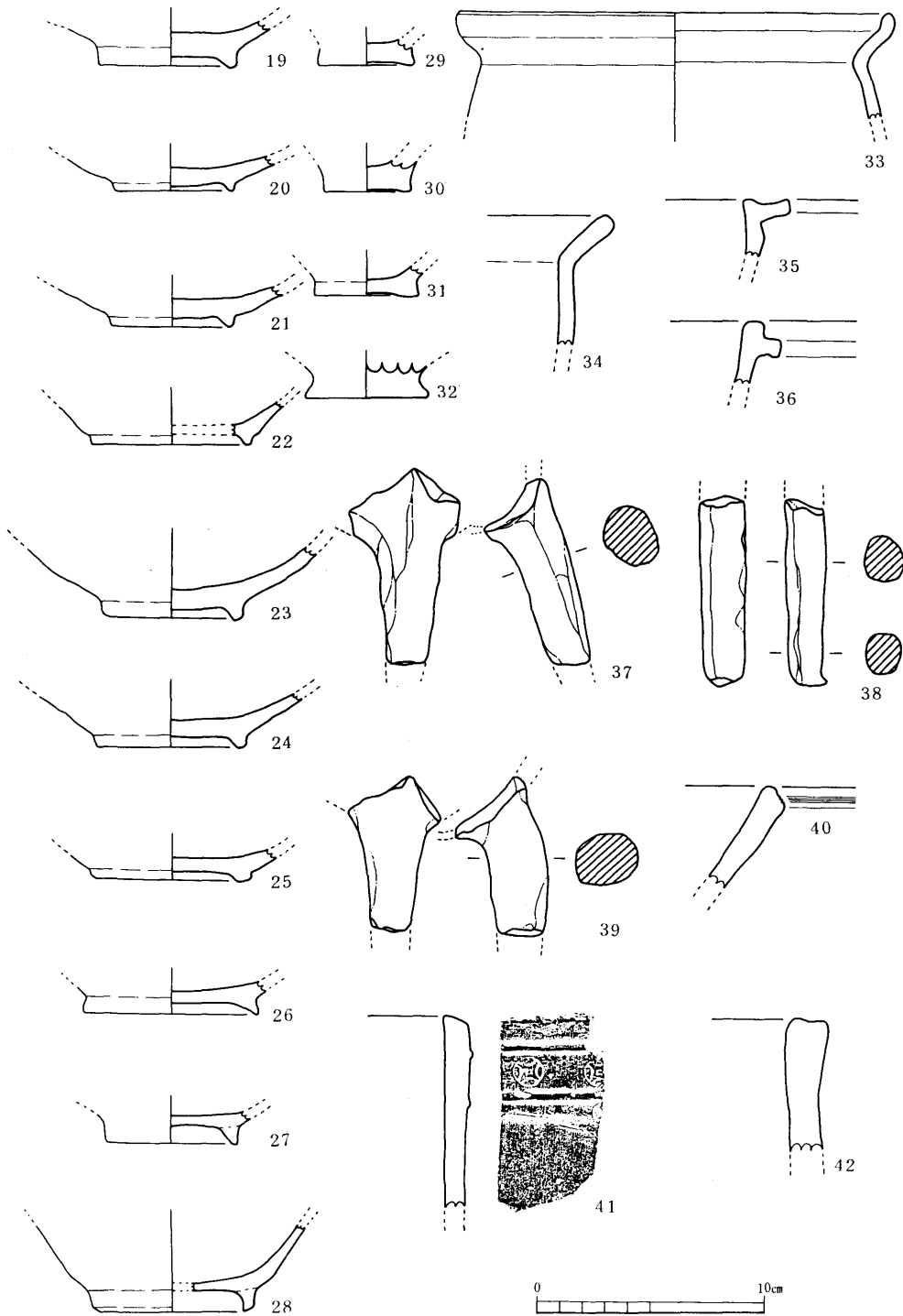


Fig.21 土師器 その4

遺 物

施したと思われるがほとんど剥落している。内外面とも横ナデによる調整である。16はやや上げ底の底部の破片。調整は風化のため不明。29～32はいわゆるベタ高台状のもので、すべて糸切り底である。29～31は若干上げ底、32は平底を呈する。調整は31が内面に横ナデ痕を残すのみで、他は風化のため不明。

壺 (Fig.20・21, 10・17～28 PL.17) 10は体部が大きく開き、口縁部は若干厚い。底部は糸切り。内外面ともに横ナデ仕上げ。17・18は糸切りをした底部に高台をつけ横ナデしている。19は底部を糸切りし、やや外に開き気味の高台を貼り付け横ナデを施す。内面はナデ、外面は横ナデによる調整である。20・21は底部の切り離し方法は不明。ともに低く細い高台を貼り付け横ナデを施す。19・20の外底には篋によるものと思われる痕跡がある。21は外底はナデ、体部外面は横ナデ、内面は篋磨きによる調整で重ね焼きの跡を残す。22は底部の破片。小さめの高台を貼り付け横ナデしている。23は底部を糸切りし、断面が方形に近い高台を貼り付け横ナデを施す。体部外面は横ナデ、内面は風化が著しく調整は不明。24・25は糸切り底で高台を貼り付ける。内面は篋磨き、外面は横ナデ。26は底部の破

Tab. 5 土師器観察表 (2)

No	器種	口径 *底径 (cm)	器高 (現残高) (cm)	色調	胎土	焼成	備考
1	小皿	(7.5) *(4.1)	1.8	淡橙色	良 0.1~0.3cm程度の長石を含む	良好	
2	小皿	(8.2) *(5.1)	1.4	にぶい黄橙色	やや粗い 0.1cm以下の砂粒を多量に含む	良好	
3	小皿	(8.8) *(4.6)	1.6	淡橙色	精良	良好	
4	皿	(9.1) *(6.9)	1.1	にぶい橙色	精良	良好	
5	皿	(10.4) * 5.2	3.0	灰白色	精良 0.1cm程度の砂粒、雲母を少量含む	やや軟	
6	小皿	*(5.1)	(0.8)	灰黄褐色	精良	良好	
7	小皿	* 4.5	(0.8)	淡橙色	精良	良好	
8	坏	(14.8) * 7.2	5.4	灰白色	精良 0.1~0.3cm程度の砂粒を少量含む	やや軟	
9	坏	(12.4) * 6.8	4.7	明褐灰色	精良	良好	
10	壺	(13.5) *(5.3)	4.2	灰白色	精良 0.1~0.2cm程度の砂粒を微量含む	良好	
11	坏	* 8.4	(1.6)	にぶい褐色	良 0.1~0.3cm程度の砂粒を含む	良好	
12	坏	*(7.0)	(1.5)	にぶい黄橙色	精良	良好	
13	坏	* 7.1	(1.6)	浅黄褐色	精良 0.2cm前後の砂粒を少量含む	良好	
14	坏	*(6.1)	(2.0)	内-淡橙色, 外-褐灰色	精良	良好	煤付着(外面下部)
15	坏	*(5.6)	(2.2)	にぶい黄橙色	良 0.1~0.25cmの石英、長石を含む	良好	

吉田構内学生会館新宮に伴う発掘調査

Tab. 6 土師器観察表(3)

No	器種	口径 *底径 (cm)	器高 (現残高) (cm)	色調	胎土	焼成
16	坏	* 7.1	(1.4)	灰黄褐色	精良 0.01~0.02cm程度の長石を少量含む	良好
17	碗	*(6.8)	(1.6)	灰白色	良 0.1cm程度の砂粒を少量含む	やや軟
18	碗	*(6.9)	(2.1)	明灰褐色, 底部外面に褐灰色の部分あり	精良 0.1~0.2cm程度の砂粒を少量含む	良好
19	碗	*(5.7)	(2.0)	灰白色	精良 0.1cm前後の長石を微量含む	良好
20	碗	* 5.2	(1.7)	灰白色	精良	良好
21	碗	* 5.2	(1.7)	灰白色	精良	良好
22	碗	*(7.0)	(1.9)	灰白色	精良	良好
23	碗	* 5.5	(3.2)	灰黄色	精良 0.2cm前後の長石を微量含む	良好
24	碗	*(6.4)	(2.4)	淡黄色, 底部外面に黄灰色の部分あり	精良	良好
25	碗	* 6.0	(1.4)	灰白色, 底部外面は灰色	精良 0.05~0.2cm程度の砂粒を少量含む	良好
26	碗	* 7.5	(1.5)	浅黄橙色	精良 0.2cm前後の砂粒を微量含む	良好
27	碗	* 5.4	(1.4)	内-淡黄色, 外-灰黄褐色	やや粗い 0.05~0.1cm程度の砂粒を多量に含む	やや軟
28	碗	*(6.2)	(3.8)	内-灰白色, 外-浅黄橙色	粗い 0.05~0.2cm程度の砂粒を多量に含む	やや軟
29	坏(皿)	*(4.0)	(1.2)	淡黄色	良 0.1cm程度の長石を微量含む	良好
30	坏(皿)	* 3.5	(1.5)	灰白色	良 0.2cm前後の長石を少量含む	やや軟
31	坏(皿)	* 4.5	(1.4)	灰白色	良	良好
32	坏(皿)	*(5.4)	(1.5)	明褐灰色	精良 0.05~0.1cm程度の砂粒を含む	やや軟
33	甕	(18.8)	(4.7)	内-茶褐色, 外-黒褐色	精良 0.2cm程度の石英, 長石を含む	良好
34	甕		(5.7)	浅黄橙色	粗い 0.05~0.15cm程度の砂粒を多量に含む	不良
35	鍋		(2.5)	にぶい橙色	精良 0.02~0.05cm程度の砂粒を少量含む	良好
36	鍋		(2.7)	淡赤褐色	良 0.02~0.05cm程度の砂粒を少量含む	良好
37	鼎(脚)		(8.6)	明黄褐色	精良 0.05~0.1cm程度の砂粒を少量含む	良好
38	鼎(脚)		(8.5)	明黄褐色	精良 0.05~0.1cm程度の砂粒を少量含む	良好
39	鼎(脚)		(6.8)	明黄褐色	精良 0.1cm前後の砂粒を少量含む	良好
40	鉢		(4.5)	淡黄色	精良 0.1cm前後の砂粒を微量含む	良好
41	火鉢		(8.4)	浅黄橙色	精良 雲母を少量含む	良好
42	火鉢		(5.6)	灰白色	やや粗い 0.1~0.4cm程度の長石を多量に含む	やや軟

片で風化が著しい。27は高台を貼り付けた外底に板状圧痕を残す。調整は不明。28はやや高めの内彎する高台を貼り付ける。

甕 (Fig.21, 33・34 PL.17) 33は体部以下を欠失する。口縁部はやや外彎しながら立ち上がり、口縁端部は直立する。調整は横ナデ仕上げ。34も口縁部で、肥厚しながら外反する。風化が著しく調整は不明。

遺 物

土鍋 (Fig.21, 35・36 PL.17) とともに口縁部の破片である。鏝は口縁部の上端に近い位置に貼付されている。

土鼎 (Fig.21, 37~39 PL.17) いずれも脚部である。37・39は下半部を欠失する。すべて手捏ねで、成形時の指圧痕が見られる。

鉢 (Fig.21, 40 PL.17) 口縁部の破片で、口縁端部は面をなし、二条の沈線がめぐり、内面は横方向の刷毛目、外面は風化のため不明。

火鉢 (Fig.21, 41・42 PL.17) 41は直線的に立ちあがる体部をもつ。口縁部下に二条の低い突帯を貼付し、その間に「㊸」のスタンプを押捺している。42は41に比べかなり肉厚であり、大甕の可能性もある。かなり風化しており調整は不明。

これらの時期について概述すると、皿、坏、埴は概ね平安時代後半から鎌倉時代にかけてのものが大半であるが、6・7のように室町時代後半から近世まで下るものも含まれている。甕 (33) は、周防国府ID・IG地区SK106出土のものに近似するもので、平安時代中頃まで遡る可能性をもつ。土鍋や鼎は鎌倉時代を中心としたもので、火鉢は室町時代のものと思われる。

(福 島)

〔注〕 1) 吉瀬勝康 「周防国府跡昭和53年度発掘調査概報」『防府市文化財調査年報Ⅱ』、防府市教育委員会、(1979年)。

IV 須恵器

蓋 (Fig.22, 1~10 PL.18) 1~4はつまみの破片。頂部が窪むもの (1・2)、扁平で頂部を手持ち篋削り成形したもの (3)、退化した扁平な宝珠状のもの (4) がある。すべて回転ナデ調整。5は断面四角形のやや外反する環状つまみを有し、口縁部は上方に反り上がる。口縁部および外面は回転ナデ、内面は静止ナデ。6は扁平なボタン状のつまみを有し、天井部からゆるやかに下降して断面鳥嘴状の口縁部にいたる。端部は鋭い。全面回転ナデ調整。7~10はすべて端部が外方へ開き鳥嘴状の口縁部をもつ。端部外面は窪む。7は天井部が「ドーム」状にふくらむ。天井部内面を除き回転ナデ調整。内面は静止ナデ。8は平坦な天井部をもつものと思われ、全面回転ナデ調整。9は「ドーム」状の天井部 (内外面) が不整方向のナデ、他は回転ナデ調整。10は天井部に指圧痕が残る他は回転ナデ調整。7・8においては回転ナデ調整後、天井部外面に「刷毛」状工具による調整痕が認められる。

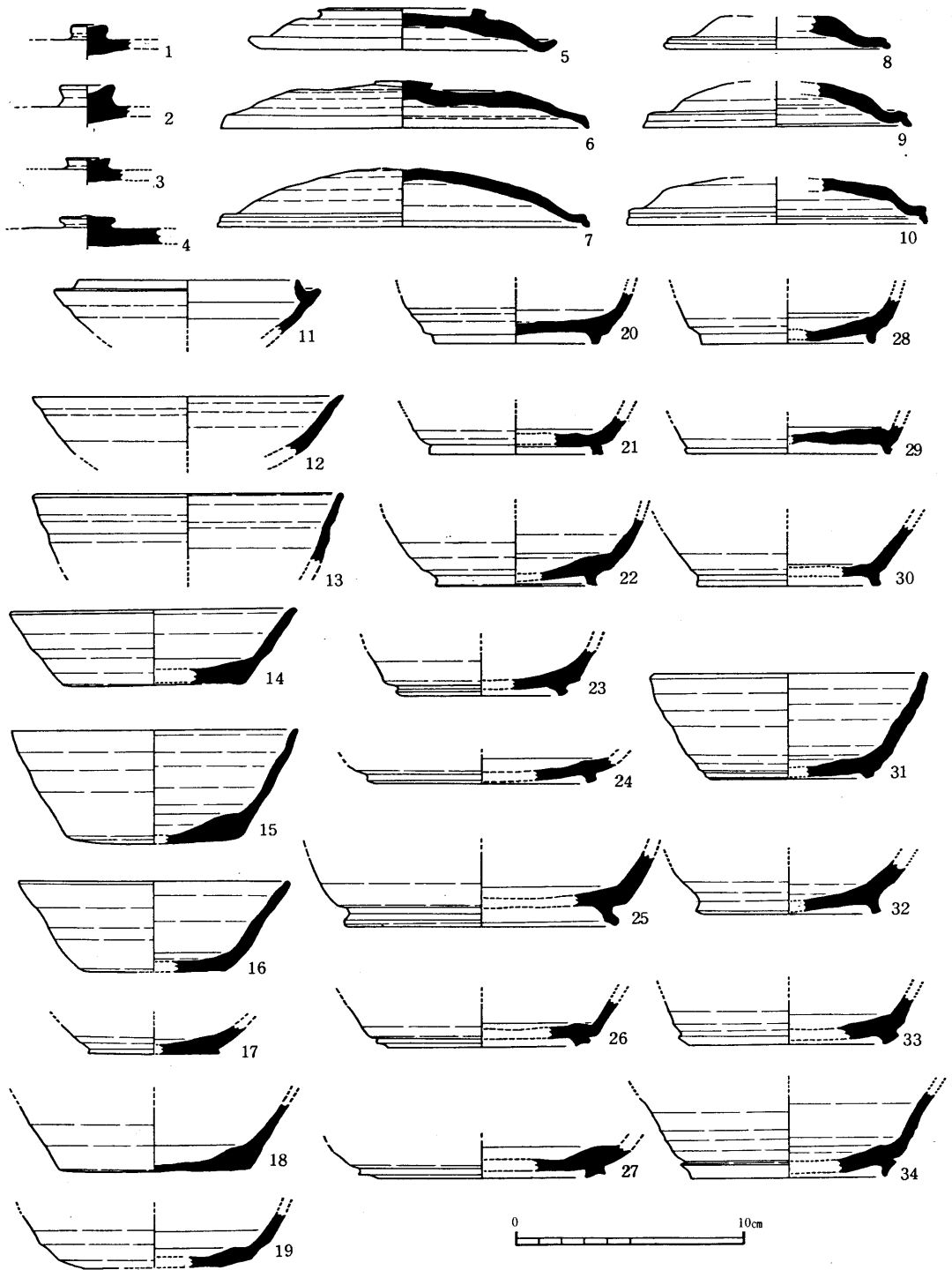


Fig.22 須恵器 その1

遺物

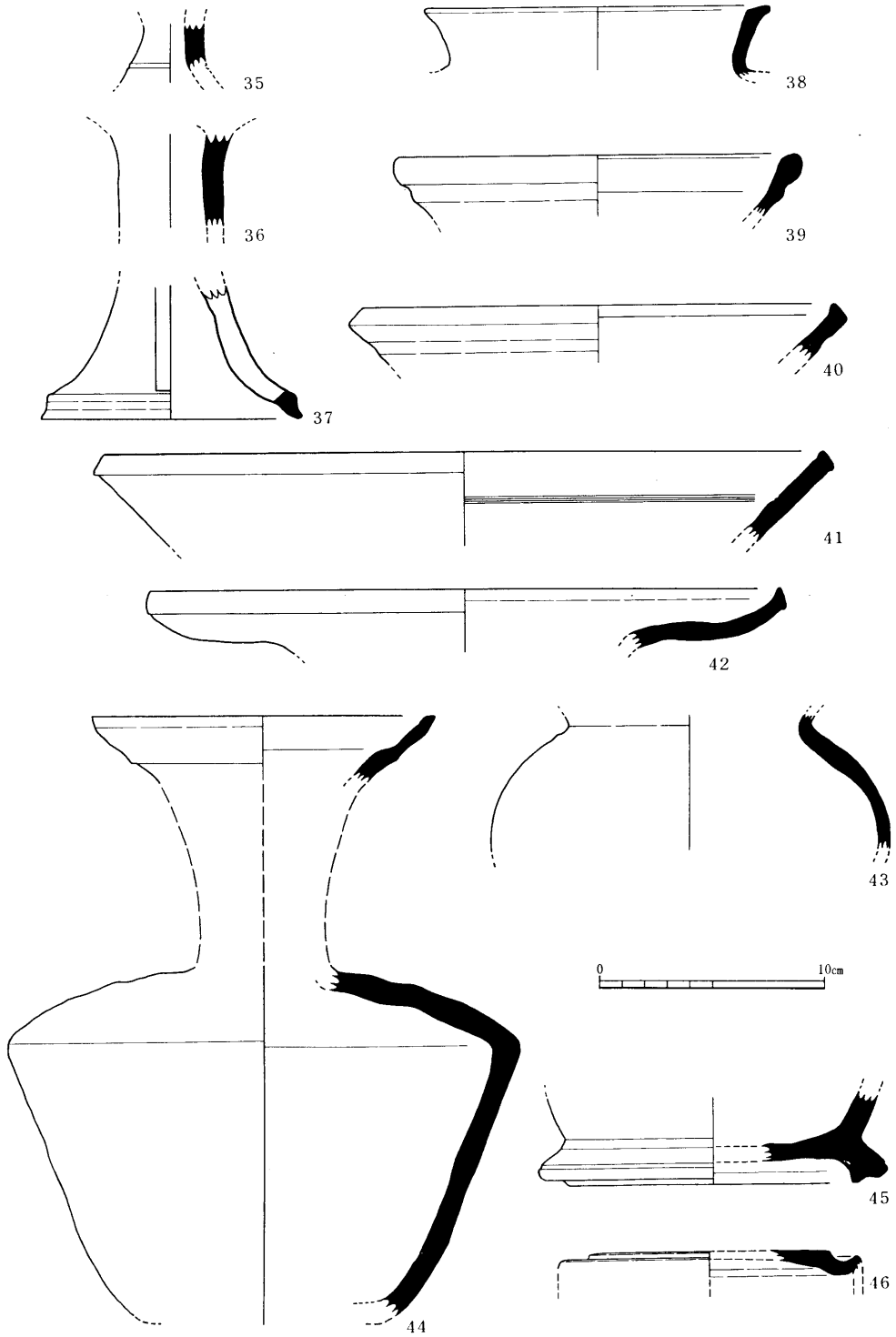


Fig.23 須恵器 その2

吉田構内大学会館新宮に伴う発掘調査

Tab.7 須恵器観察表(1)

No	器種	口径 *底径 (cm)	器高 (既存高) (cm)	色 調	胎 土	焼 成	備 考
1	蓋		(1.3)	暗青灰色	精緻	良 好	一部に墨痕あり
2	蓋		(1.8)	暗青灰色	精緻	良 好	
3	蓋		(1.1)	暗青灰色	精緻	良 好	
4	蓋		(1.5)	黄灰色	精緻	良 好	
5	蓋	12.2	1.9	青灰色	砂粒を含む	良 好	
6	蓋	16.2	2.2	青灰色	砂粒を含む	良 好	
7	蓋	16.4	(2.7)	外面-紫灰色, 内面-暗青灰色	1~2mm程度の砂粒を含む	良 好	外面一部に刷毛状の工具痕あり
8	蓋	9.8	(2.0)	青灰色	精緻	良 好	
9	蓋	11.9	(3.0)	外面-明青灰色, 内面-青灰色	精緻	良 好	
10	蓋	13.2	(2.1)	外面-青灰色, 内面-黄灰色	精緻	良 好	
11	坏	9.7	(2.5)	外面-灰オリブ色, 内面-灰白色	やや粗	やや良好	
12	坏	13.7	(2.7)	外面-青灰色, 内面-明青灰色	精緻	良 好	
13	坏	13.6	(3.2)	外面-灰オリブ色, 内面-青灰色	精緻	良 好	
14	坏	12.6	3.5	外面-明オリブ灰色, 内面-緑灰色	精緻	良 好	
15	坏	12.7	5.2	外面-灰白色, 内面-明青灰色	精緻	良 好	
16	坏	6.3	4.1	青灰色	砂粒を含む	良 好	
17	坏	5.8	(1.3)	外面-明オリブ灰色, 内面-オリブ灰色	精緻	良 好	
18	坏	8.5	(3.0)	明緑灰色	精緻	良 好	
19	坏		(2.3)	外面-灰黄色, 内面-にぶい褐色	精緻	良 好	
20	碗	* 7.2	(3.2)	外面-青灰色, 内面-暗青灰色	精緻	良 好	
21	碗	* 7.6	(1.5)	外面-暗青灰色, 内面-灰色	精緻	良 好	
22	碗	* 7.1	(3.0)	灰白色	やや粗	不 良	
23	碗	* 6.5	(2.0)	明青灰色	精緻	良 好	
24	碗	* 9.2	(0.8)	外面-灰色, 内面-灰白色	精緻	良 好	ヘラ記号
25	碗	*11.9	(3.1)	外面-青灰色, 内面-灰褐色	精緻	良 好	
26	碗	* 8.3	(1.8)	外面-浅黄色, 内面-灰色	精緻	良 好	
27	碗	* 9.2	(1.3)	外面-明青灰色, 内面-青灰色	精緻	良 好	
28	碗	* 7.6	(2.0)	灰白色	精緻	良 好	
29	碗	* 8.9	(1.2)	明青灰色	精緻	良 好	
30	碗	* 8.1	(2.5)	外面-緑灰色, 内面-青灰色	精緻	良 好	
31	碗	* 11.8 * 6.8	4.8	暗青灰色	砂粒をやや多く含む	良 好	
32	碗	* 7.5	(2.1)	浅黄色	やや粗	やや不良	
33	碗	* 8.6	(2.0)	オリブ灰色	精緻	良 好	
34	碗	* 8.6	(3.6)	明緑灰色	精緻	良 好	
35	高坏		(3.3)	灰白色	精緻, 1mm大の石少量含む	やや不良	
36	高坏		(4.0)	灰白色	精緻	やや不良	
37	高坏		(5.7)	外面-灰オリブ色, 内面-青灰色	精緻	良 好	かたく焼きしまり外面に変質が認められる
38	甕	15.2	(2.8)	外面-黒色, 内面-オリブ灰色	精緻, 1mm大の石2,3含む	良 好	

遺 物

Tab. 8 須恵器観察表(2)

No.	器 種	* 口径 底径 (cm)	器 高 (現存高) (cm)	色 調	胎 土	焼 成	備 考
39	鉢	17.6	(3.0)	青灰色	精緻 径0.5mm大の石多量含む	良好	
40	鉢	21.0	(2.5)	外面-明オリブ灰色, 内面-浅黄色	精緻 径1mm大の石2,3含む	良好	
41	鉢	32.0	(4.0)	外面-明灰色, 内面-暗青灰色	精緻	良好	
42	盤状高坏	28.0	(2.8)	外面-灰色, 内面-暗緑灰色	精緻 径1mm大の石含む	良好	調整があまり
43	壺		(6.0)	外面-黄褐色, 内面-灰白色	精緻	良好	外面に変質が認められる
44	長頸壺	15.2		口縁部外面-緑灰色, 肩部外面-赤灰色 胴部外面-灰白色, 内面-灰白色	粗い	やや軟	変質が認められる
45	長頸壺	*12.6	(3.9)	青灰色	精緻 径1mm大の石2,3含む	良好	
46	碗	15.5	(1.2)	青灰色	精緻	良好	

坏 (Fig.22, 11~19 PL.18) 11は立ちあがり短く外反し、受部は外上方へ短く伸びる。立ちあがり端部は鋭い。全面回転ナデ調整。12は体部が内彎気味に立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。端部は鋭い。全面回転ナデ調整。13は体部が直線的に開き口縁部にいたる。全面回転ナデ調整。14は口径に比べて器高が低い。体部は直線的に立ち上がり、口縁部は外反する。底部は篋切り後ナデ仕上げ、他は回転ナデ調整。15は体部が底部から一旦稜をなして内彎気味に立ち上がり、端部は鋭い。底部は篋切り底で、体部は内外面とも回転ナデ調整。16は平坦な底部から体部が内彎気味に立ち上がり、体部中位で外反する。底部は篋切り底で、体部全面は回転ナデ調整、底部内面は静止ナデ。17は円盤状の篋切り底で全面回転ナデ調整。18は体部がななめ直線的に立ち上がる。底部外面は篋切り後ナデツケ、底部内面は不整方向のナデ、体部内外面は回転ナデ調整。19は底部と体部の境が不明瞭で体部が内彎しながら立ち上がる。底部は篋切り、体部全面回転ナデ調整。

壺 (Fig.22, 20~34 PL.18) 20~27は底部端よりやや内側に高台を貼り付けるもの。20は断面逆台形状の直立する高台を付す。21は断面四角形の高台を付し、端部がやや窪む。22は体部がなだらかに内彎気味に立ち上がる。23は「ハ」の字状に開く高台を付す。24は底部外面に篋記号が認められる。25は大型のもので外方に屈曲しながら開く高台を付す。26・27はともに扁平な高台を付す。22が底部内面に静止ナデを施す他は、すべて全面回転ナデ調整。28~33は底部と体部の境に高台を貼り付けるもの。28は断面三角形状の高台を付し、全面回転ナデ調整。29は体部が平坦な底部から急角度を成して立ち上がるもので全面回転ナデ調整。30・32はともに断面長方形の高台を付す。30は底部外面篋切り後ナデツケ。その他は回転ナデ調整。32は底部内外面不整方向のナデ、体部全面回転ナデ調整。31は成形

がやや粗雑で直線的に体部が立ち上がる。全面回転ナデ調整。33・34は大きく外方へ開く高台を有するもの。33は外ふんばりの扁平な高台を付す。底部は篋切り後ナデツケ。底部内面は静止ナデ、その他は回転ナデ調整。34は底部内面不整方向のナデ。その他は回転ナデ調整。

高坏 (Fig.23, 35~37 PL.19) すべて脚部の破片。35・36ともに上半部で、35は外面に一条の沈線を有する小型のもの。外面は回転ナデ調整。内面は絞り痕が残る。36はやや厚手のもの。37は裾部が「ハ」の字形にゆるやかに開くもので、脚端部は鳥嘴状に尖り気味に終わる。裾部に長方形の透しを有する。36・37とも全面回転ナデ調整。

甕 (Fig.23, 38 PL.19) 直線的に外反する口縁部の破片。口唇は平坦で内傾する。全面回転ナデ調整。

鉢 (Fig.23, 39~41 PL.19) すべて口縁部の破片。39は口縁端部が肥厚し丸く終わる。40は内端部がやや内側につまみ出されている。41は広口のもので口縁部は直線的に開く。口縁部内面に浅い二条の沈線が巡る。39~41ともすべて回転ナデ調整。

盤状高坏 (Fig.23, 42 PL.19) 坏部の破片。坏部は浅く、内彎しながら立ち上がる。口縁端部は断面鳥嘴状に上方に突出する。内面および口縁部は回転ナデ調整。

短頸壺 (Fig.23, 43 PL.19) 体部上半部の破片。球形の体部をもち、肩部にセットになると思われる蓋との重ね焼き痕が認められる。全面回転ナデ調整。

長頸壺 (Fig.23, 44・45 PL.19) 44は頸部と底部を欠損する。口縁部は内側に弱く屈曲し端部は平坦でやや内傾する。肩部は強く張り、最大径を肩部にもつ。全面回転ナデ調整。口縁部全面および肩部に一部自然釉（緑色）がかかる。45は底部の破片。「ハ」の字形に開く高台を付す。高台端部は窪み、内側端が接地する。高台外面下半部に一条の沈線が巡る。内面および高台は回転ナデ調整、底部は篋切りの後、ナデを施す。

碗 (Fig.23, 46 PL.19) 陸の周辺から外縁にかけての部分である。堤は顕著でなく、外縁は陸よりわずかに低い。陸部分は多方向にナデ調整が施される。他は回転ナデ調整。

これらの器種の時期であるが、桑原邦彦・池田善文両氏の防長地域における¹⁾編年を参考にして推考してみれば、6世紀後半から7世紀前半代にさかのぼるであろうと思われるものが含まれているが、²⁾おおよそ、8世紀から9世紀前半代、下³⁾っても9世紀後半代のものにおさまるようである。また、豊前における小田富士雄氏の編年に対照すると⁴⁾Ⅻ期～Ⅷ期、畿内・陶邑編年では⁵⁾Ⅳ型式Ⅰ段階～Ⅴ型式にかけてのものが多い。

(高下洋一*・柏本秋生*)

〔注〕

- 1) 桑原邦彦・池田善文『防長地域の須恵器窯跡と編年研究』（『周陽考古学研究所報』、1981年）。
- 2) 注1)によると、ⅣA期頃になる。
- 3) 注1)によると、ⅦA期からⅧB期になる。
- 4) 小田富士雄他『天観寺山窯跡群』（北九州市埋蔵文化財調査会、1977年）。
- 5) 中村浩『和泉陶邑窯の研究－須恵器生産の基礎的考察－』（歴史学研究叢書、1981年）。

V. 瓦質土器

土鍋・土鼎 (Fig.24, 1～17 PL.20) 1～11は土鍋・土鼎の口縁部から体部にかけての破片である。口縁はいずれも短く外反し、上端をわずかにつまみ上げるものが多い。端部外面は丸くおさまるものと面をなすものがある。体部はくびれ部より直線的に下方へ内傾するもの(1～4・11)と垂直気味に下がるもの(5・6・8～10)に大別でき、またくびれ部外面が凹むもの(1・2・4・5)もある。調整をみると、大半の口縁部は横ナデ仕上げであるが、3は口縁内面に横方向の刷毛目を施す。体部は内面が横ナデのもの(1・2・8・11)と横方向に刷毛目調整を施すもの(3・10)があり、外面は縦方向に刷毛目が認められる(3・7～10)。また、2は指圧による整形・調整が施されるが粗雑である。12・13は外面に鐮状の突帯が貼付けられている。12は口縁端部外面直下に貼付され、上面は水平な面をなし、端部外面をわずかに上方へつまみ上げている。13は断面長方形の突帯を有する。14は胴底部の破片で、内面は比較的細かい刷毛目調整、外面は格子目の叩きが施されている。15～17は土鼎の脚部で、15・16は上半部、17は下半部である。17は先端が外側へわずかに開き、いわゆる獣足気味である。いずれも指圧成形後ナデ調整。15の体部内面には粗い刷毛目痕が残る。

擂鉢 (Fig.24, 18・19 PL.20) 内面に櫛状工具による条痕が施される。18は端部が肥厚する口縁をもち、条痕は一単位四本である。内面に刷毛目調整が認められる。19は風化のためかなり器表が磨滅している。

鉢 (Fig.25, 20～26 PL.20, 21) 20～25は口縁部である。20～24は口縁部が肥厚するもので20は内傾する面をもつ。21は片口を有するもので、片口部分は断面方形状を呈する。22は外傾面を有する口縁。23・24は口縁上端が水平面をなすもので、24は外面が凹面を呈する。25は体部が次第に厚味を帯びて立ち上がり口縁部にいたるもので、上端はやや外傾する面をもち、三条の沈線がめぐる。また、口縁部外面直下に幅広い凹みを有するが浅い。26は平底の底部からやや内彎気味に立ち上がる短い体部をもち、口縁端部は内側にわずかに張り出し、中凹みの面を呈する。これらの口縁部の調整は、判明するものでは横ナデ(21・

吉田構内大学会館新宮に伴う発掘調査

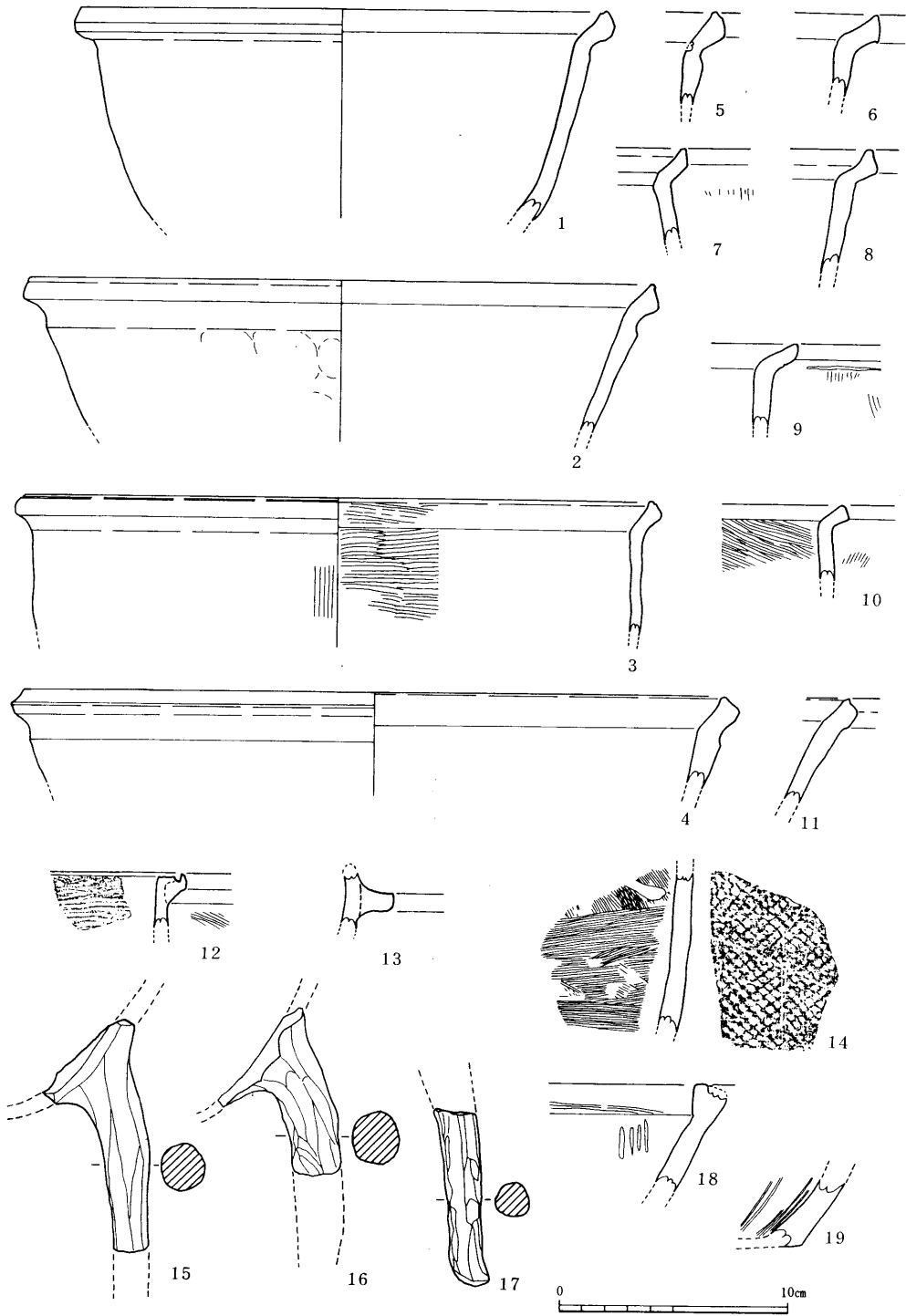


Fig.24 瓦質土器 その1

遺物

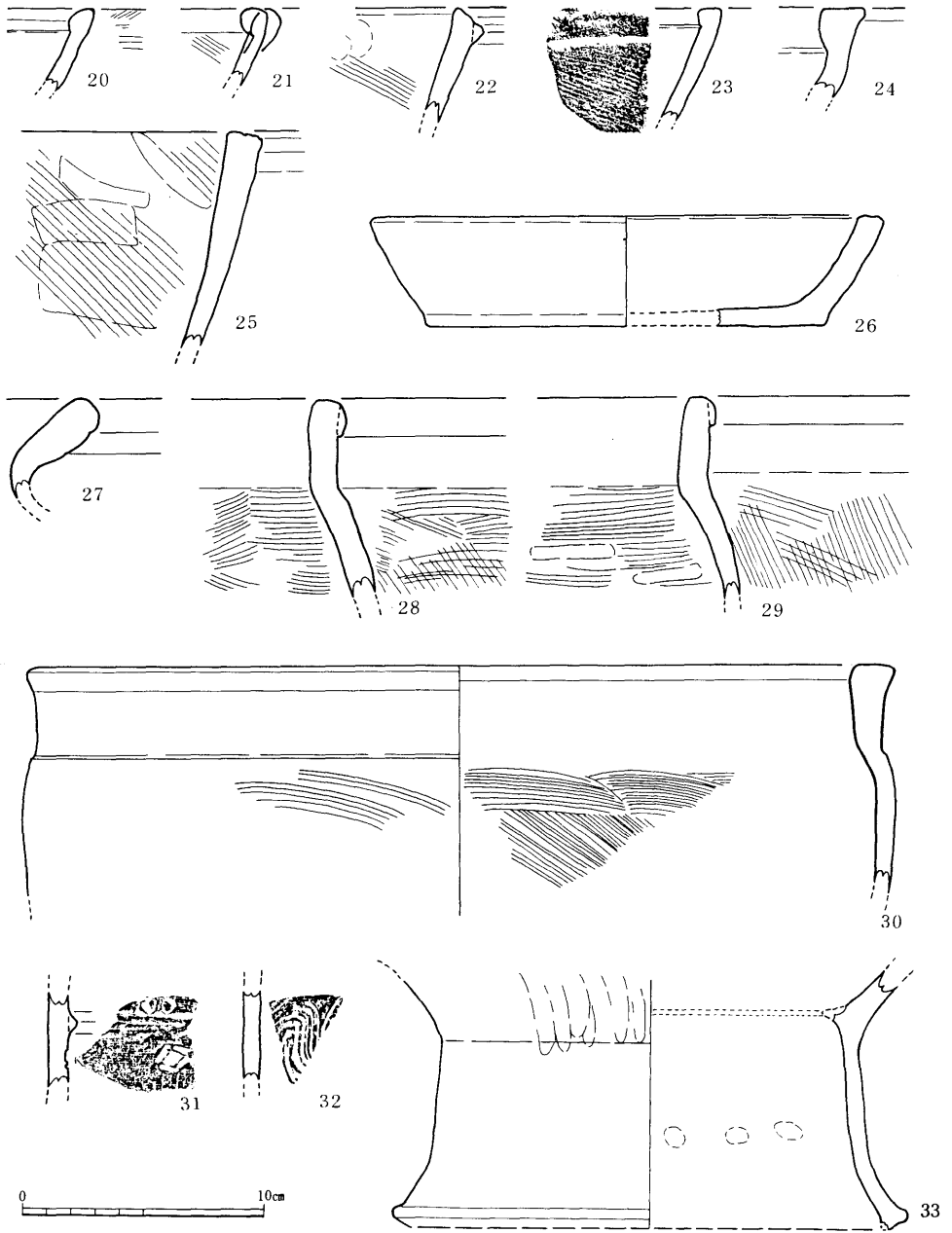


Fig.25 瓦質土器 その2

吉田構内大学会館新宮に伴う発掘調査

Tab. 9 瓦質土器観察表

No.	器種	口径 *底径 (cm)	器高 (現存高) (cm)	色調	胎土	焼成	備考
1	土鍋	23.0	(9.3)	内-浅黄褐色, 外-灰白色	良 石英, 長石, 雲母, 砂粒を含む	良好	煤付着(内・外)
2	土鍋	27.1	(6.5)	内-灰色 外-浅黄褐色	良 石英, 長石, 雲母, 砂粒を含む	良好	
3	土鍋	27.4	(5.9)	灰黒色	精良 長石, 雲母, 砂粒を含む	良好	
4	土鍋	30.6	(4.1)	内-淡褐色, 外-灰黒色, 断面-淡褐色	精良 1~2mmの石英を多く含む 0.5mmの黒雲母を含む	良好	
5	土鍋		(4.1)	内-灰色, 外-濃い灰色	精良 石英, 雲母を含む	良好	
6	土鍋		(3.6)	内-灰白色 外-灰色	やや粗い 長石, 石英, 砂粒を含む	良好	
7	土鍋		(3.6)	内-淡黄褐色, 外-濃い茶褐色	精良 1mm程度の砂粒を含む	良好	
8	土鍋		(5.2)	灰白色	精良 石英, 雲母, 砂粒を含む	良好	煤付着(内外とも上部約4cm)
9	土鍋		(3.7)	内-淡黄色 外-黒褐色	精良 石英, 雲母を含む	やや不良	煤付着(外)
10	土鍋		(3.4)	内-淡黄色 外-茶褐色	精良 1mm程度の砂粒を含む	良好	
11	土鍋		(4.7)	内-灰色 外-濃い灰色	精良 雲母, 長石を含む	良好	煤付着(外)
12	土鍋(鼎)		(2.4)	灰黒色	精良 1mm程度の砂粒を少量含む	良好	
13	土鍋(鼎)		(2.4)	内-淡黄灰色 外-灰黒色	良 2mm以下の砂粒を含む	良好	風化(内)
14	土鍋(鼎)		(7.0)	内-黒褐色 外-灰褐色	精良 1mm程度の砂粒を少量含む	良好	
15	鼎(脚)		(9.9)	体部-灰色 脚部-灰白色	良 石英, 長石, 雲母, 砂粒を含む	良好	
16	鼎(脚)		(7.3)	内-淡灰色 外-灰色	良 長石, 雲母, 砂粒を含む	良好	
17	鼎(脚)		(7.7)	淡灰白色	精良 1mm程度の砂粒を含む	良好	煤付着(外)
18	搦鉢		(4.7)	内-淡褐色 外-灰黒色	精良 3mm以下の石英, 長石を含む	良好	
19	搦鉢		(2.6)	内-黄褐色 外-灰色	精良 石英, 長石, 砂粒を含む	良好	
20	鉢		(3.4)	内-淡褐色 外-黒褐色	良 石英, 長石, 雲母を含む	良好	煤付着(外)
21	鉢		(3.3)	淡黄色	精良 石英, 長石, 砂粒を含む	良好	
22	鉢		(4.7)	灰黒色	精良 1~3mmの石英, 砂粒を含む	良好	
23	鉢		(4.6)	内-灰色, 外-淡灰白色 断面-淡黄色	精良 石英, 雲母と少量の砂粒を含む	良好	
24	鉢		(3.7)	内-灰白色 外-黒褐色	精良 石英, 長石, 雲母, 砂粒を含む	良好	煤付着(外)
25	鉢		(8.9)	灰白色	良 石英, 長石, 雲母, 砂粒を含む	良好	
26	鉢	19.8	4.5	内-淡黄褐色, 外-淡黄褐色(胴部) 黒褐色(底部)	良 2mm以下の石英, 長石を含む	良好	
27	甕		(3.6)	内-灰色 外-淡灰色	良 石英, 長石, 雲母を含む	良好	
28	甕		(8.0)	灰色	精良 石英, 長石, 雲母を含む	良好	
29	甕		(8.1)	灰色	精良 長石, 雲母, 砂粒を含む	良好	
30	甕	35.8	(9.5)	灰色	精良 石英, 長石, 雲母, 砂粒を含む	良好	
31	火舎		(3.6)	灰色	精良 石英, 長石, 雲母, 砂粒を含む	良好	
32	不明		(3.7)	灰色	精良 石英, 長石, 雲母を含む	良好	
33	不明	19.4	(10.1)	黒褐色, 断面-淡褐色	精良 1mm程度の石英を含む	良好	

遺 物

22・24・26)が多い。25の体部内面には斜め方向の刷毛目調整および削り痕が認められる。

甕 (Fig.25, 27~30 PL.21) 27は大きく外反する口縁の破片で、頸部内面は稜をもたずに屈曲し、口縁端部は丸味をもつ。28・29は内傾する体部をもち、口縁部は直立する。口縁端部外面に扁平で貧弱な粘土帯が貼付けられている。30は口縁が直立し、端部は肥厚し面をなす。いずれも口縁部調整は横ナデである。28~30の体部内外面は粗く刷毛目を施す。

火舎 (Fig.25, 31 PL.21) 口縁ないしは体部下位の破片で、外面に扁平な断面三角形の突帯が貼付けられており、その上方に二つの小円、下方に菱形のスタンプを押捺している。

その他 (Fig.25, 32・33 PL.21) 32・33は器種不明。32は外面に櫛描状の波状文が施されている。33は内面中位に端部を欠損した突出部がある。成形は比較的粗雑で、内外面に指圧による凹凸面を残し、また外面には成形時の粘土接合の痕跡もみられる。突帯より下位は内外面が横ナデ、突帯上位内面は横刷毛目、他の部分はナデツケが施されている。

瓦質土器の大半は、鎌倉時代から室町時代の範疇におさまるものであるが、下右田遺跡²⁾や松岡睦彦氏³⁾による防長の中世土器編年試案を参照してみると、今回出土したものは、土鍋では鎌倉時代前半期のものが多く、また甕や火舎 (31) では室町時代後半に位置づけられるものがあるなど、これらの土器類には全体的にかなりの年代幅が認められる。

(乾風千絵*・米倉智美*・渡辺由加*)

[注]

- 1) 松岡睦彦氏は脚部先端の突出部を「爪」部としている。山口県教育委員会『吉田岡昌・吉田大浴・下長野』(1973年)。
- 2) 山口県教育委員会『下右田遺跡 第4次調査概報・総括』(1980年)。
- 3) 松岡睦彦「山口県域における古代中世の土器」(『山口考古』、山口考古学会、1983年)。

VI. 輸入陶磁器・緑釉陶器・黒色土器・瓦器・国産陶磁器ほか

輸入陶磁器

白磁 (Fig.26, 1~39 PL.21)

1~17は碗の口縁部で、口縁端部が玉縁を呈するものである。4・9・11・13・14の口縁部付近には釉が二重にかかる。16・17は小形の玉縁で、皿になる可能性もある。18~21・26は皿の口縁部である。19は口縁端部付近で上方に弱く屈曲し、ほぼ直立する。20・21はやや外反する口縁を持つ。体部外面下半を除き施釉しており、内面には1条の沈線を有する。22~25・27・28は碗の口縁部である。25は口縁端部が丸く、端部外側がやや外方に突出する。27・28は口縁部がやや外反し、端部は水平面をなすもので、28の外面には指頭痕が認められる。29~35は碗の底部である。29~32は断面四角の高台を有するもので、削り

吉田構内大学会館新宮に伴う発掘調査

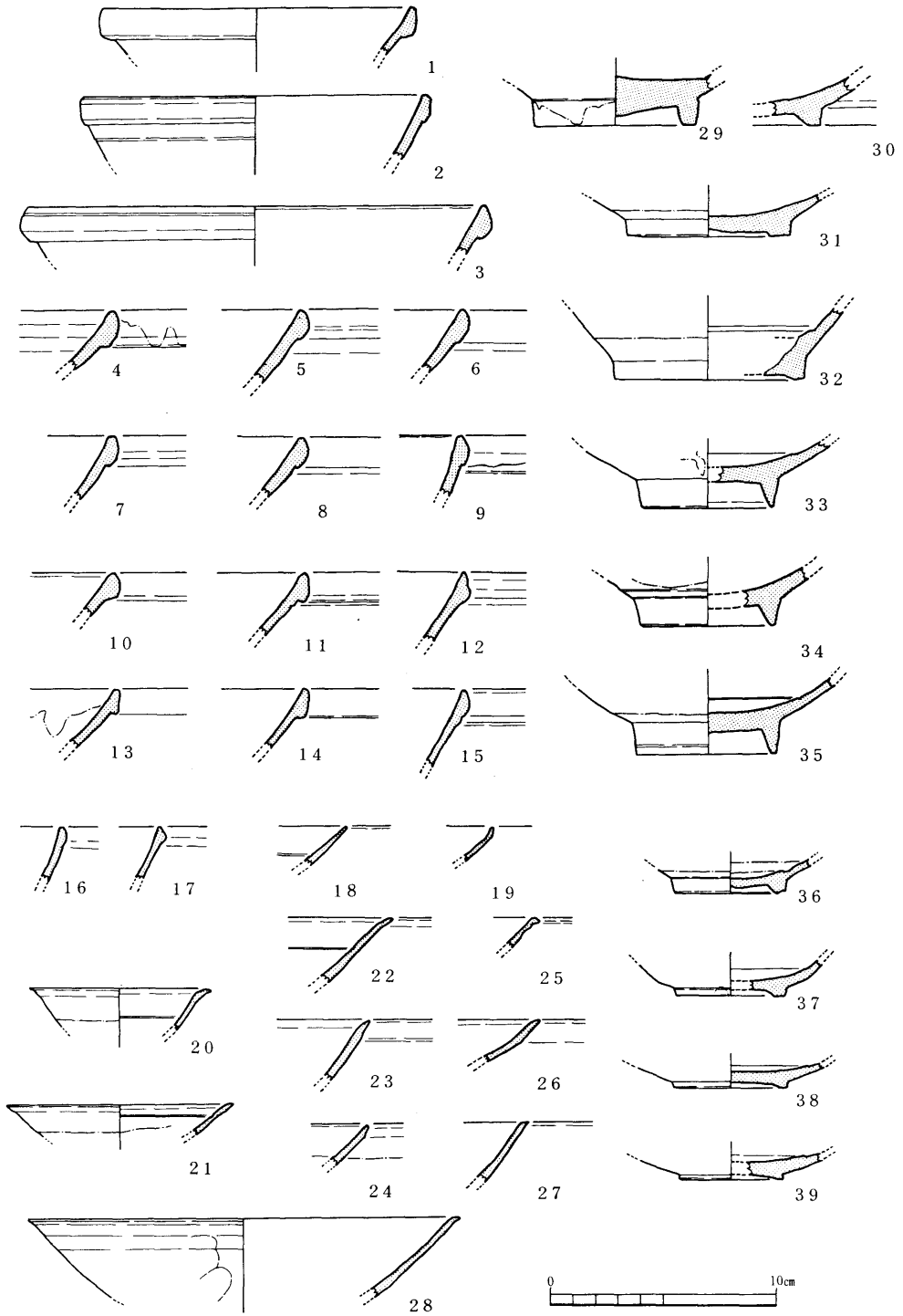


Fig.26 輸入陶磁器 その1

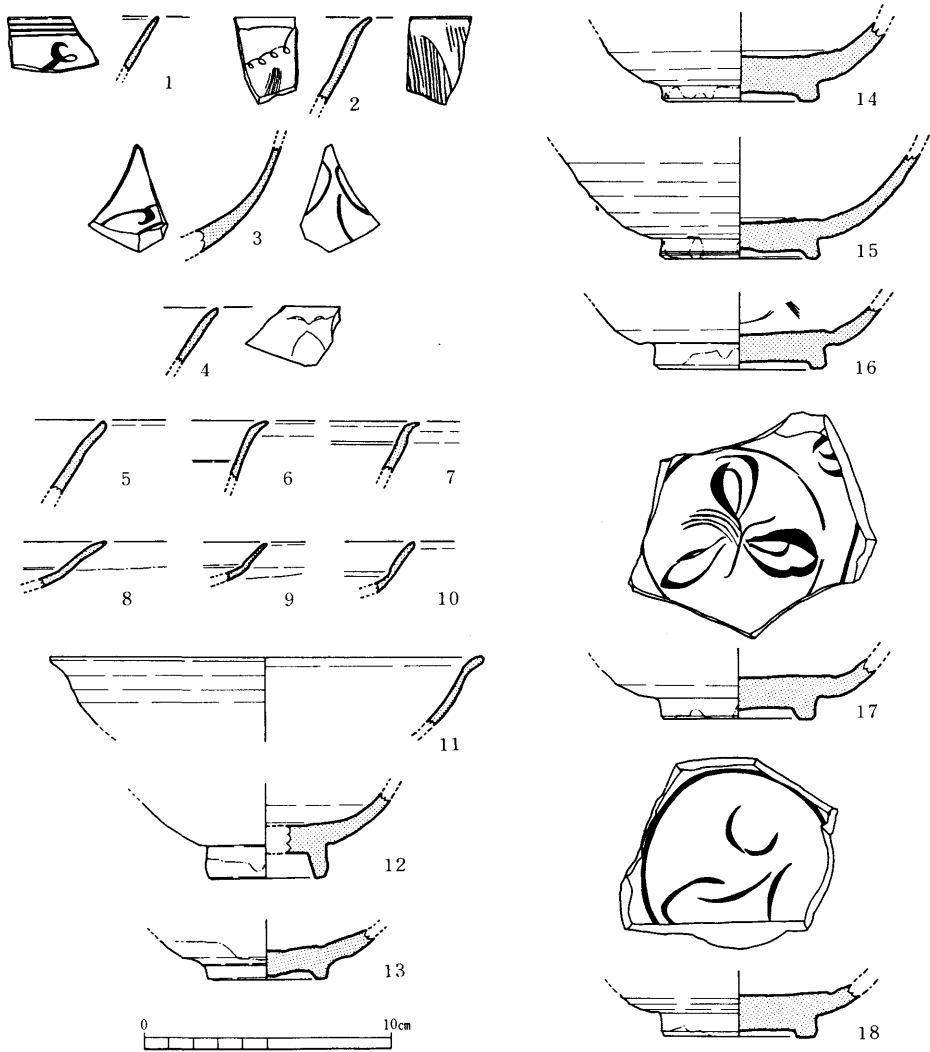


Fig.27 輸入陶磁器 その2

出しが深く比較的高い高台を持つもの(29・30)と、高台が厚く削り出しのわずかなもの(31・32)とに大別される。前者は外底と高台畳付部が露胎となるが、後者は更に体部下半までが未施釉である。33～35は尖り気味の高台を有するもので、高台付近から外底にかけては施釉しない。36～39は皿の底部である。36～38は断面四角の高台を有し、36は見込み部分の釉を輪状にカキ取る。37・38は外底と高台畳付部を除き施釉を行なう。39は高台状の削り出しを有するもので、高台と外底には施釉しない。

吉田構内大学会館新宮に伴う発掘調査

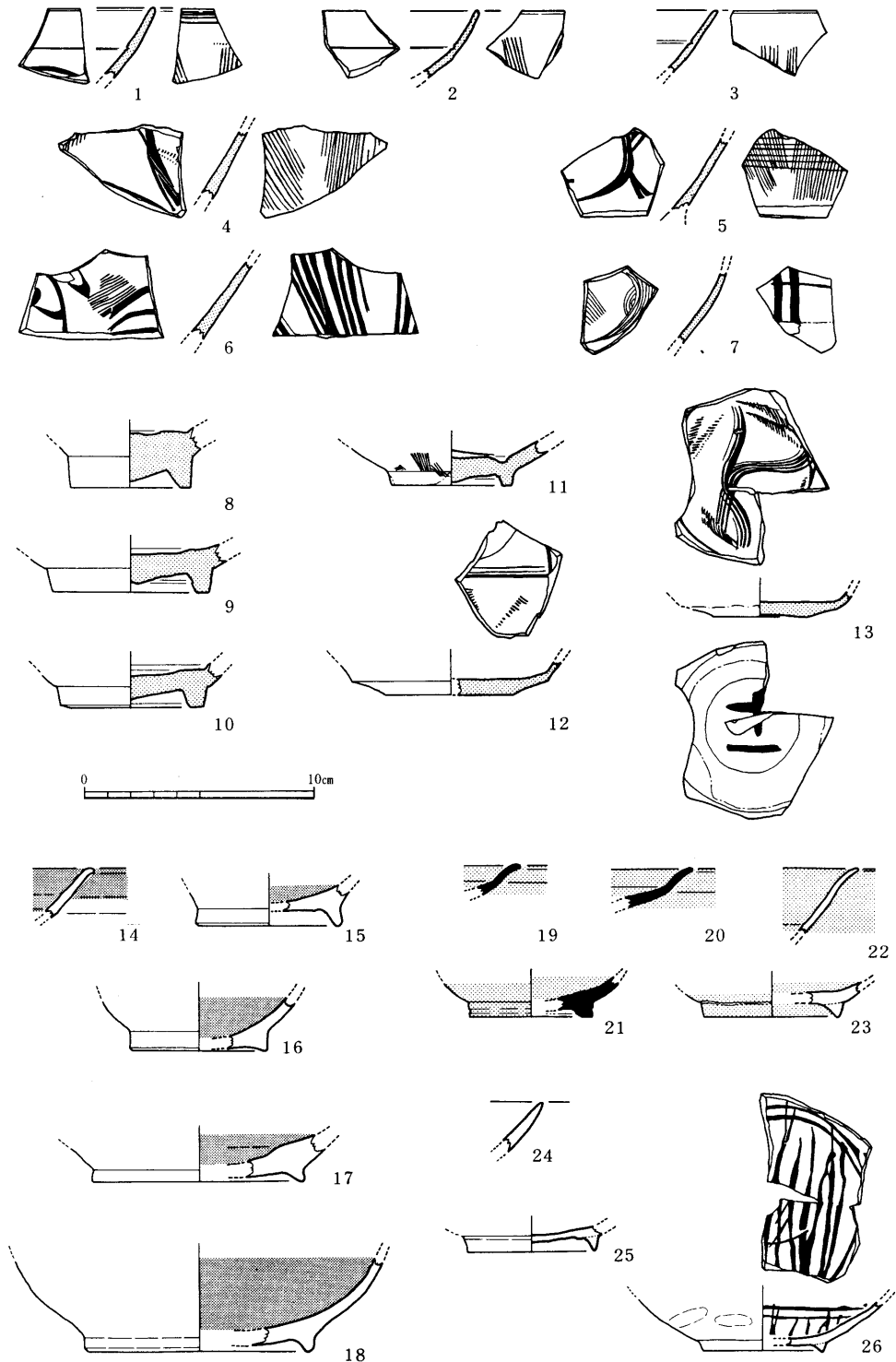


Fig.28 輸入陶磁器 その3 黒色土器・緑釉陶器・瓦器

龍泉窯系青磁 (Fig.27, 1~18 PL.22)

1は内面に3条の沈線と片彫り文様が認められるもので、横田賢次郎・森田勉氏による分類のI-4類に属する。2は外面に蓮弁の櫛目文、内面に片彫り文様と櫛目文を有する。I-6・b類。3は内外面に片彫り文様を有するもので、体部下半の破片と思われる。4は外面に無鎬蓮弁文を有するもので、口縁端部には釉の垂みが見られる。I-5・a類。5~7は碗の口縁部である。7は短く外反する口縁を持ち、内面には1条の沈線を有する。外面には何らかの文様を施しているが、小破片のため不明。8~10は皿の口縁部で、8・9は体部下半が未施釉だが、10は残存部全面に施釉する。11はやや外反する口縁を持つ碗である。12は碗の底部で高台部下半と畳付部および外底は露胎となる。13は小碗の底部と思われ高台付近および外底は未施釉である。14~18は碗の底部で、高台畳付部と外底には施釉されない。14・15は内外面とも無文のもので、I-1類に比定される。15は内底見込みに2箇所の重ね焼きの痕跡が認められる。16は内面に細かい櫛目文が施される。17・18はI-2類で、17は内底見込みに片彫りの優雅な蓮華文を有する。18は退化した葉文を持つもので、この型式の中ではやや後出するものである。

同安窯系青磁 (Fig.28, 1~13 PL.22)

1~3は碗の口縁部片で、外面に細かい櫛目、内面に1条の沈線を有する。1は外面にも3条の浅い沈線を有し、内面には片彫り文様も認められる。3点ともI-1・b類に比定できる。4~7は碗の体部片。4は外面に細かい櫛目を有し、内面には櫛目と片彫り文様とを併用する。5は外面に細かい櫛目、内面に片彫り文様を施す。なおこの破片下部には高台の剝離痕が認められる。4・5ともI-1・b類。6は外面に片彫りの平行線が施され、内面には櫛目と片彫り文様が併用される。III-1・c類。7は外面に片彫りの平行線、内面に櫛描き花文を有する。破片の外面下半は露胎となる。III-1・b類に属する。

8~11は碗の底部片である。8の底部はやや厚く、釉は残存部の内面のみに施される。9・10の底部は比較的薄い。内底見込みの釉が輪状にカキ取られており、残存部の外面は露胎となる。III-2類の可能性が有る。11は外面に細かい櫛目を施し、内面は無文で、高台畳付部と外底には施釉しない。I-1・b類。12・13は皿の底部である。12は内面に櫛目と直線状の片彫り文様を有する。外底は未施釉である。I-2類。13の内面には片彫り文様とジグザグ文様とがともに櫛状工具によって施される。体部外面下半から底部は露胎となる。なお内底の一部には重ね焼きの痕跡を有し、外底面には「十一」と判読できる墨書が認められる。I-1・b類の範疇に含まれる可能性もある。

以上、輸入陶磁器は、全て包含層中から検出されたものであり、一括性に乏しいが、上記の資料のほとんどは12世紀から13世紀前半に位置づけられるものである。

黒色土器 (Fig.28, 14~18 PL.23)

5点出土。これらは全て内面および口縁部のみに炭素を吸着させる、いわゆるA類の塊で、胎土や技法等により在地産のものと考えられる。

14は口縁部および体部上位が残る破片で、口縁はわずかに外反し丸くおさまる。口縁部は内外面とも横ナデ、体部内面は篋磨きが施され、外面は篋ナデによる稜が認められる。15~18は底部および体部下半が残る破片である。15はハの字状を呈する比較的高い高台を持ち、高台内側に浅い凹みが巡る。16は器表面の磨滅が著しいものであるが、高台はかなり低いものと思われる。内面は篋磨きを施す。17・18は15・16よりかなり大型である。17は外下方に張る低い高台を有する。内底見込みはゆるやかな凹みを呈しており、器壁は厚味がある。全体に磨滅が著しいが、内面には一部篋磨きが認められる。18は直立気味の高台からゆるやかに立ち上がる体部を持つ。体底部は内外面ともに篋磨きと思われるが磨滅のため不明瞭である。底外面は篋削りを施す。

緑釉陶器 (Fig.28, 19~23 PL.23)

胎土が須恵質のもの(19~21)と土師質(22・23)のものにと大別できる。

19・20は皿形を呈するもので、大きく外反する口縁を持ち、端部は丸くおさめる。内外全面に施釉が認められる。21は塊の底部で、厚味のある安定した削り出し高台を持ち、外底面を除き施釉する。外底面には回転篋削り、内面には回転ナデを施す。22は塊の口縁部で、端部に至って大きく外反する口縁を持つ。内面には弱い屈曲が認められる。23は底部で貼り付け高台を有するものである。釉は本来全面に施されていた可能性が高いが、風化のため現状では剥落している部分が多い。

瓦器 (Fig.28, 24~26 PL.23)

三点ともに塊形を呈する。24はやや内彎してのびる口縁部の小片で、端部は窄まりながら丸くおさまる。内側に沈線は認められない。表面は風化している。25は底部で、見込み部分と高台部が残存する。高台は細長い三角形を呈し、端部はほとんど面をなさない。風化が著しく、暗文等の調整は不明瞭である。26も底部で、口縁部から体部上半を欠損する。高台は端部が幅1mm程度の面をなすが、断面三角形に近い。内面は見込み部分に0.2~0.4cm前後の幅広い篋磨きを平行線状に粗く施し、その後体部に横方向の篋磨きを行なっている。外面には篋磨きが見られず、指頭圧痕が顕著に認められ、器表が凹凸面をなす。

遺物

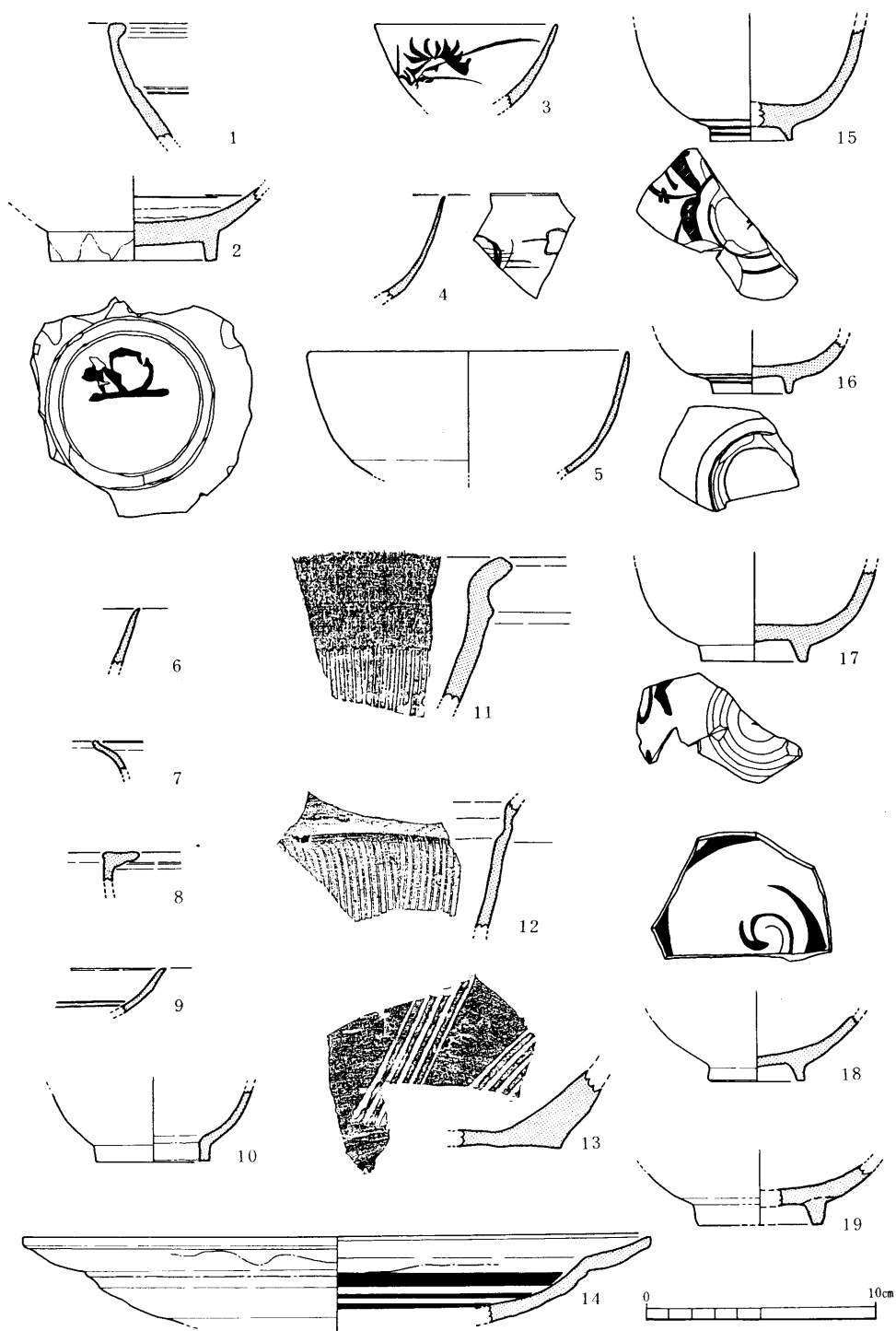


Fig.29 国産陶磁器

山口大学吉田構内大学会館新館に伴う発掘調査

Tab.10 輸入陶磁器観察表

No	器種	*口径 底径 (cm)	器高 (現存高) (cm)	色調		胎土	焼成	備考
				釉	素地			
白磁 (Fig. 26)								
1	壺	13.6	(2.1)	濁った透明	灰白色	精緻	良好	
2	壺	15.0	(2.9)	やや濁った透明	灰白色	精緻 微細砂粒含む	良好	
3	壺	20.0	(2.1)	やや濁った透明	青灰白色	精緻 微細砂粒含む	良好	
4	壺		(2.6)	やや濁った透明	灰白色	緻密	良好	玉縁はやや粗雑
5	壺		(3.2)	やや濁った透明	青灰白色	緻密	良好	
6	壺		(2.7)	濁った透明	灰白色	精緻	良好	全体につくりが粗雑
7	壺		(2.8)	透明	灰白色	精緻	良好	
8	壺		(2.6)	やや濁った透明	灰白色	精緻	良好	玉縁はやや粗雑
9	壺		(2.7)	やや黒味を帯びる濁った透明	灰白色	精緻	良好	
10	壺		(1.9)	濁乳白色, 内面貫入あり	乳白色	精緻	良好	33と同一個体か
11	壺		(2.7)	透明	灰白色	緻密	良好	玉縁は粗雑
12	壺		(3.0)	透明	灰白色	精緻 微細砂粒含む	良好	
13	壺		(2.6)	濁った透明, 外面貫入目立つ	乳白色	精緻	良好	14と同一個体か
14	壺		(2.6)	濁った透明, 内面貫入あり	乳白色	精緻	良好	13と同一個体か
15	壺		(3.4)	濁った透明, 内面貫入あり	乳白色	精緻 微細砂粒含む	良好	
16	不明		(2.3)	透明	灰白色(白色強い)	精緻	良好	皿の可能性あり
17	不明		(2.3)	透明 非常に薄く施釉	灰白色	精緻 黒色粒子他 微細砂粒含む	良好	皿の可能性あり
18	皿		(1.7)	透明	灰白色(白色強い)	精緻	良好	
19	皿		(1.6)	黄色味を帯びる濁乳白色	灰白色	精緻	良好	
20	皿	8.0	(1.9)	やや濁った透明	灰白色	精緻	良好	
21	皿	10.0	(1.3)	透明	灰白色	精緻	良好	
22	壺		(2.9)	濁った透明	灰白色	精緻 微細砂粒含む	良好	
23	壺		(2.6)	透明	灰白色	精緻	良好	
24	壺		(1.7)	黒味を帯びる濁った透明	灰白色	精緻	良好	
25	壺		(1.4)	濁った透明, 内外面貫入あり	褐色を帯びる乳白色	精緻	良好	
26	皿		(1.9)	透明	灰白色	精緻	良好	
27	壺		(2.6)	透明 非常に薄く施釉	青灰白色	緻密	良好	35と同一個体か
28	壺	19.0	(3.5)	やや黄色味を帯びる濁った透明	乳白色	精緻	良好	
29	壺	* 7.1	(2.3)	濁った透明	灰白色	精緻 黒色粒子他 微細砂粒含む	良好	底部 回転ヘラ切り
30	壺		(2.1)	やや濁った透明	褐色を帯びる乳白色	精緻	良好	軸の風化著しい
31	壺	* 7.2	(1.9)	白色を帯びる, やや濁った透明	灰白色	精緻 黒色粒子他 微細砂粒含む	良好	底部回転ヘラ切り
32	壺	* 8.4	(3.1)	透明	灰白色(白色強い)	精緻	良好	
33	壺	* 5.8	(2.8)	濁乳白色	乳白色	精緻	良好	10と同一個体か
34	壺	* 5.9	(2.5)	緑色を帯びる濁った透明	灰白色	精緻 微細砂粒含む	良好	
35	壺	* 6.2	(3.3)	透明 非常に薄く施釉	灰白色	緻密 内底に微細砂粒目立つ	良好	高台の芯線は意図的ではない
36	皿	* 4.9	(1.4)	白色の粒子混じる白色	灰白色	精緻 黒色粒子他 微細砂粒含む	良好	27と同一個体か
37	皿	* 4.8	(1.6)	やや濁った透明	灰白色	精緻	良好	

遺物

Tab.11 輸入陶磁器・黒色土器観察表

No	器種	口径 *底径 (cm)	器高 (現存高) (cm)	色調		胎土	焼成	備考
				釉	素地			
38	皿	* 5.0	(1.1)	黄褐色混じる透明	乳白色	精緻	良好	
39	皿	* 4.6	(1.1)	黄褐色混じる透明	乳白色	精緻 微細砂粒含む	良好	
龍泉窯系青磁 (Fig.27)								
1	壺		(2.2)	緑灰色(灰色強い)	青灰白色	精緻	良好	I-4類
2	壺		(3.5)	青灰色	灰白色	精緻	良好	I-6・b類
3	壺		(4.3)	青緑灰色	灰白色	精緻	良好	
4	壺		(2.3)	青灰色	灰白色	精緻	良好	I-5・a類
5	壺		(3.0)	緑灰色	灰白色	精緻	良好	
6	壺		(2.5)	緑灰色	灰白色	精緻	良好	
7	壺		(2.1)	緑灰色	灰白色	精緻	良好	外面に文様あり (小片のため詳細) 不明
8	皿		(1.9)	やや黄褐色帯びる緑灰色	灰白色	精緻	良好	
9	皿		(1.5)	緑灰色	灰白色	精緻	良好	外面に鉄分付着
10	皿		(2.1)	黄褐色帯びる緑灰色	灰白色	精緻	良好	
11	壺	1.7.2	(3.0)	青灰色	灰白色	精緻	良好	
12	壺	* 4.9	(3.5)	緑灰色	器内: 灰色 器表: 灰茶褐色	精緻 微細砂粒含む	良好	
13	壺	* 4.8	(1.9)	緑灰色	暗灰白色	精緻 微細砂粒含む	良好	内面の釉は不良
14	壺	* 6.3	(3.0)	緑灰色	灰白色	精緻 内底には長石粒目立つ	良好	釉の剥落著しい I-1類
15	壺	* 6.4	(4.2)	緑灰色	青灰白色	精緻	良好	高台の沈線は意図的 ではない I-1類
16	壺	* 6.9	(2.5)	緑灰色	灰白色	精緻 微細砂粒含む	良好	
17	壺	* 6.2	(2.4)	緑灰色	器内: 灰白色 器表: 緑灰白色	精緻	良好	I-2類
18	壺	* 6.2	(2.1)	緑灰色	灰白色	精緻	良好	I-2類
同安窯系青磁 (Fig.28)								
1	壺		(3.0)	緑灰色	灰白色	精緻	良好	I-1・b類
2	壺		(2.9)	緑灰色	灰白色	精緻 微細砂粒含む	良好	I-1・b類
3	壺		(2.7)	緑灰色	灰白色	精緻	良好	I-1・b類
4	壺		(2.9)	緑灰色	青灰白色	精緻	良好	I-1・b類
5	壺		(3.1)	緑灰色	灰白色	精緻	良好	高台剥離痕あり I-1・b類
6	壺		(3.1)	緑灰色	灰白色	精緻 砂粒含む	良好	外面の片彫りは4条 1単位 ■-1・c類
7	壺		(2.8)	緑灰色	灰白色	精緻	良好	■-1・b類
8	壺	* 5.2	(2.6)	青緑色(透明度高い)	灰白色	精緻 微細砂粒含む	良好	底部回転ヘラ切り
9	壺	* 6.8	(2.1)	黄褐色混じる青灰色 (灰色強い)	体部~高台上部: 青灰白色 高台下部: 茶灰白色	精緻	良好	底部回転ヘラ切り ■-2類か
10	壺	* 6.2	(2.0)	青灰色(灰色強い)	灰白色	精緻 微細砂粒含む	良好	底部回転ヘラ切り ■-2類か
11	壺	* 5.2	(1.9)	緑灰色(緑色強い)	器内: 暗灰白色 器表: 緑灰白色	精緻	良好	底部回転ヘラ切り I-1・b類
12	皿	* 5.5	(1.4)	灰色	灰白色	精緻	良好	I-2類
13	皿	* 4.0	(1.2)	灰色	器内: 灰白色 器表: 淡黄灰色	精緻	良好	外底に墨書 I-1・b類か
黒色土器 (Fig.28)								
14	壺		(2.1)	内面 外面口縁上部 } 黒灰色, 外面下部濁黄灰褐色		精緻 微細砂粒含む	良好	
15	壺	* 7.4	(1.7)	内面: 黒灰色 外面: やや淡い濁黄灰褐色で一部黒灰色		精良 細砂粒含む	やや 不良	灰素の浸透著しい

吉田構内大学会館新宮に伴う発掘調査

Tab.12 黒色土器・緑釉陶器・瓦器・国産陶磁器ほか観察表

No.	器種	口径 *底径 (cm)	器高 (現存高) (cm)	色調		胎土	焼成	備考
				釉	素地			
16	碗	* 7.0	(2.3)	内面黒灰色, 外面やや淡い濁黄灰褐色で高台磨滅部は黒灰色		精緻 微細砂粒含む	やや不良	灰素の浸透度やや高い
17	碗	* 10.2	(2.0)	内面黒灰色, 外面濁黄灰褐色		精緻 細砂粒含む	良好	
18	碗	* 10.9	(4.0)	内面黒灰色, 外面濁黄灰褐色		精緻 細砂粒含む	良好	
緑釉陶器 (Fig.28)								
19	皿		(1.2)	淡緑色	灰白色	精緻 微細砂粒含む	良好	須恵質
20	皿		(1.7)	淡緑色	灰白色	精緻 微細砂粒含む	良好	須恵質
21	碗	* 5.4	(1.7)	淡緑灰色	灰白色	精緻 細砂粒含む	不良	須恵質
22	碗		(2.8)	明緑色	淡黄褐色	精緻	良好	土師質
23	碗	* 5.9	(1.5)	暗緑灰色	淡褐色(黒色を帯びる)	精良 微細砂粒含む	不良	土師質
瓦器 (Fig.28)								
24	碗		(2.2)	器表淡灰色, 器肉灰白色		精緻 微細砂粒含む	良好	
25	碗	* 5.6	(1.0)	器表淡黒灰色, 器肉灰白色		精良 微細砂粒含む	不良	
26	碗	* 5.3	(2.1)	器表黒灰色, 器肉灰白色		精緻 微細砂粒含む	良好	暗文あり
国産陶磁器ほか (Fig.29)								
1	四耳壺		(5.0)	黄褐色(ほとんど剥落) 淡茶灰色		精緻	良好	中国産か
2	碗	* 7.2	(3.2)	乳灰白色	淡橙褐色	精緻	良好	外底に墨書の花押
3	碗	8.0	(3.6)	透明染付は濁緑灰色	灰白色(白色強い)	精緻	良好	染付
4	碗		(4.5)	やや濁った透明染付は緑灰色	灰白色(灰色強い)	精緻	良好	染付
5	碗	14.0	(5.4)	褐色味帯びる透明	乳白色	精緻	良好	やや軟質
6	碗		(2.5)	乳青白色	灰白色(白色強い)	精緻	良好	
7	壺		(1.4)	青味を帯びる透明	灰白色	精緻 黒色粒子含む	良好	
8	壺		(1.3)	明茶褐色 口唇部は光沢なし	灰白色	精緻	良好	
9	不明		(1.9)	黄褐色を帯びるやや濁った透明染付は青色	灰白色(白色強い)	精緻	良好	染付あり
10	不明	* 5.0	(3.1)	乳白色	乳白色	精緻	良好	やや軟質
11	挿鉢		(6.4)	—	器表, 赤味を帯びる茶褐色 器内, 灰色	精緻	良好	
12	挿鉢		(5.6)	暗赤褐色	茶褐色 器内の外面側のみ灰色	精緻	良好	
13	挿鉢		(3.4)	—	器表: 茶褐色, 器内: 灰色 器内の外面側と外底は赤褐色	精緻	良好	
14	皿	27.2	(3.8)	①茶褐色 ②黒褐色 ③光沢ある明茶褐色	赤褐色, 口縁に近づくにつれ灰色味強くなる	精緻	良好	
15	碗	* 3.6	(4.8)	やや青味を帯びる透明染付は緑灰色と淡青灰色を使い分ける	青灰白色(白色強い)	精緻 外底に砂粒目立つ	良好	染付
16	碗	* 3.5	(2.4)	濁った透明で部分的に赤味を帯びる染付は緑灰色	青灰白色(白色強い)	精緻	良好	染付
17	碗	* 4.6	(4.0)	乳青白色 染付は淡緑灰色	灰白色	精緻	良好	染付
18	碗	* 4.2	(2.8)	①乳白色 ②透明	茶褐色 器内の外面側は赤褐色	精緻	良好	
19	碗	* 5.4	(2.6)	淡黄褐色(軟質)	内面灰色, 外面赤褐色	精緻	良好	

高台部は横ナデを施す。なお内底面に重ね焼きと思われる痕跡を留める。色調は内面黒色で、暗文は光沢のある銀黒色を呈するが、外面は炭素の吸着が不十分で、一部は灰白色となる。これら3点の瓦器は、その器形や調整等の特徴から、県内でも類例の少ない畿内産の瓦器²⁾で、いわゆる和泉型に属するものと思われる。小片のため全体の形状や器高指数等は不明であるが、高台等の特徴により、尾上氏編年³⁾のⅢ期に相当し、13世紀前半を下らない年代が想定できる。なお和泉型瓦器碗は、これまで瀬戸内地域で広くその分布が確認されているものである⁴⁾。

国産陶磁器ほか (Fig.29, 1~19 PL.23)

1は中国産の四耳壺と推定される口縁部片である。頸部は短く窄まり、内傾する口縁を持つ。端部は肥厚し、外方に突出する。頸部と胴部の境には、断面台形の小さな隆帯を巡らす。なおこの種の器形のもは、県内では周防国府跡等でも発見されているが、経筒の外容器に転用されることも多く、山口市坂本経塚、山陽町長光寺山経塚等に例をとることができる。本例は12世紀後半から末に比定できる資料である⁵⁾。

2は碗の底部で、ほぼ直立するしっかりした高台を持つ。内底見込みの釉を輪状にカキ取り、それよりやや上方に1条のロクロびき沈線を有する。高台から外底にかけては施釉しない。なお外底には墨書の花押が認められる。5・6は碗の口縁部である。5は体部が内彎しながら立ち上がり、中位からは直線的に外上方にのびる。6は端部をわずかに外反させる。7は小型の壺の口縁部で、短く上方に屈曲する。8も壺の口縁部と思われ、直立した口縁端部の外側を大きく外方に拡張させる。9はやや内彎する口縁部で、体部内面には2条の染付の細線を有する。10は畳付部を露胎とする。9・10は小片で器種不明である。

11~13は播鉢である。11は口縁部で、内外面ともナデ調整が施される。内面下半には櫛状工具による放射状の筋目を有する。12は体部片で上位に屈曲が認められ、内面には太い凹線状の窪みを有する。内面の屈曲部以下には比較的細かい放射状の筋目を持つ。13は底部片で、体部の器肉がやや厚めであるにもかかわらず、底部は薄い。内面には5条を一単位とする筋目が認められる。14は大形の皿で、底部を欠損する。体部上位で外方に屈曲し、やや内彎する口縁部へと続く。屈曲部以下には、まず内外面ともに釉を施し、内面に限ってその上に重ねて施釉したものを縞状に残しながら削り取る。更にその後、口縁部の内外面に再び施釉する。3・4・15~17は近世の染付の碗である。3は小碗の口縁部で、体部には優美な菊花文が描かれる。4も口縁部で、外面には花文の一部が認められる。15・16は底部で、畳付部以外は全て施釉する。15は高台およびその付近に3条の圏線を巡らせ、

体部には花文を描く。16は15とほぼ同位置の3条の圏線に加えて、外底にも1条の圏線を巡らす。釉は不良で厚い。17も底部で、花文を有し、畳付部から外底にかけては施釉されない。18・19も近世の埴の底部である。18は内外面とも釉を渦巻状に施した後、再び施釉する。19は外底および高台部を除き施釉するが、内底では剥落が目立つ。

(杉原和恵*・吉田 寛*)

[注]

- 1) 横田賢次郎・森田勉「大宰府出土の輸入中国陶磁器について—型式分類と編年を中心として—」(『九州歴史資料館研究論集』4、1978年)。
- 2) 周防で他に畿内産の瓦器を出土する遺跡には、防府市周防国府跡がある。
吉瀬勝康「周防国府跡出土の瓦器」(『古文化論叢』第14集、1984年)。
- 3) 尾上実「南河内の瓦器碗」(『古文化論叢』藤沢一夫先生古稀記念、1983年)。
- 4) 川越俊一「中・四国地方の瓦器—特に広島県下出土例を中心として—」(『芸備』第11集、1981年)。
- 5) 田平徳栄「輸入陶磁器の性格と年代」『霊仙寺跡』(『東脊振村文化財調査報告書』第4集、1980年)。

(3) 石製品

石製品の大半は各包含層から出土しており、遺構内出土のものは1点(1)のみである。なお、説明上、平面図が両面記載の場合は便宜的に左図をA面、右図をB面とし、片面の場合は記載図をA面、裏面をB面とする。法量はTab.13の法量表に記述し本文中では省略した。また石質の専門的鑑定は将来に譲るもので、現時点明らかなもののみ記した。

石鏃(Fig.30, 1~3 PL.24) 1は完形品で、平面正三角形を呈し、基部形態は凹基無茎式である。先端は鋭く尖り、基部は体長の $\frac{1}{3}$ 以上まで大きく抉りが入る。全体的に丁寧な整形で、縁辺は交互剥離によって細かく調整が施されており、断面はレンズ形である。石質はチャート。2は先端部を欠失しているが二等辺三角形を呈する凹基無茎式の鏃で、基部は大きく抉りが入る。縁辺は粗雑な交互剥離による調整がなされ、A面には中央から先端、および両逆刺端へむかって稜を有す。B面中央部は大剥離面のままで平面をなす。断面には厚みがある。石質は安山岩系。3は石鏃の未製品と思われるもので、原材料の表皮部を削いで扁平な剥片をとり、A面は周縁に粗雑な剥離による整形を施しているが、中央部から先端、および一部周縁には自然面が残存し、B面は大剥離面のままである。基部は弧状をなす。なお、石錐の可能性もある。石質は安山岩系。

石器剥片(Fig.30, 4・5 PL.24) 4は水晶製の剥片で、図の右半部両面周辺には細かい調整剥離がみられ、一部刃が潰れている。5は姫島産黒曜石で、両面とも調整剥離面は認められない。

石斧(Fig.30, 6~8 PL.24) 3点あり、いずれも太型蛤刃石斧である、6は刃部で、基部中央で裏面にかけて大きく剥離欠損。刃部の形状は円刃であり、刃先にはわずか

遺物

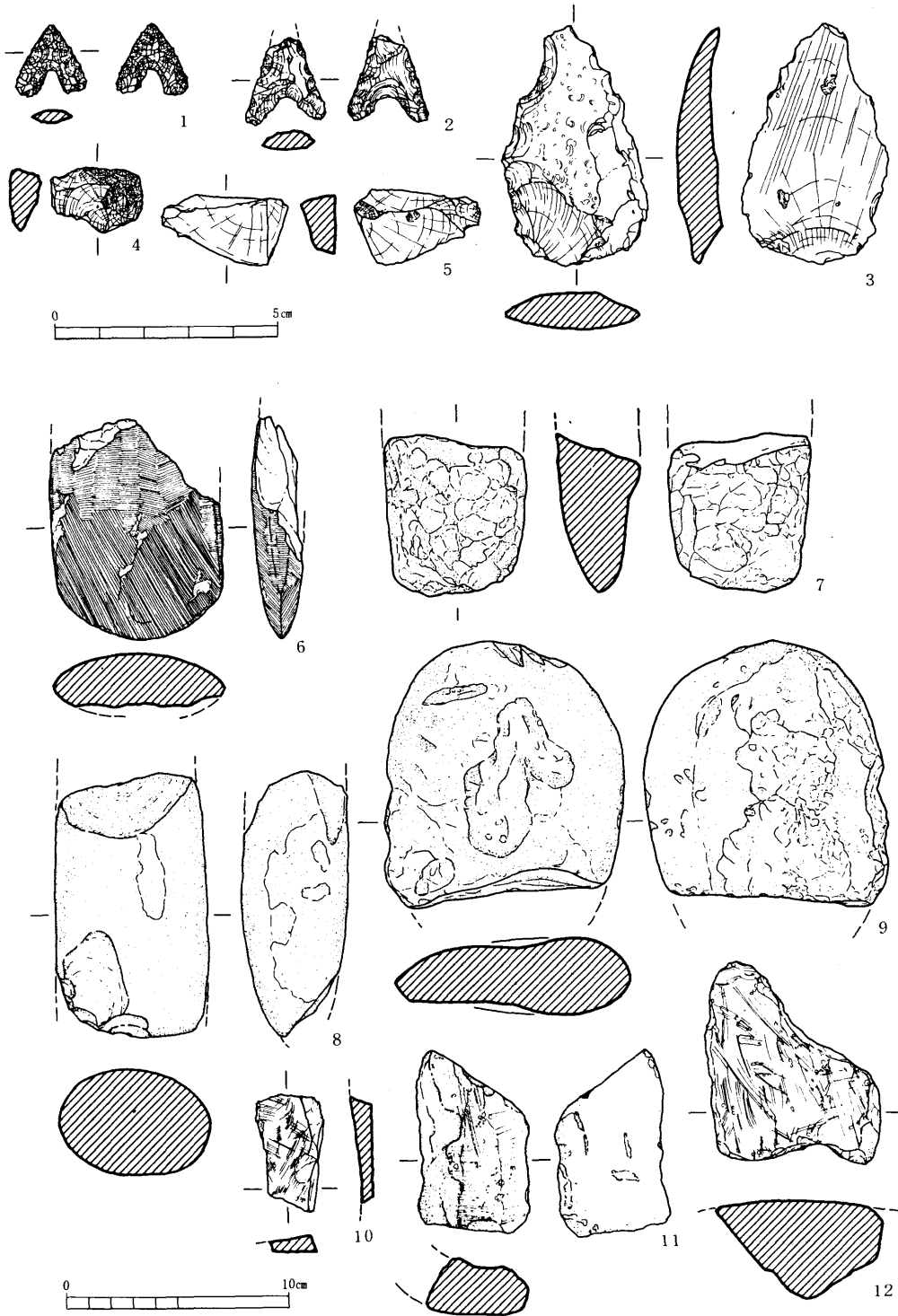


Fig.30 石製品 その1

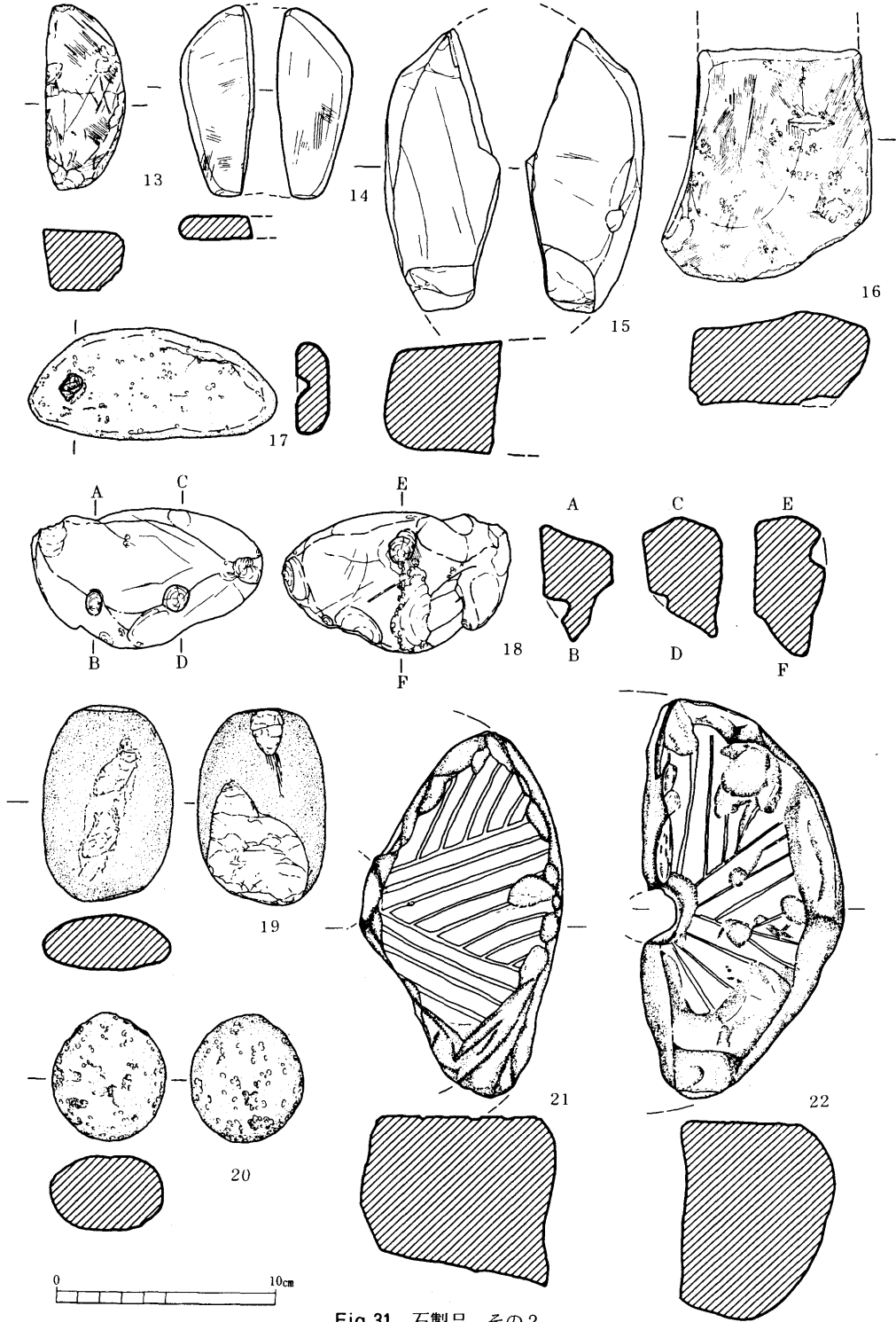


Fig.31 石製品 その2

に使用痕が認められる。表面は全体に丁寧に研磨されており、刃部では右下りの斜め方向に研磨痕がみられる。断面はレンズ形をなす。7は基部中央で横割れ破損。器表は一部研磨面を残すが、ほとんど二次的な打撃によって剥落している。断面は概して楕円形である。8は基端および刃先欠損。断面は厚味のある楕円形を呈する。器表には一部研磨調整痕が認められるが、風化が著しく器表の約 $\frac{1}{2}$ は剥離している。

凹石 (Fig.30, 9 PL.24) 1点のみ出土。平面楕円形を呈すると思われるが、一端部が約 $\frac{1}{4}$ 程度欠損する。器表は風化が著しいが、両面とも中央部には敲打による凹みがあり、B面ではかなり広く認められる。

砥石 (Fig.30・31, 10~16 PL.24, 25) 7点出土しており、13以外は破損および一部欠損する。10は小破片で、A面と右側面に研砥面が残る。11は風化が著しいが、曲面を呈する研砥面がある。また器表の一部に、鑿状工具の削りによる痕跡を留める。12はA面のみ研砥面が残存しており、表面には細かい擦痕が認められる。13は全面を研砥面として使用。A・B両面、左側面は、わずかながら中凹みを呈する。14は片側面が欠損する。使用痕として細い擦痕が残る。15はA・B両面が研砥で平坦面をなす。16はA・B両面および左側面を研砥面として使用し、曲面を呈する。風化を受けているが、表面には使用痕を認める。

用途不明石製品 (Fig.31, 17・18 PL.25) 17は平面長楕円形を呈する扁平な自然石の長軸方向片面端部寄りの1カ所に、深さ0.5cmを測る敲打および回転穿孔による明らかに人為的な凹穴を有するものである。18もA面2カ所、B面1カ所に径1cm前後、深さ平均0.7cmを測る凹穴をもつ。B面の一部には敲打痕が認められる。全体が磨滅している。

磨石 (Fig.31, 19・20 PL.25) 19は平面楕円形の扁平な転礫を利用したもので、B面は二次的な剥離面をもつが、全体によく研磨が施されている。上下両端は敲打によって平坦面をなす。またA面中央部および側辺の一部にも敲打痕が認められる。20は小型のもので、全面に使用痕がみられるが器表には敲打痕が顕著に残る。

石臼 (Fig.31, 21・22 PL.25) 2点出土。21は下臼(雄臼)、22は上臼(雌臼)である。21は臼面を約 $\frac{1}{3}$ 残し、受皿以下は欠損。臼面は直径20cm内外で受皿内底面から約3.5cmの高さを測り、ふくらみは無く平坦で、8分画8溝が施される。芯棒孔は復原径2cm内外。22は上面が欠損しており、平面図は下面を記載する。復原径19cm内外を測るもので、約 $\frac{1}{2}$ 程欠損する。風化がかなり著しく、大部分は元の器表面を留めない。臼面は平坦面をなし、目は8分画で、溝数は現状では断定し難いが、6~7本と推定する。側面中位には中心線を挟んで対峙する2カ所に挽き穴と察する深さ2.5~3cmの方形孔が施される。

Tab.13 石製品観察表

() は現存値

番号	器種	長さ (cm)	最大幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	石質	出土地
1	石 鎌	1.6	1.6	0.3	0.6	チャート	柱穴
2	石 鎌	(2.0)	1.8	0.4	(1.1)	安山岩系	第9層 橙褐色粘質土
3	石 鎌 未製品	5.3	3.3	0.8	15.5	安山岩系	第29層 灰褐色粘質土
4	剥片	2.0	1.4	0.7	2.4	水晶	排土中
5	剥片	2.8	1.5	0.8	3.5	黒曜石	第5層 黄灰褐色土
6	石 斧	(9.8)	7.5	(2.4)	(220.0)		第30層 茶褐色粘土
7	石 斧	(7.2)	6.3	3.8	(225.0)		第30層 茶褐色粘土
8	石 斧	(11.9)	6.8	4.7	(594.5)		第33層 黒色粘土
9	凹石	12.0	10.9	3.4	(608.0)		第33層 黒色粘土
10	砥石	(3.0)	(5.3)	0.7	19.0		第22層 黒茶色粘土
11	砥石	(8.2)	(5.2)	2.6	97.3		第29層 灰褐色粘質土
12	砥石	(9.1)	(7.9)	4.6	226.5		第22層 黒茶色粘土
13	砥石	8.4	3.7	2.7	136.1		第22層 黒茶色粘土
14	砥石	8.7	(3.4)	1.1	51.0		排土中
15	砥石	(12.9)	(5.3)	5.1	511.1		第30層 茶褐色粘土
16	砥石	(10.5)	9.5	4.0	579.5		第36層 灰黒色粘質土
17	用途不明石器	11.4	5.1	1.5	161.3		第33層 黒色粘度
18	用途不明石器	10.4	6.4	3.6	286.5		第33層 黒色粘度
19	磨石	8.8	5.8	2.4	231.0		第27層 灰黒色土
20	磨石	5.8	5.1	3.4	139.9		第22層 黒茶色粘土
21	石 臼	(16.5)	(9.1)	8.4	1462.0		S E 1
22	石 臼	(18.0)	(9.1)	9.0	1879.5		S E 1
23	石 鈎	2.5	4.1	0.6	11.5		第33層 黒色粘土

芯棒孔は径3.5cm内外。なお、21と22は石質が異なる。

石鈎帯 (Fig.32 PL.25) 石鈎帯は丸靱1点である。平面形は楕円形を長軸方向に平行して約 $\frac{1}{2}$ 程度切りとった形を呈し、下辺は直線をなす。中央やや下寄りに1.8×0.3cmの長方形の透し穴があり、透し穴の中央部上方と左右やや下方の三方に裏面まで貫通する径0.1cmの小穴が穿たれている。表面・側面は丁寧な研磨面であるが、裏面は潜り孔部分を中心にかなり剝離している。周縁は面取りが施される。なお、この種の丸靱は、革帯に金属の鋌¹⁾でって装着するもので、亀田氏の分類に従えばCタイプ、平城宮調査報告書²⁾では石鈎帯aに属し、同類のものは平城京東三坊大路、京都府西野山古墓などから出土しており、山口県内では見島ジーコンボ古墳群のものに、裏金具を伴ったものがある。

遺 物

石製品の時期について これら石製品は共伴する土器が明確ではないため、詳細な時期を比定することはできないが、他遺跡出土の同種遺物からの類推によって、次のように考えられる。1～5の石鏃・石器剥片は、弥生時代までにおさまる。その

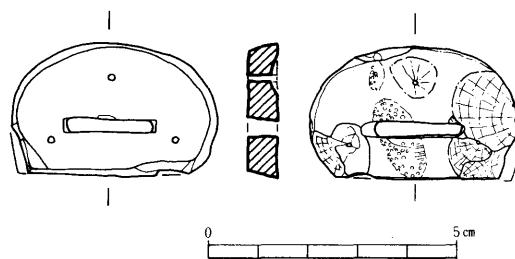


Fig.32 石鏃帯

中でも1・2は形状的に縄文時代にまで遡り得るもので、特に1は縄文時代の範疇でも古い段階に属するものと察する。6～8の石斧は、いずれも弥生時代のものと考えられる。9の凹石は、県内の類例から見て弥生時代のものである可能性が高い。10～16の砥石は時間の経過に伴う顕著な形態・石質の変化はみられず、また、使用・研ぎ直しによる形状の変化などの理由により、特に破片にあっては、それ自体から時代を判断することは、極めて困難である。17・18の用途不明石製品、19・20の磨石については、いずれも時期が不明である。21・22の石臼は、より遡っても中世と思われる³⁾。23の石鏃帯は阿部義平氏による⁴⁾とこのタイプは796年から807年に行なわれた可能性が強いとの見解がある。

(西本泰子*・小田信子*)

〔注〕

- 1) 亀田博「鏃帯と石帯—出土鏃・石鏃の研究ノート」(『考古学論叢』関西大学考古学研究室、1983年)。
- 2) 奈良国立文化財研究所「平城宮発掘調査報告VI」(1975年)。
- 3) 三輪茂雄『臼』(1978年)。
- 4) 注2)に同じ。

(4) 木製品

1～7 (Fig. 33 PL. 26) は落ち込み部包含層下層出土。8 (Fig. 34 PL. 27) はSE1内出土である。

1は木簡である。一端部は方頭で左右から端部側縁を切り欠くが、反対の端部は欠損して形態不明である。墨痕は認められない。現存長10.0cm、幅3.8cm、厚さ0.5cm。2は柄杓の柄である。全体を滑らかに丸木状に削り、先端部を両側から削って尖らせている。長さ32.7cm、直径2.0cm。3・4は下駄であり、両者とも連歯のものである。3は平面は長楕円形を呈し、歯を削り出した際の鋸の痕が残っている。前緒孔は円形で、横緒孔は欠損しているが、楕円形で垂直に穿孔されている。位置は台の中央よりやや後部にある。なお、台表面には前緒孔に接して、足指による磨滅によって生じた浅い凹みがわずかに認められる。長さ18.9cm、幅9.8cm、台の厚さ1.8cm。4は平面は不整長楕円形を呈する。現状は中

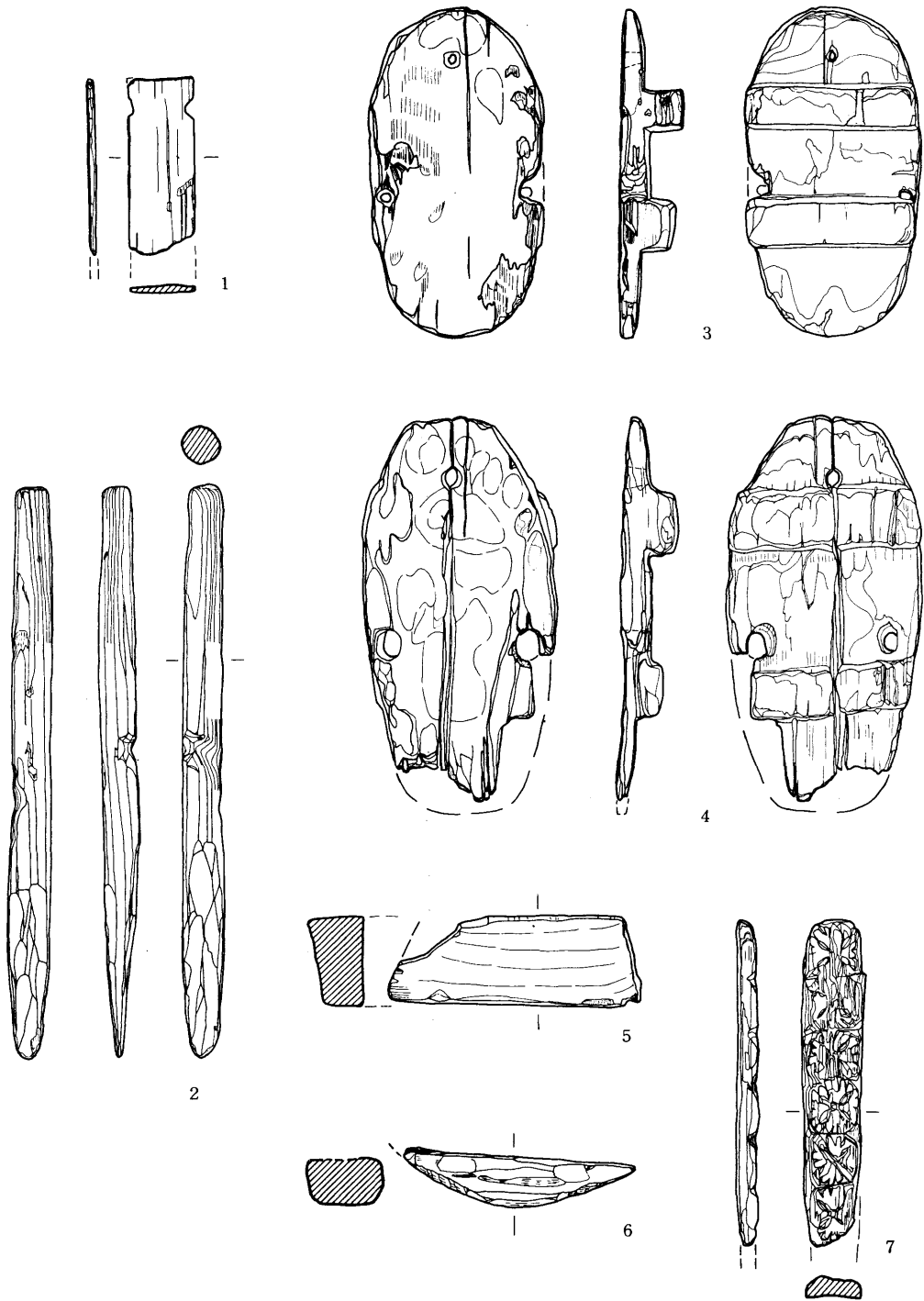


Fig.33 木製品 その1

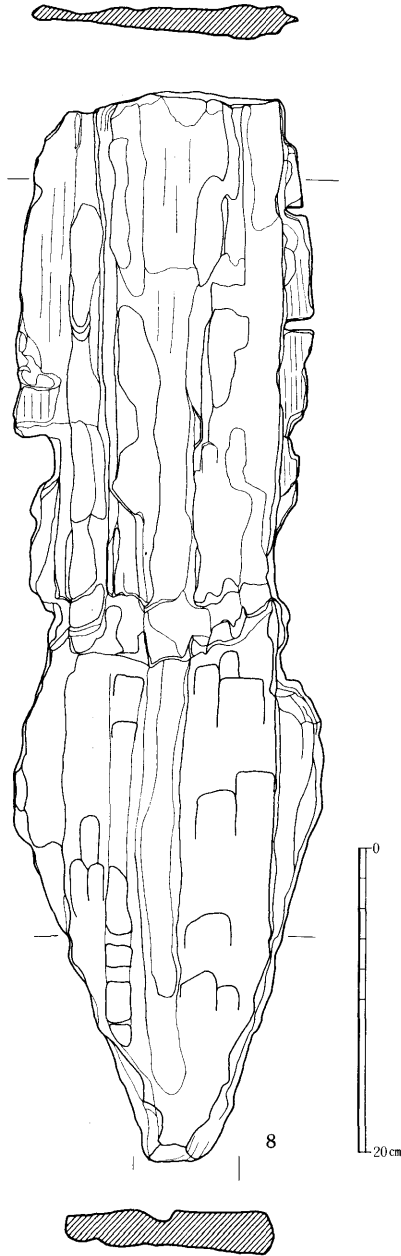


Fig.34 木製品 その2

央で2つに割れ、下方部は折損しており、
 歯の磨滅が激しく、残りは悪い。前緒孔は
 円形で垂直に、横緒孔は楕円形で内側に傾
 けてそれぞれ穿孔されている。台表面には
 指や足裏による磨滅によって生じた浅い凹
 みが残っており、それによると右足用と考
 えられる。現存長22.2cm、幅11.1cm、台の
 厚さ1.9cm。5は下駄の歯と思われるもの
 で、下方に広がる形状を呈し、比較的高い。
 現存長14.6cm、幅5.1cm、最大の厚さ3.2
 cm。6・7は用途不明品である。6は弧状
 を呈する面をもち、反対側は大部分欠損し
 ているが、おそらく直線的になるものと思
 われる。表面には焦痕が認められる。現存
 長13.2cm、幅2.9cm、厚さ4.4mm。7はわ
 ずかに先端部が欠損するが、完形にちかい
 ものである。平面形は一方にやや窄みぎみ
 の隅丸長方形を呈し、断面は蒲鋒形である。
 やや彎曲する方の面に刻みによって6区画
 をつくり、その中に「*」形の模様を施し
 ている。現存長18.7cm、幅3.7cm、厚さ
 1.2mm。8は矢板で、井戸枠として使用さ
 れたものである。長方形の板の先端を矢状
 に尖らせている。表面の腐蝕が激しい。長
 さ70.8cm、幅20.6cm、最大厚2.4cm。

(菅波正人*)

(5) 金属器・瓦・植物遺体

金属製品には古銭・鉄釘・スラグなどがある。古銭 (Fig.35, 1~3 PL.27) は3枚出土しており、いずれも渡来銭であ

る。1・2は唐の武徳4年(621年)初鑄の「開元通宝」で、1は錆化が少なく、文字は鮮明。灰褐色粘質土層出土。2は腐蝕・錆化が進んでいる。包含層出土。3は北宋の元豊元年(1078年)初鑄の「元豊通宝」で、錆化は少ないが多少磨耗している。灰色グライ土層出土。鉄釘(Fig.35, 4 PL.27)は1点出土し、茎部断面方形を呈する角釘の上半部である。上端を短かく折り曲げ頭部としている。錆化は著しい。現存長3.8cm、茎部厚0.6cm。スラグ(PL.27)は3点で、径3~4cm、厚さ1.5~2cm程度の小さいものである。黒色粘土層他包含層出土。その他金属品として、黒色粘土層から鉄製品の一部とみられる長さ5.3cm、厚さ4cmの板状鉄片(PL.27)が出土しているが、錆化が著しいため詳細不明。

瓦(Fig.35, 5 PL.27)は、瓦当面に唐草文を配した軒平瓦の破片一点がある。色調は淡青灰色、焼成は堅緻。表面には透明釉が薄くかかる。時期は近世以降。

植物遺体としては、マツカサ(PL.27)が数点あり、いずれも各包含層より出土。その他に近世の井戸内Pitより桜の皮(PL.27)も出土している。

(森 田)

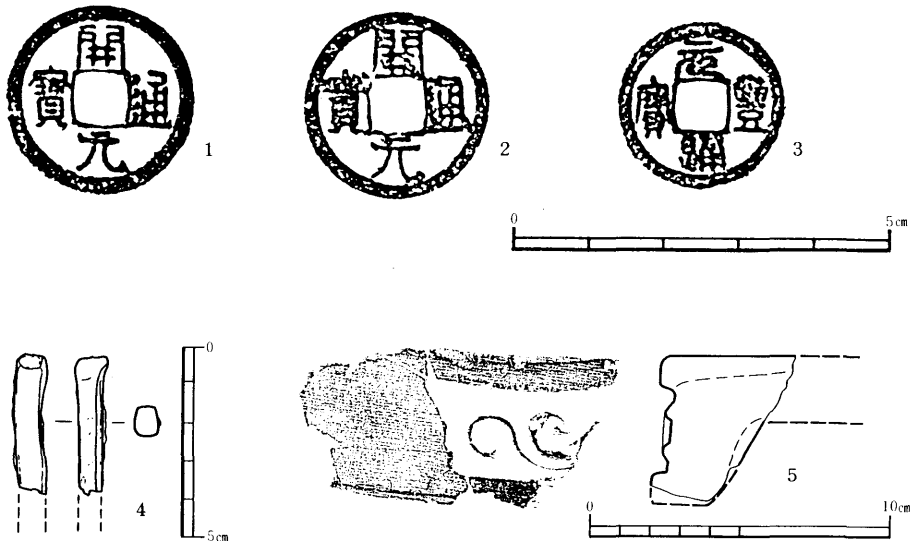


Fig.35 金属器・瓦

6 小 結

1. 遺構について

今回検出されたのは調査区東部および南西隅で確認された低丘陵上で掘立柱建物跡1棟、土壇3基、柱穴多数および両丘陵縁辺部を侵食しつつ北ないしは北西に開ける谷の谷頭付近を中心として営まれた井戸5基である。

掘立柱建物跡は近世に下るもので身舎1間×1間である。土壇のうちSK1は平面形態隅丸方形で床面から炭化物とともに1個体分の高坏が出土したが、谷頭付近包含層出土の数点の高坏と時期的に大差なく、周辺における遺構の分布状況等から推して谷あいにおける祭祀と係わりをもつものと推察される。井戸は木組みのもの(SE1)、素掘りのもの(SE5・6)がある。また基底面に曲物を設置した例(SE2・3)があるが上部が削手されているため井側の構造は判然としない。このうちSE1は東、北両側辺部分は欠失しているが他の二側辺に沿って横位に据えられた井側にあたる矢板等の転用部材が内側に倒れ込んでおり、横板組みの施設が想定される。両部材とも四隅に柄穴、切り込み等の加工痕は認められない。また、西隅矢板の両側には杭の可能性をもつ部材が検出され、岡山県下市瀬遺跡井戸Ⅱ¹⁾(畿内第Ⅴ様式)に類似する。基底面からは布留式併行の甕が出土しており、全国的にも類例の少ない井戸の資料である。

学内における同時期の住居は本調査区南東約90mのN-14区(第二学生食堂敷地内)で竪穴式住居6基が検出されており、谷頭周辺の湧水点付近へ営まれた井戸を単位とした住居・集落の一定のまとまりが考えられるのに対して、本調査区南西約50mに位置するL・K-14区(本部管理棟敷地内)²⁾で検出された室町時代の石組み井戸1基は環濠内の建物に個別に付随し、建物に規制された分布状況を示している。奈良・平安時代では建物と井戸との相関関係に今後の検討を要するが、防府市下右田遺跡³⁾にみられるように少くとも鎌倉時代以降、井戸が一単位の住居に付随し機能するようになるものと思われる。

今回検出されたSE1は古墳時代以降の人々の動態、社会の成長を如実に反映する井戸を媒介とした住居、集落の復原に極めて貴重な資料を提供した。また、遺物包含層からは8Cから16Cの遺物が多量に出土しており、学内において住居、集落の復原が時間的連続性をもって行いうる可能性を秘めており、周辺地域における今後の調査が期待される。

(注) :

(河 村)

1) 岡山県教育委員会『中国縦貫自動車道建設に伴う発掘調査1』(1973年)。

2) 山口大学埋蔵文化財資料館『山口大学構内遺跡調査研究年報-昭和56年度-』(山口大学、1982年)。

3) 山口県教育委員会『下右田遺跡 第1・2次調査概報』(1978年)。

山口県教育委員会『下右田遺跡 第3次調査概報』(1979年)。

2. 遺物について

出土遺物は縄文時代から近世まで各時代のもがある。その大半は遺物包含層出土のもので遺構に伴うものは少ない。量的には奈良時代から室町時代にかけての土器類が多い。

縄文時代の遺物としては石鏃（Fig.30, 1）があり、形態的に早・前期の可能性をもつ。これまで吉田遺跡の既出遺物中では晩期のものが最も古いとされてきたが、本例の出土により吉田遺跡の歴史がさらに遡ることとなった。

弥生・古墳時代の遺物は、本調査地点より南方背後にあたる丘陵部に同時代の集落跡が確認されていることから、その地域からの流れ込みが大半と推定されるが、出土量は他の地点に比べて少ない。なお、古墳時代の遺物の中で、高坏（Fig.19）は谷頭の湧水点近くから完形を含め集積した状況で出土しており、この地での祭祀行為に伴ったものと察する。

奈良時代から鎌倉時代にかけての遺物には、遺跡の性格を解明する上で注目されるものが多い。その中には石銚帯、木簡、畿内系瓦器など山口盆地初例のものがある他、緑釉陶器や陶硯など周防国内においては稀少な遺物も出土し、また白磁や青磁、銅銭など中国から輸入されたものも含まれている。なお、この時代における遺跡の性格を遺物から若干考えてみると、まず奈良時代から平安時代初めにかけては石銚帯から律令官人、陶硯から識字層者との関係が看取され、この地に官人を含めた上層階級者の存在が察せらる。また、包含層出土のため時期を断定できないが、木簡（付札）の出土により当地が物資集散地にあてられ、前述の遺物を含め勘案すると、当時吉田遺跡が律令機構の地方行政組織の範疇に組み込まれていたと推定され、当調査地周辺にそれに係わる施設の存在が予想される。さらに、中世初めにおいては、これまで周防国府跡でしか出土していない畿内から搬入された瓦器や、周防国内の在地集落跡と比べて量的に卓越している輸入陶磁器類などから、富裕層の存在が伺われる。具体的には文献史料においてもこの地における古代・中世時の集落・施設等は全く明らかではなく、今後の研究を待たなければならないが、その解明にあたっては、律令下時代では郡家（吉敷郡衙）、郷家（浮囚郷など）、初期庄園（榎野庄）、中世に至っては保（恒富保）、在地豪族の館（吉田氏）などの関係を考えなければならないと察する。この問題は吉田遺跡自体のみならず、山口盆地内における古代・中世史研究にとっても大きな課題であり、今後の調査に期待される。

（森 田）



調査区全景(北から)



(1) 調査区南西隅遺構分布状況(北から)



(2) 調査区南東隅遺構分布状況(北東から)



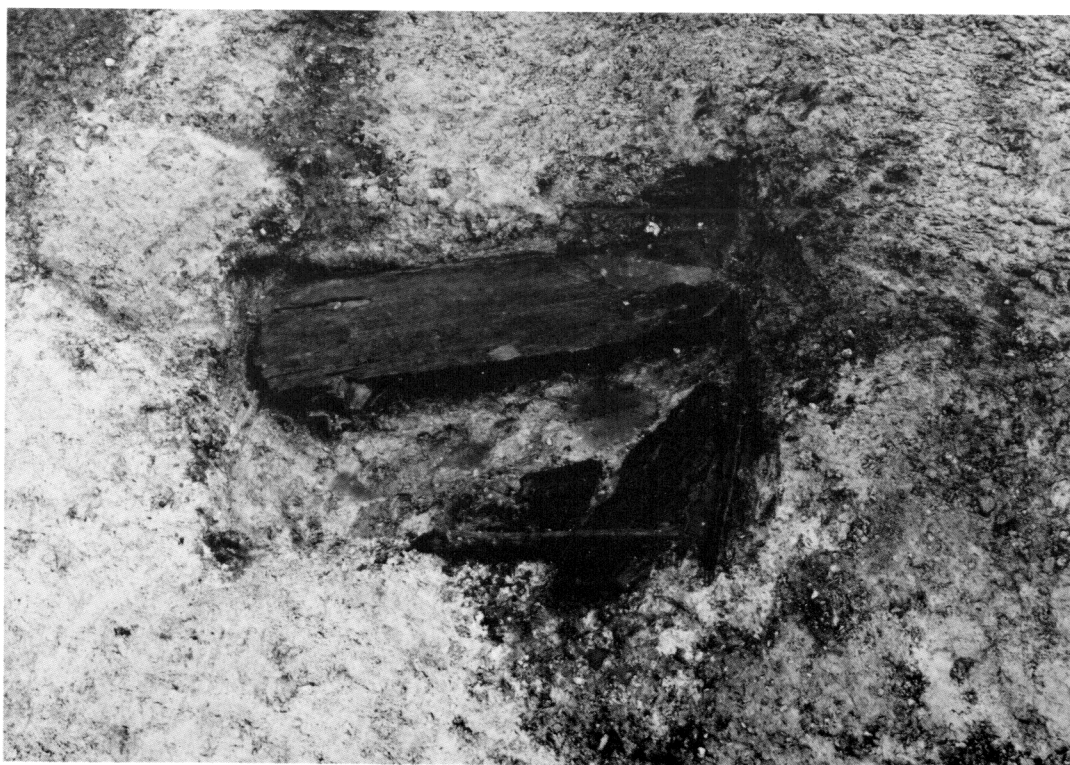
(1) 調査区北東隅遺構分布状況（西から）



(2) 調査区中央部谷地形（西から）



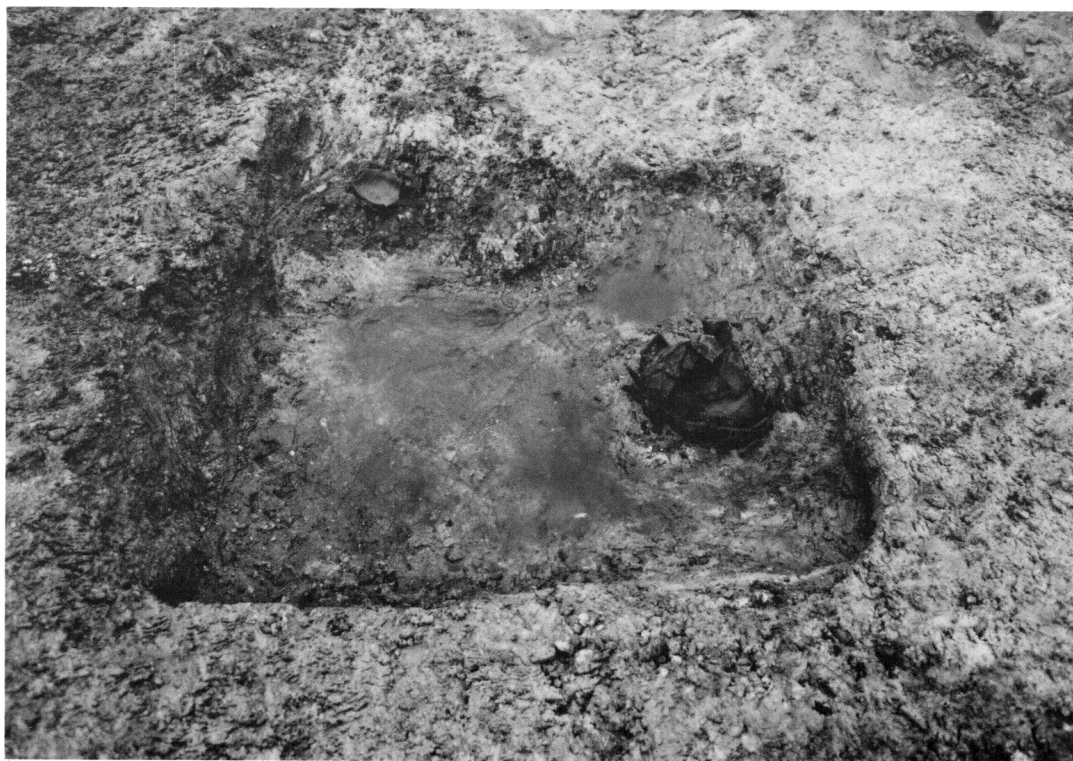
(1) 掘立柱建物跡 SB1 (南西から)



(2) 井戸SE1 (北西から)



(1) 井戸SE1 北西隅井側検出状況（南東から）



(2) 井戸SE1 遺物出土状況（南東から）



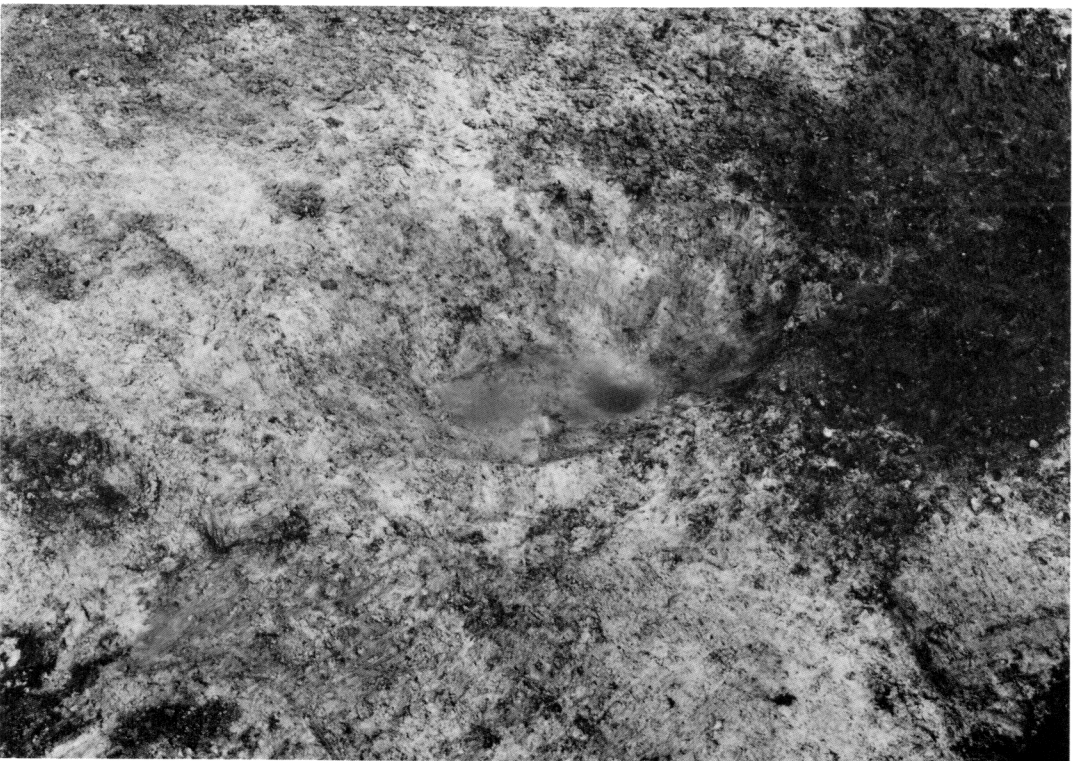
(1) 井戸SE2 (南西から)



(2) 井戸SE3 (南から)



(1) 井戸SE4 (北東から)



(2) 井戸SE5 (南東から)



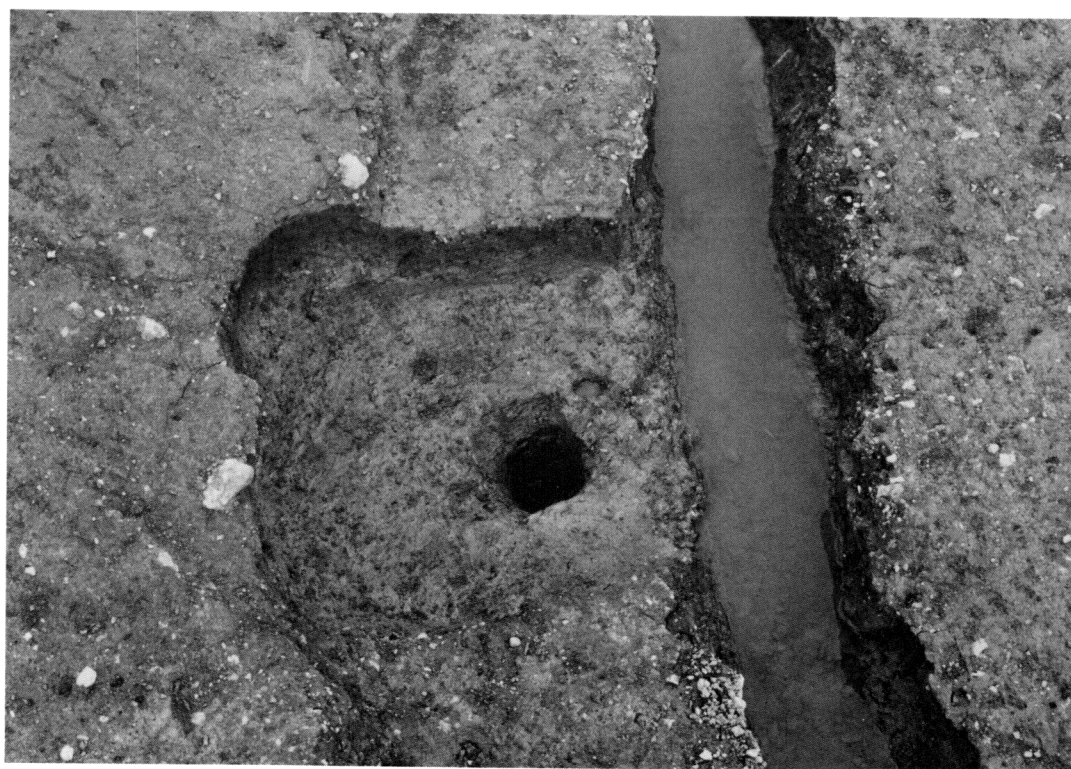
(1) 井戸SE6 (北東から)



(2) 土壙SK1 (北西から)



(1) 土壙SK 2 (北から)



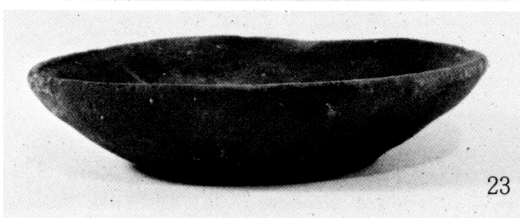
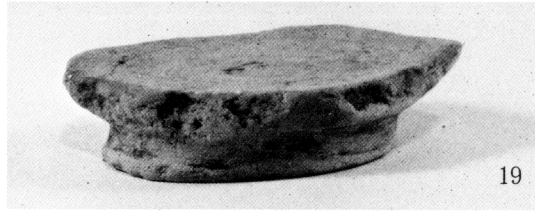
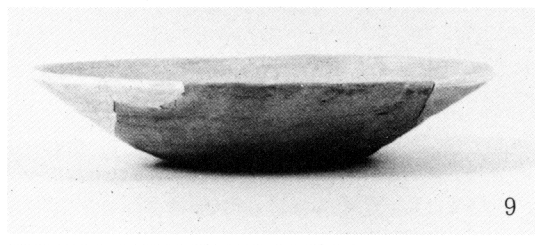
(2) 土壙SK 3 (南西から)



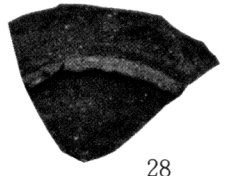
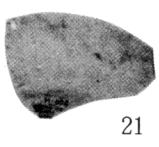
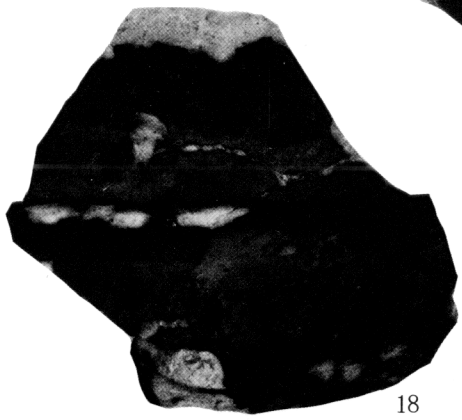
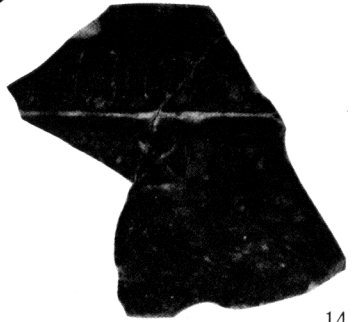
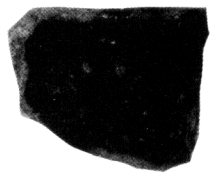
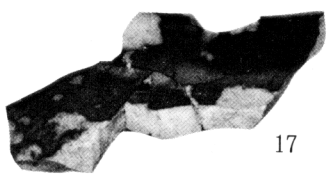
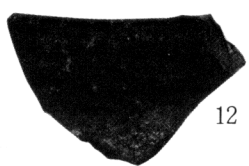
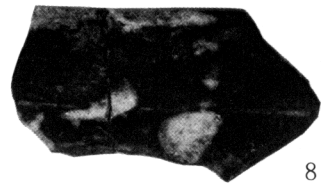
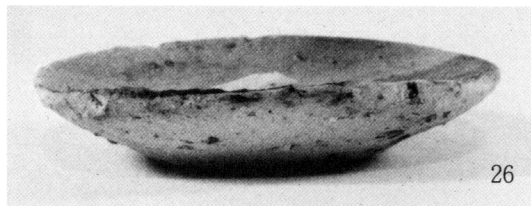
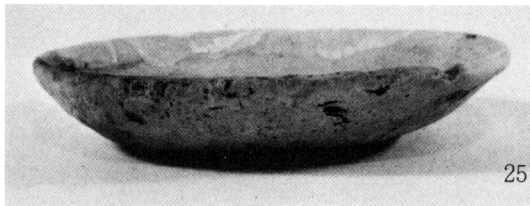
(1) 現地説明会風景



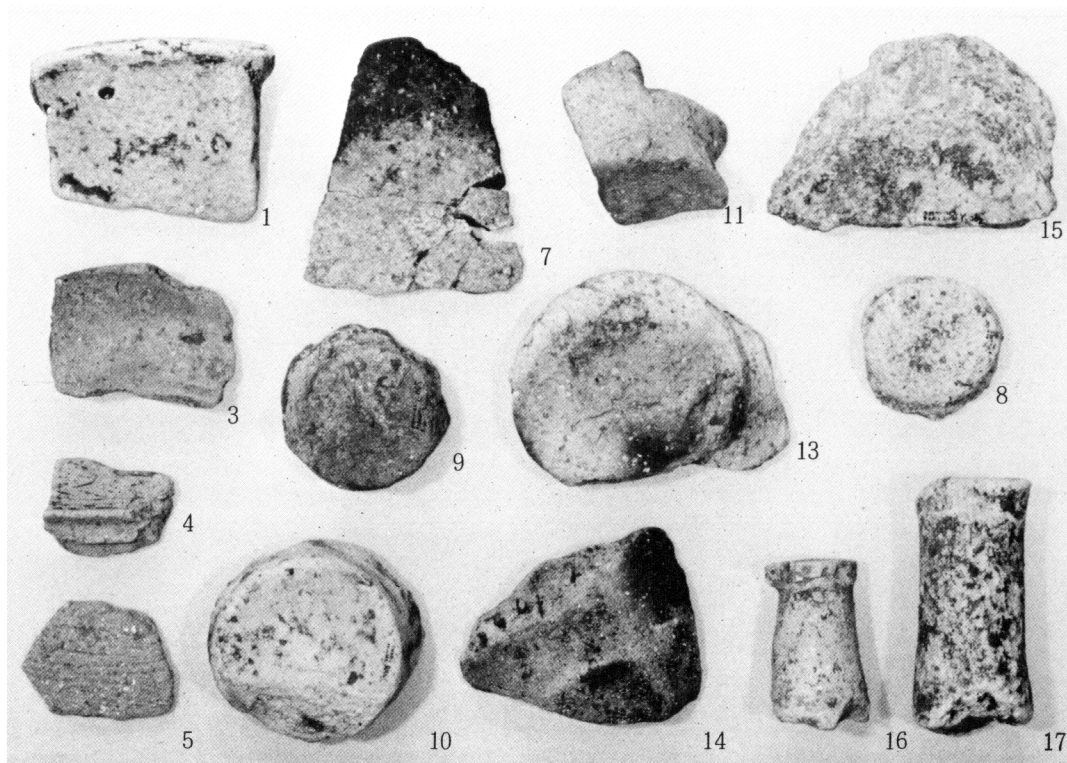
(2) 現地説明会風景



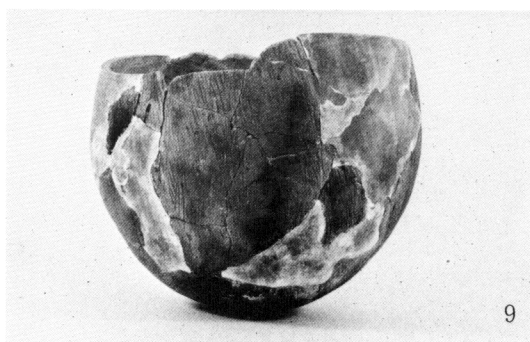
遺構出土土器 (PH1...3, SK1...4, SE2...5, SE3...6, SE4...9・13・19・20・22~24)



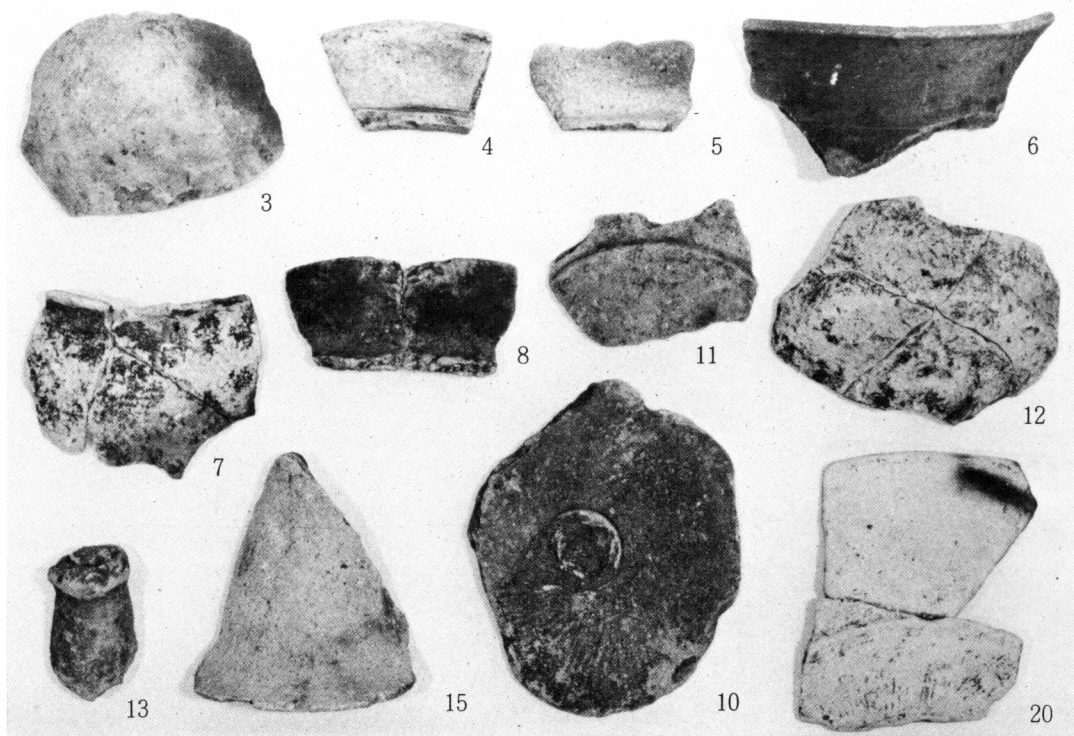
遺構出土土器 (SB1... 1・2, SE6... 7~31)



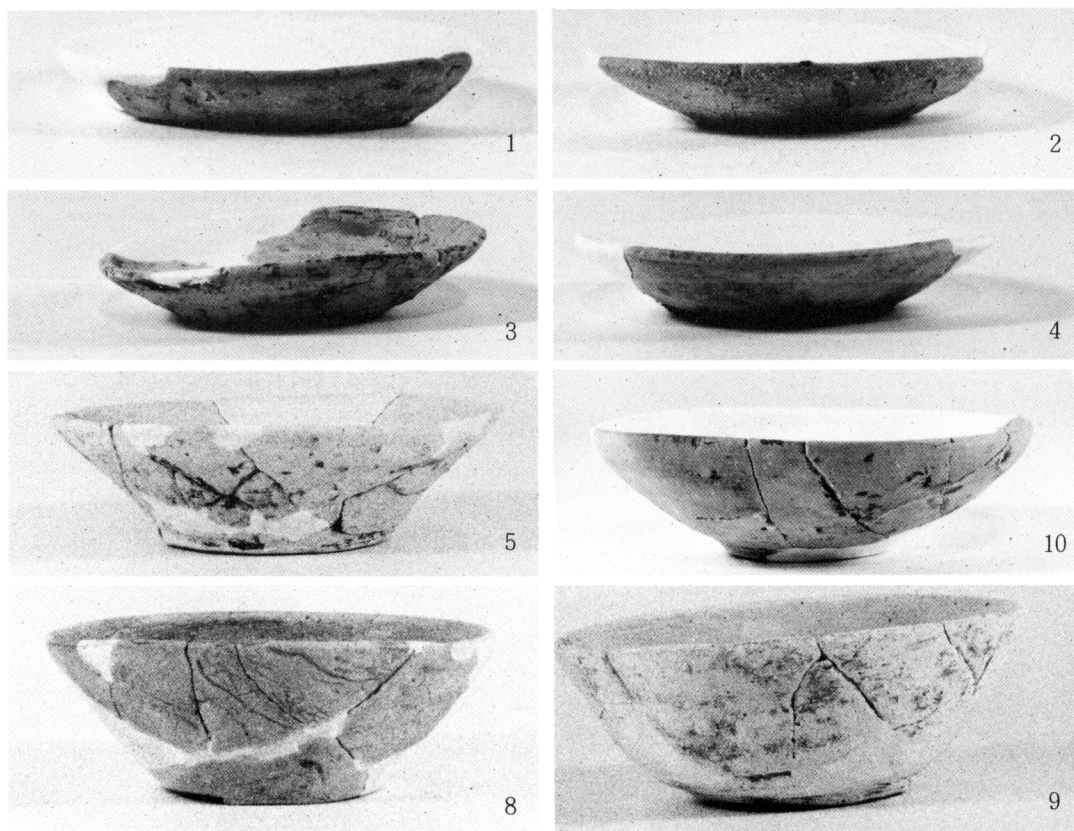
(1) 包含層出土土器 (弥生土器)



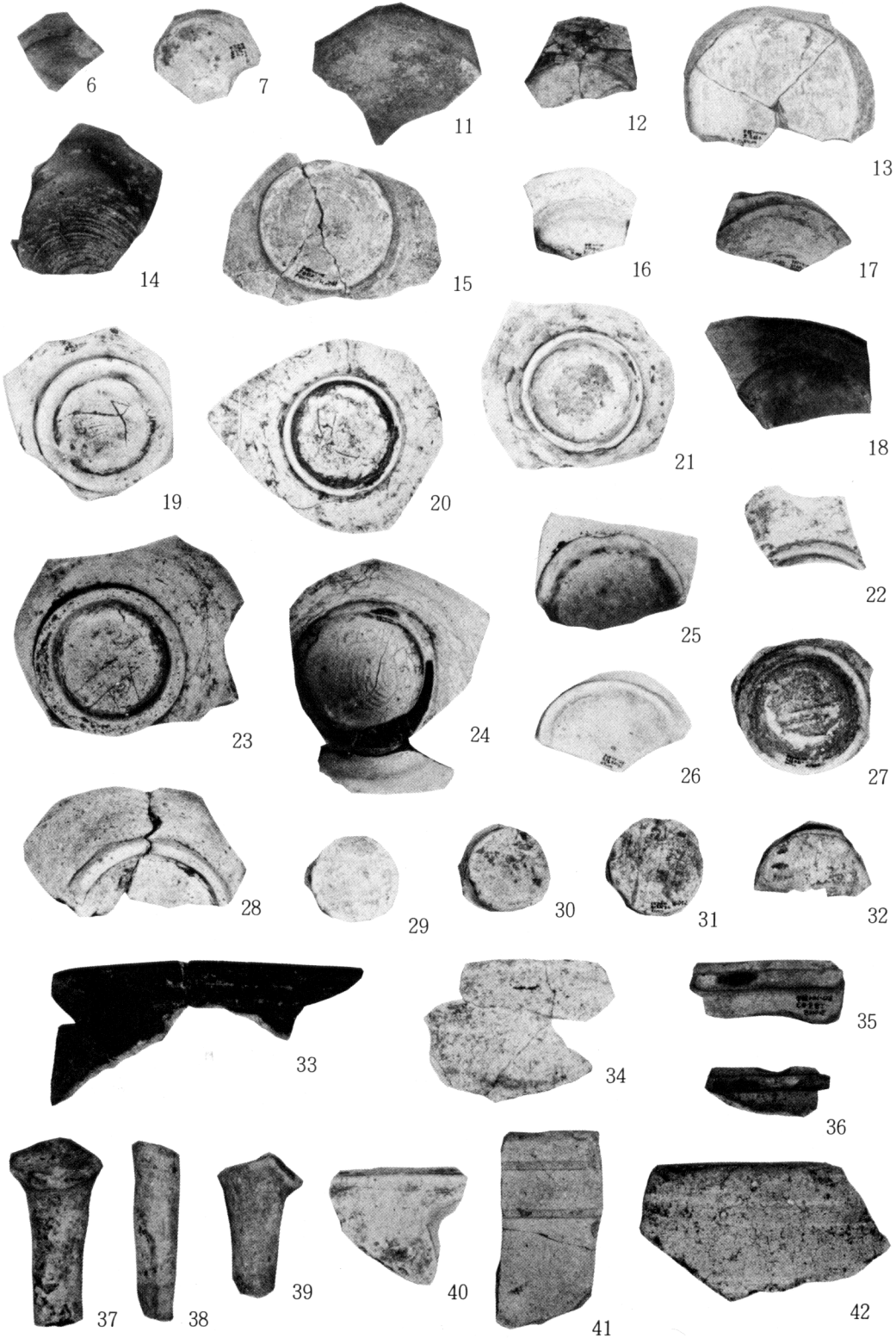
(2) 包含層出土土器 (土師器)



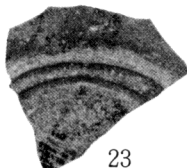
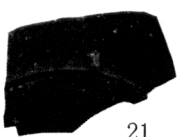
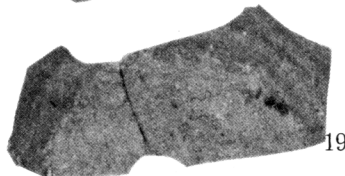
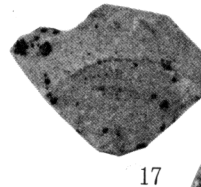
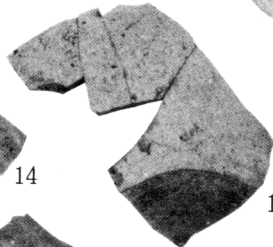
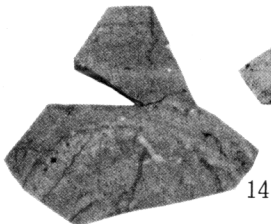
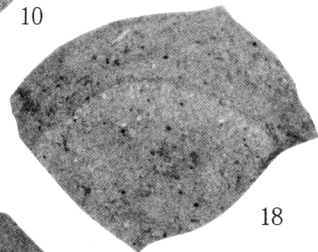
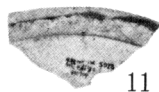
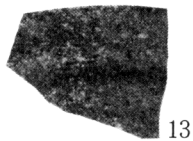
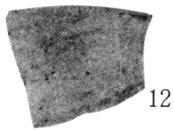
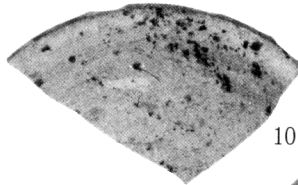
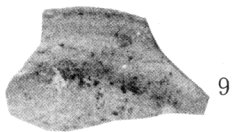
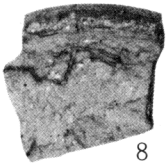
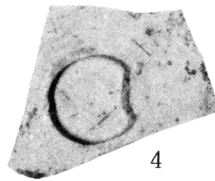
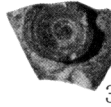
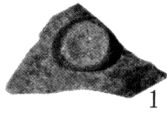
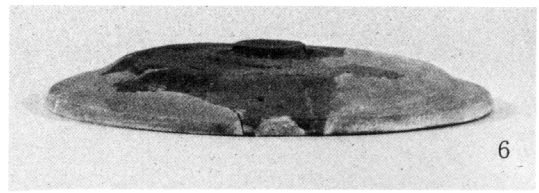
(1) 包含層出土土器 (土師器)



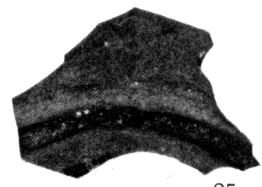
(2) 包含層出土土器 (土師器)



包含層出土土器（土師器）



20



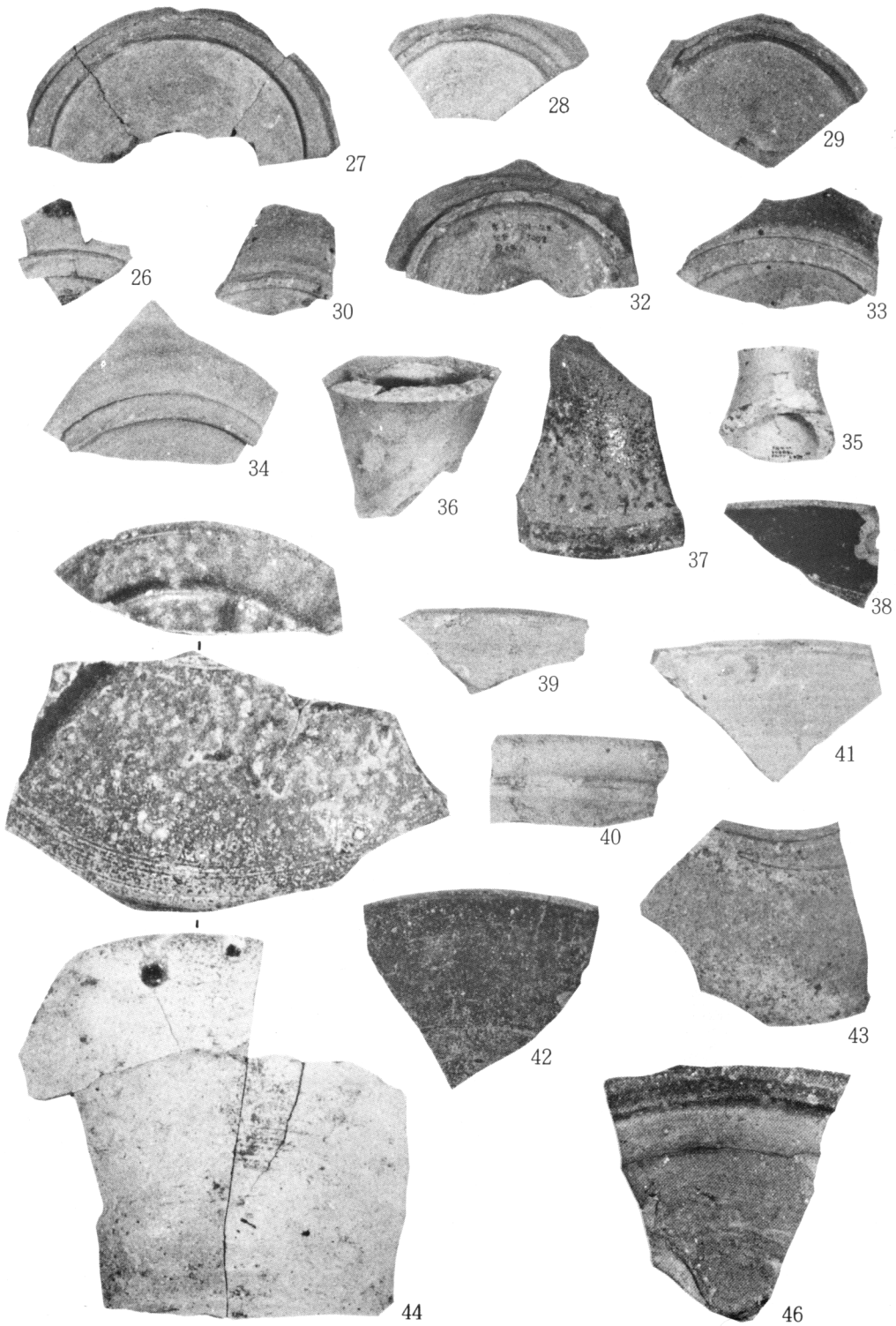
21

23

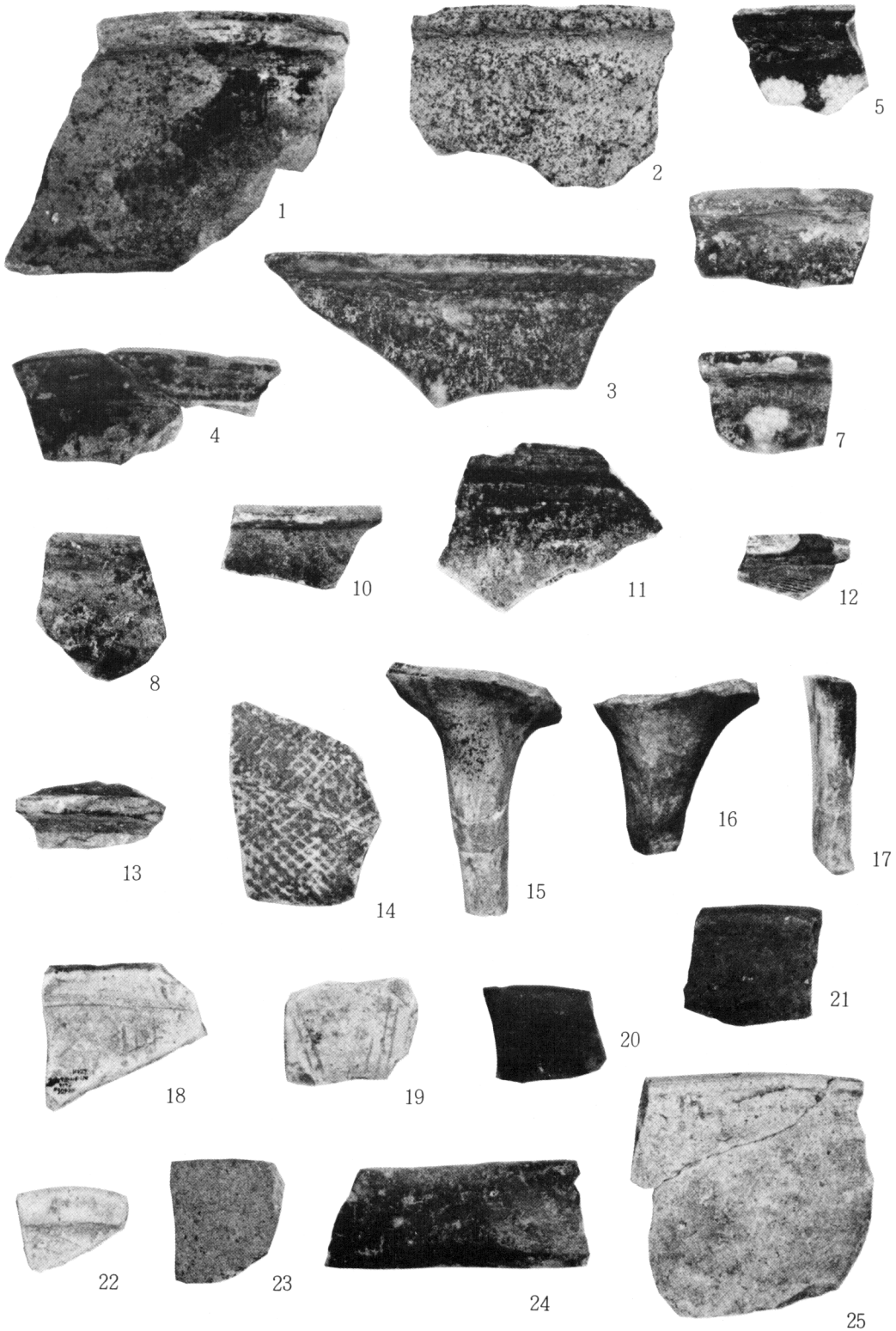
24

25

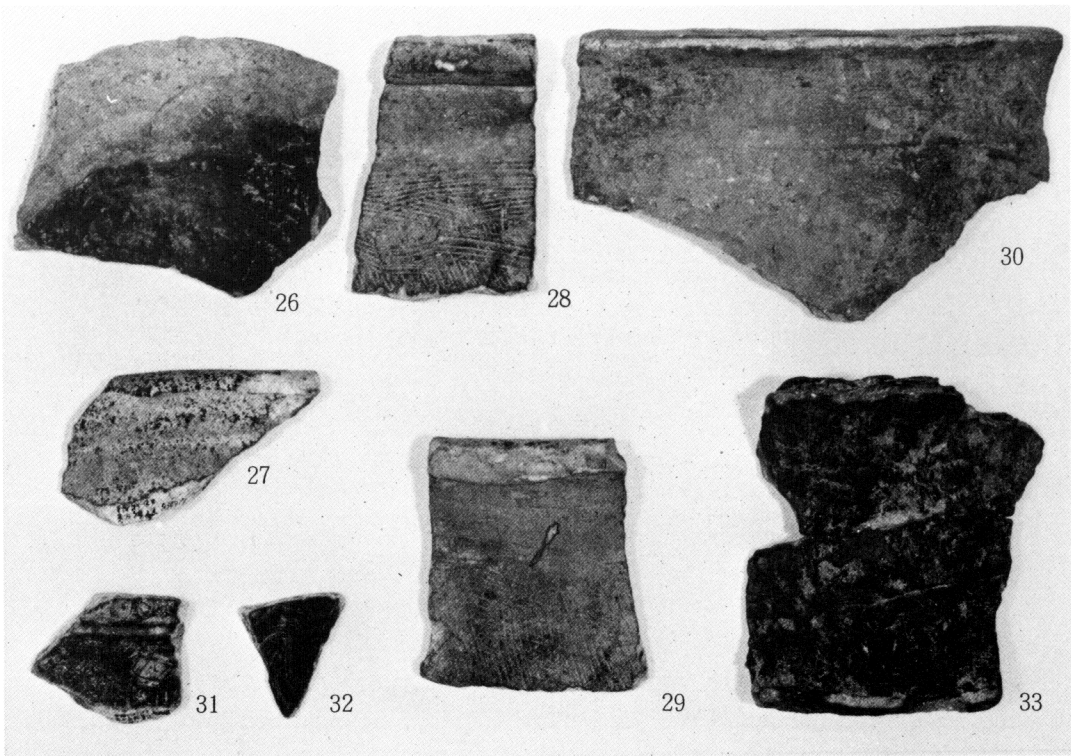
包含層出土土器 (須恵器)



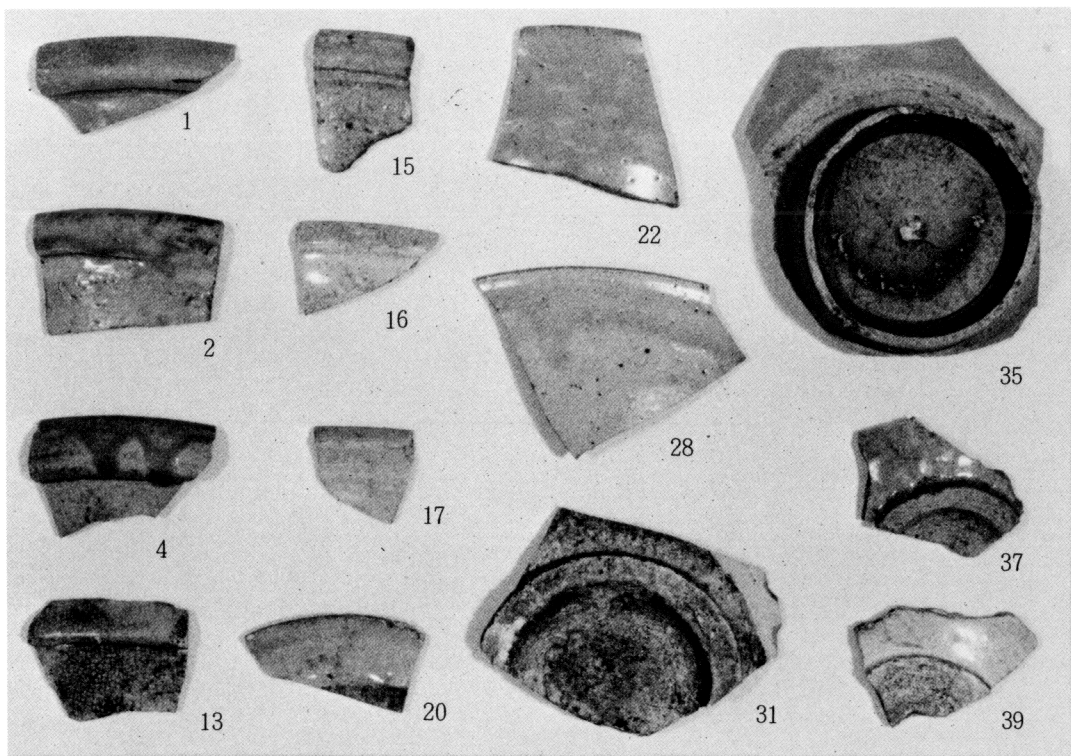
包含層出土土器 (須恵器)



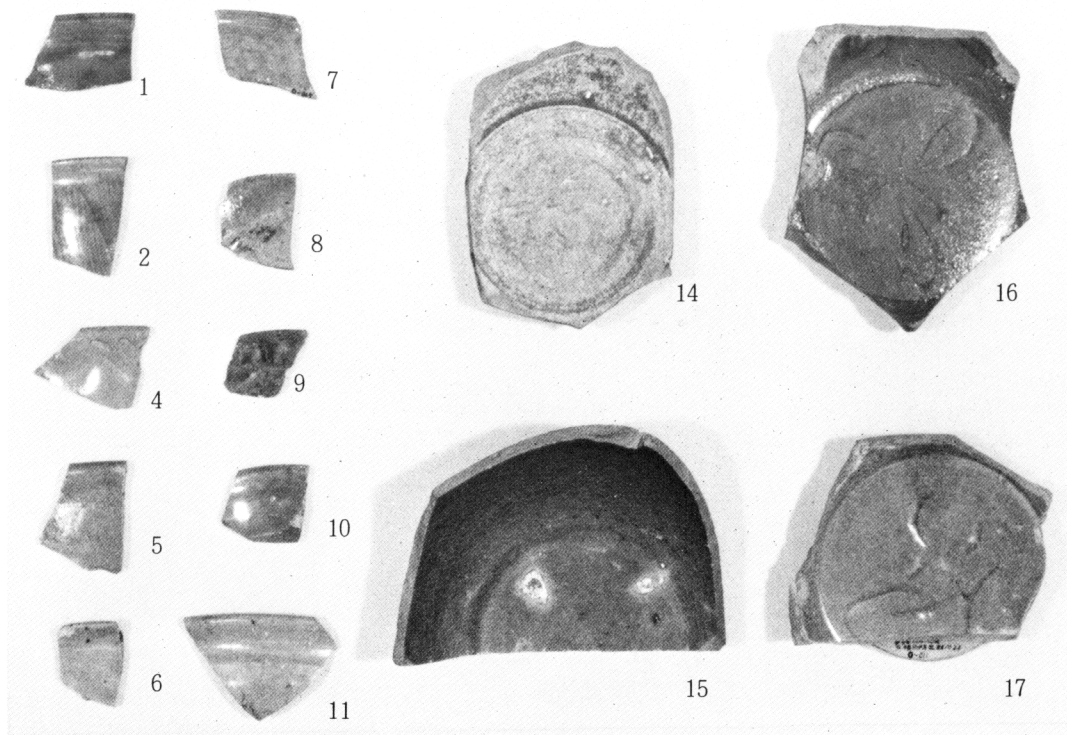
包含層出土土器（瓦質土器）



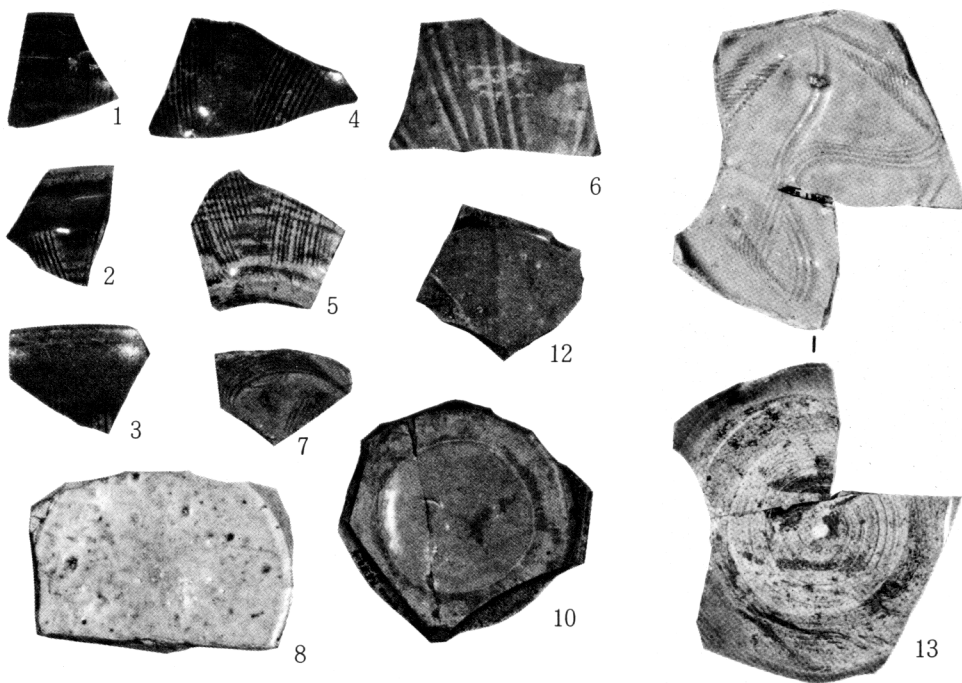
(1) 包含層出土土器 (瓦質土器)



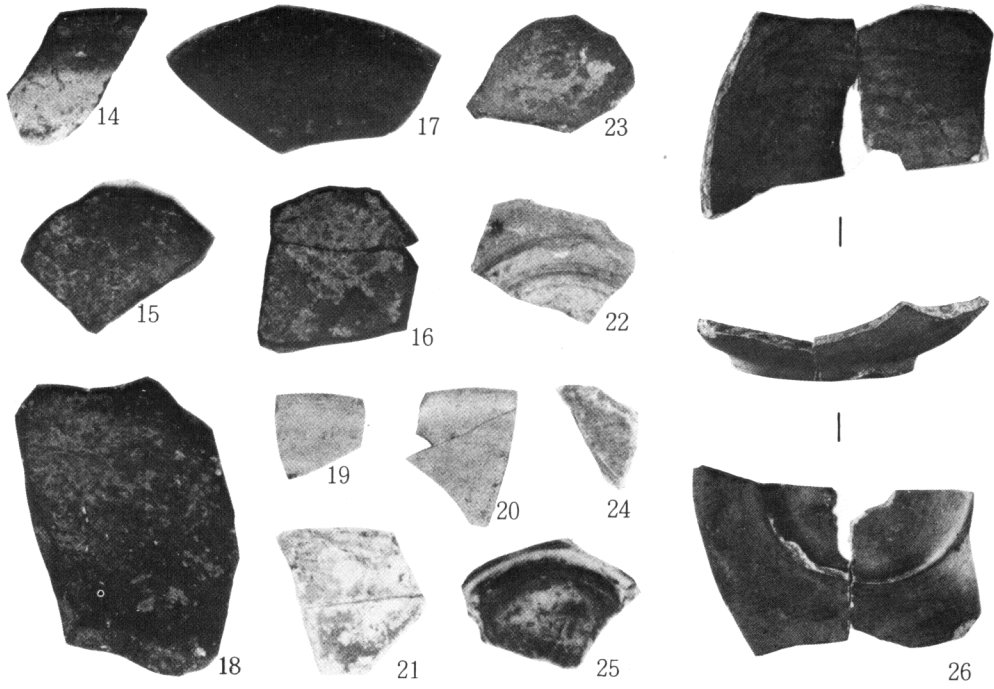
(2) 包含層出土土器 (白磁)



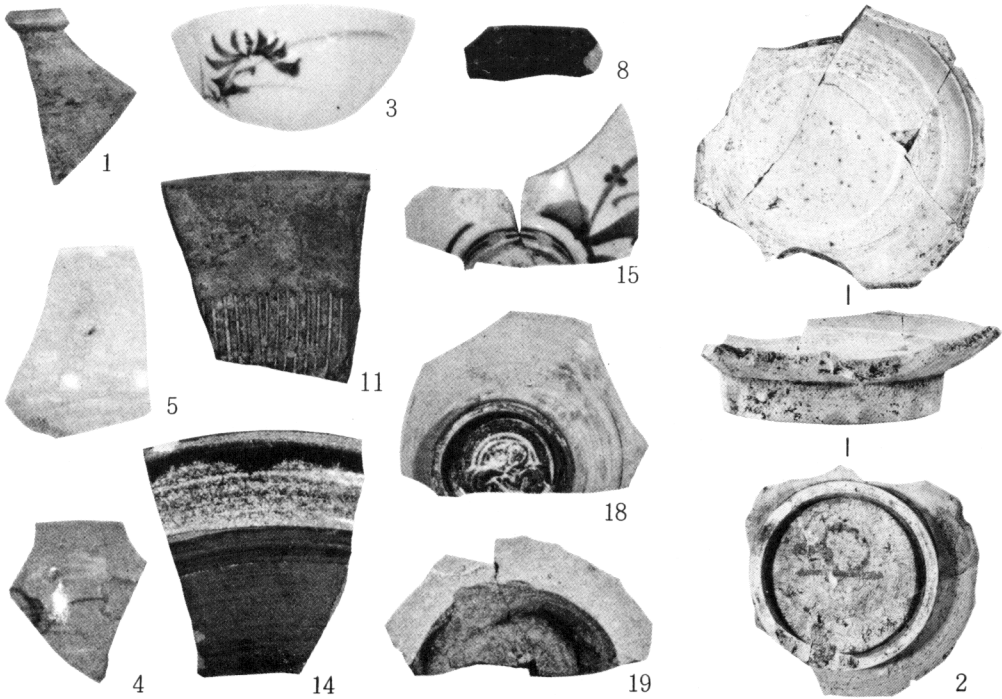
(1) 包含層出土土器 (龍泉窯系青磁)



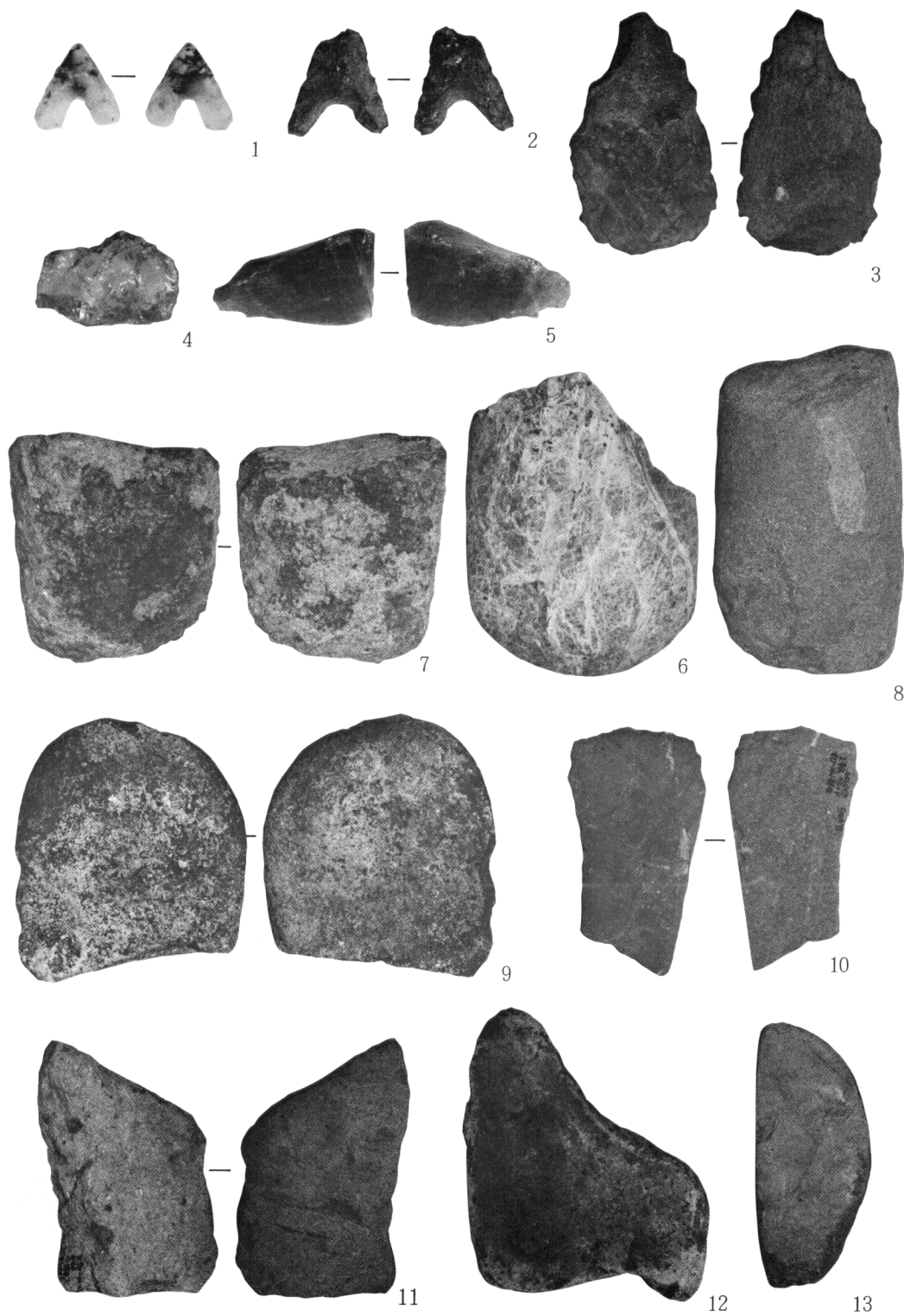
(2) 包含層出土土器 (同安窯系青磁)

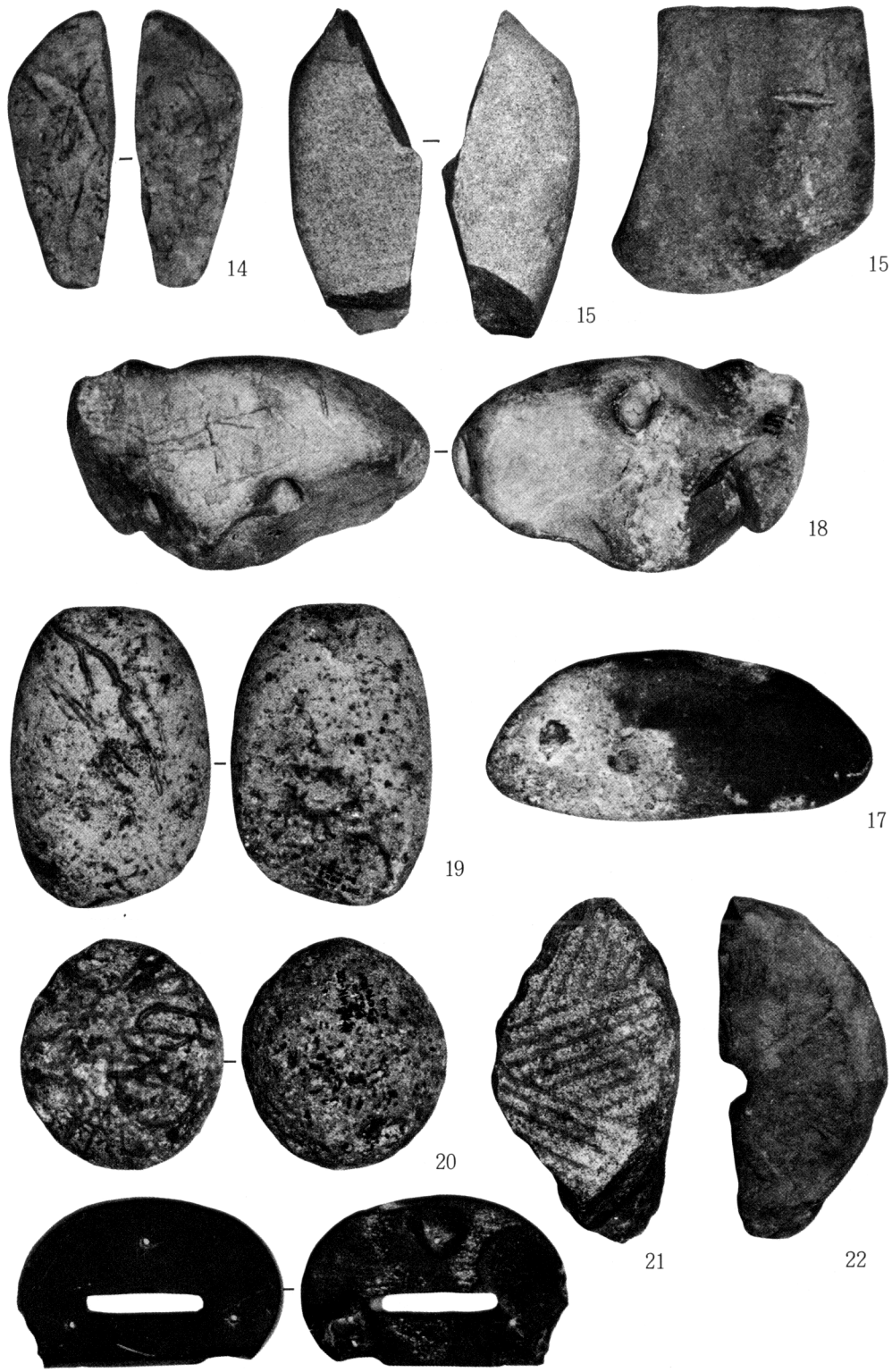


(1) 包含層出土土器（黒色土器14~18, 緑釉陶器19~23, 瓦器24~26）



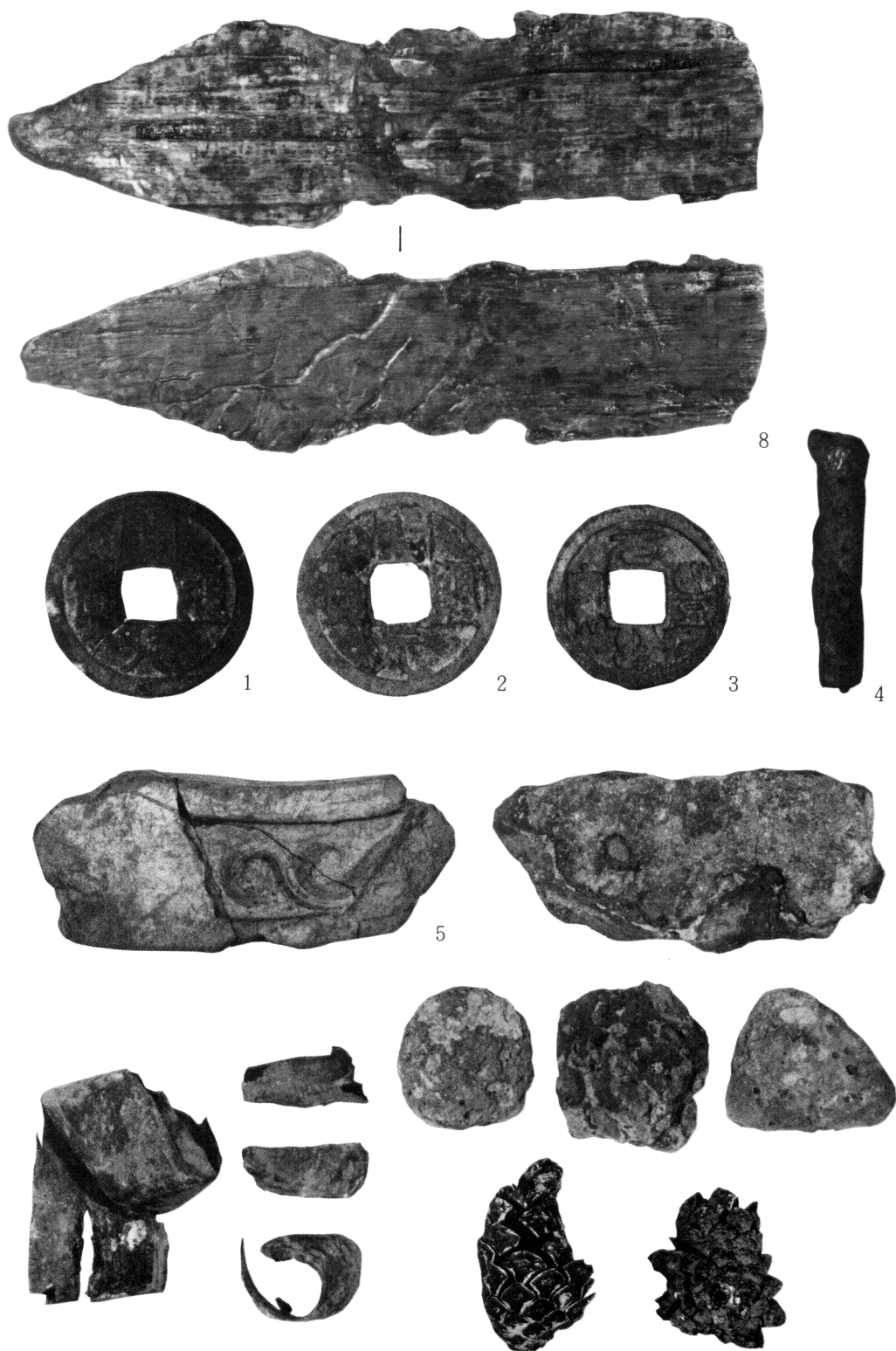
(2) 包含層出土土器（国産陶磁器ほか）





包含層出土石器・石製品





包含層出土木製品・金属器・瓦・スラグ・植物遺体